



Title	「新化公学校沿革誌」「新化農業補習学校沿革誌」：植民地台湾の教育史
Author(s)	北村，嘉恵；樋浦，郷子；山本，和行
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要，126，298-190
Issue Date	2016-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.126.298
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62515
Type	departmental bulletin paper
File Information	101-1882-1669-126.pdf



「新化公学校沿革誌」 「新化農業補習学校沿革誌」 —— 植民地台湾の教育史

北村 嘉恵* 樋浦 郷子** 山本 和行***

【要旨】 本稿は、中華民国台南県の市立新化国民小学および国立新化高級工業職業学校が所蔵する植民地関係史料の中から学校沿革誌

を翻刻し、台湾地域史および帝国日本教育史の基礎史料として集積と共有化をはかるものである。

近年台湾では学校史料への関心が高まりを見せ、学校所蔵史料の調査・整理とともに、これらを利用した学校史研究が一定の蓄積をみつつある。日本でも、アーカイブズ学的な関心から、各都道府県に現存する史料の俯瞰的な調査が進みつつある。ただし、悉皆的な調査や比較検討の重要性が指摘されながらも、個別の学校や自治体に視野が限定されがちな傾向は否みがたい。こうした状況をふまえ筆者らは、帝国日本の全域に視野を開きつつ教育史資料の所在調査・整理を段階的・体系的に進めるとともに、地域社会に視点を据えて東アジアの植民地化・脱植民地化の道筋を解明していくことをめざしている。本稿は、その初段階における報告である。

【キーワード】

地域史 帝国教育史 学校史料 植民地化／脱植民地化 台南

解題

一、本稿の目的

本稿は、中華民国台南県の市立新化国民小学および国立新化高級工業職業学校が所蔵する植民地関係史料の中から学校沿革誌を翻刻し、台湾地域史および帝国日本教育史の基礎史料の集積と共有化をはかるものである。

台湾では、この十五年ほどの間に学校史料への関心が高まりを見せ、学校所蔵史料の調査・整理とともに、これらを利用した学校史研究が一定の蓄積をみつつある⁽¹⁾。総じて利用した資料の偏りがそのまま叙述に投影される傾向が強く、新たな史料の発掘・利用が歴史叙述の深まりにつながっているとは必ずしもいえない側面があるものの、着実な進展もみられる。地域の歴史資料としての重要性という観点から中国語訳とともに学校沿革誌の復刻を行った林廷輝・林修澈や所澤潤・林初梅の蓄積⁽²⁾、広域的な視点から学校史料の現存状況を調査・整理したう

* 北海道大学大学院教育学研究紀要・准教授
** 国立歴史民俗博物館研究部・准教授
*** 天理大学人間学部・准教授
DOI : 10.14943/b.edu.126.298

えて内容分析を試みた陳思琪や江燭乙の論文^③、長期的な視野のもとで家族・地域・近代学校の関わりを描き出した張秀琪の研究などである。

一方、日本においては、より早い時期から史料としての学校文書に関心が向けられており、地方自治体編纂の資料集などに翻刻が収められてきたほか、学校文書を活用した地域教育史研究に一定の蓄積がある^④。近年は、アーカイブズ学的な関心から、各都道府県に現存する史料の俯瞰的な調査が進みつつある^⑤。ただし、悉皆的な調査や比較検討の重要性が指摘されながらも、個別の学校や自治体に視野が限定されがちなる傾向は否みがたい^⑦。

こうした動向をふまえて筆者らは、帝国日本の全域に視野を開きつつ教育史資料の所在調査・整理を体系的・段階的に進めるとともに、地域社会に視点を据えて東アジアの植民地化・脱植民地化の道筋を解明していくことをめざしている。本稿は、その初段階における報告である。史料全文の翻刻に先立ち、以下では、まず近代日本における学校沿革誌作成に関する例規類を整理し、植民地台湾で学校沿革誌が作成されるに至った経緯とその特徴を確認する。次いで、新化地域の変遷および新化国民小学・新化高級工業職業学校の沿革を概観したうえで、両校所蔵史料の全容および学校沿革誌の内容を紹介する。

二、学校沿革誌とは

学校沿革誌と呼ばれる史資料にはいくつかの類型がある^⑧。本稿が取り上げるのは、所管官庁の指示にもとづき、当該校の沿革や現況を継続的に記録した学校備え付けの帳簿である。近代日本においては、「学制」公布の数年後に学校沿革誌作成の早い例をみることができ、

一八八〇年代後半ごろから、永久保存を義務づけられた引き継ぎ表簿という性格の学校沿革誌が全国的に作成されるようになっていったとされる^⑩。

学校沿革誌作成の契機に関わって注目されるのは、中央政府ではなく府県や郡・市が独自に沿革誌作成を指示していたことであり、とくに「学制」初期には、千葉県などが「其草創ノ艱難ヲ知ラスンハ其整備モ亦保ツヘカラサルノ恐レアリ」という状況認識のもと「後ノ人ヲシテ草創ノ難キヲ鑑ミ守成ノ易カラサルヲ戒シメシムル」ことを沿革誌作成の目的として示したように、「益学事ノ拡張」（千葉県）、「益学事ノ拡充」（茨城県）を図る方策のひとつとして位置づけられていたことである。また、学校沿革誌作成が一般化する過程では、視学巡視や小学校長会などを通じて記載法の統一が指示されるとともに、郡教育品展覧会の出品物として審査の対象となったほか、県教育会が機関誌上で模範的な作成例を掲載するなど、展覧会や教育雑誌といった媒体が学校沿革誌の一般化・定型化に一定の役割を担ったことも興味深い^⑪。

植民地台湾では、総督府が学校制度創設に着手してまもない時期に、地方庁および総督府の令達を通じて学校に備えるべき帳簿のひとつとして定着していくこととなる。管見の限り、学校沿革誌の調製を指示した最も初期の令達は、一八九八年十二月九日、「台湾公学校規則」（一八九八年八月、府令第七十八号）にもとづき台南県が定めた「公学校規則施行細則」（県令第三十七号）、および同日付で台南県知事が発した訓令甲第百壹号である。前者は第六条に「公学校ニ於テハ左ノ表簿ヲ備フルヲ常例トシ其他ハ必要ニ応シ便宜備フヘシ」と定め、次の十種の表簿を示した。

- 一 生徒出席簿
- 二 学籍簿
- 三 学校沿革誌
- 四 卒業及修業証書台帳
- 五 学事ニ関スル諸規則
- 六 試験問題及成

續表並操行査定表ノ七 学校〔年〕末調査ノ八 備付品台帳
 ノ九 学校日誌ノ十 職員出勤簿

この規定にもとづき訓令甲第百壹号では、各表簿の様式・用紙を定めるとともに、「学校沿革誌記載事項」として次の二十項目とその要領を示した。^⑪

創立ノ変更分合ノ設置区域ノ経費収入支出ノ基本財産ノ授業料ノ寄附ノ図書ノ機械器具及標本ノ諸規程ノ修学生徒ノ試験ノ生徒賞与ノ職員ノ職員賞与ノ学務委員ノ学校管理者ノ官吏巡視ノ学事尽力者ノ学事ノ状況

創立年月日や「学事尽力者」などの数項目を除き「毎学年末ニ於テ」「毎年度」「毎年」記入することや、帳簿ごとに表紙を付すこと等が求められている。後述するように、本稿で紹介する新化公学校沿革誌の記載項目は、おおよそこの訓令に準拠しているといえる。

翌八九年十二月十一日、台湾総督府は「学校ニ備ヘ置クヘキ諸帳簿ノ種類」(内訓第五十七号)をもって、地方庁所管の官公立各学校が「常例」として備え置くべき帳簿十五種を示し、翌年一月までに「悉皆整理セシムヘシ」と達した。^⑫ 加えて、地方庁が帳簿の種類ごとに用紙を定めるか記載例を示す等の方法により「管内ヲ通シテ詳略区區ナラス簡明ニシテ要領ヲ叙記」するよう求め、帳簿に盛り込む事項を例示した。このうち学校沿革誌については次の各事項が示されている。

学校創立ノ起因、校舎校地資産等ノ関係〔一〕創立者ノ功績〔二〕創立年月日、毎年職員ノ異動生徒ノ員数並学業進否ノ状況、

毎年度経費ノ増減或ハ学校ノ盛衰利害ニ関係アル事項〔三〕其ノ他特別ニ記録スヘキ事実

この内訓第五十七号は、その後、総督府ないし台湾教育会が編纂した『台湾学事法規』の各版や、地方庁が編纂した例規類集に継続的に収録されている。^⑬ 上掲の帳簿のうち学籍簿などは後に法令をもって作成が義務づけられるが、学校沿革誌に関しては、一九四〇年代に至るまで総督府内訓第五十七号および各地方庁の令達が作成の根拠であったと考えられる。^⑭

この内訓にもとづく地方庁の令達類として確認できたのは、宜蘭庁と台南県の訓令である。いずれも総督府内訓第五十七号の主旨を所管官庁・学校に示達する内容となっているが、宜蘭庁では記述例を含めてほぼ同文の訓令を発しているのに対して、台南県の場合は、県令をもって前年の県令第三十七号第六条に「職員名簿及履歴書」など三項目を追加するとともに、尋常小学校や師範学校等に対しても前年の台南県訓令甲第百壹号の記載例に準拠するよう訓令を発しており、地方庁により対応に幅がある。

総督府内訓第五十七号に示された期日(明治三十三年一月)以降にも、各学校で備え付けるべき帳簿の種類およびその様式について各地方庁が令達を発しており、そのなかに学校沿革誌が含まれている。これらの令達中には、帳簿の種類を列挙するにとどまり独自の様式や記載例が示されていない場合も散見される一方、総督府内訓と近似した内容・文言の指示が長期にわたり確認される。たとえば、台北県は、一九〇〇年三月訓令第十号・第十一号をもって学校備付け表簿十項目およびその様式を定めたが、学校沿革誌の記載例は示されていない。^⑮ 一方、宜蘭庁は、一九〇二年七月訓令第十六号をもって前述の訓令

(一八九九年、第九十四号)を廃止し新たに表簿十九種とその様式を定めている。学校沿革誌の記載例は総督府内訓とほぼ同文のままであるが、学校日誌の様式を新たに定めるなど日常的な記録の定型化が進みつつあるとみることができる。²²⁾また、新竹庁は、一九〇九年五月総務課長通達をもって公学校備付け帳簿として学校沿革誌を含む二十一種を定めた後、『新竹州例規類纂』(一九四〇年)にも同通達および総督府内訓第五十七号を掲載している。²³⁾

学校文書の作成・保存に関わる総督府・地方庁の令達類については時期や地域による異同や相互の関係に留意しつつさらに精査が必要であるが、以上の検討からいくつかの特徴を指摘することができる。まず、台湾総督府が学校創設を進めた一八九〇年代後半は、日本本国で学校備付けの表簿として学校沿革誌の作成・保管が一般化しはじめた時期にあたり、植民地台湾では学校制度の導入とほぼ同時期に学校に備えるべき帳簿として学校沿革誌の作成が指示されたといえる。その際、台南県が先行的に学校帳簿の一つとして位置づけてその記載例を示したこと、次いで総督府内訓にしたがい各地方庁が令達をもって記載内容の定型化を図ったことが特徴である。

もっとも、個別の学校レベルに目を向けると、学校沿革誌の叙述は「管内ヲ通シテ」のみならず一冊の沿革誌においても「詳略区」にわたるといふ印象を受ける。学校文書の所蔵状況についての悉皆的な調査とその内容検討は今後の課題であるが、本稿では台湾島内および日本本国の事例を適宜参照しながら、新化の二つの沿革誌の特徴を紹介することとする。

三、新化国民小学・新化高級工業職業学校所蔵史料の概要

(一) 新化地域の変遷

両校の現所在地である台南市新化区は、台南市街地から北東へ約十五キロメートルに位置する。嘉南平原の南東端にあたり、西方には安平港が開け、東方は烏山嶺から阿里山麓に連なる。北方に曾文溪、南方に許厝港が台湾海峡へと西流し、その支流数条が管内を流れる。

嘉南平原一帯には十七世紀以前より先住民シラヤ族の集落が点在し、現在の新化区にもタボカン社が形成されていた。²⁴⁾十七世紀前半に安平港を占拠したオランダ東インド会社が嘉南平原の先住民集落に派遣した政務員(宣教師)らの報告によれば、十七世紀半ばタボカン社の人口は四百〜五百人前後であったという。²⁵⁾他方、明清期を通じて対岸の泉州・漳州から台湾西部を中心に漢人の移住が進む。移民の動向は流動的であるが、一八世紀前半には約三百五十戸の大目降庄が形成されていたとの記録もある。²⁶⁾このような漢人移住者の増加等にもない、同地一帯のシラヤ族は東部の山麓方面へと徐々に転住を余儀なくされることとなる。

台南国語伝習所大穆降分教場が開設した一八九八年当時、大穆降辨務署管内の人口は約六万九千人、この大部分を漢人が占め、内地人は約百八十人、シラヤの居住者は報告されていない。²⁷⁾分教場設立認可の上申書には、大穆降が「人家稠密ノ市街」であり、「教場及ヒ経費ニ関シテハ夫々方法モ相立」かつ「学生モ六拾名以上ヲ募集シ得ルノ見込有之候」と学校設置候補地としての妥当性が説明されている。²⁸⁾だが、辨務署管内には他に関帝廟、左鎮、灣裡などの市街地があり、大穆降の人口四千五百余は十九堡里(下級行政単位)のうち五番目の規模にすぎない。各地でゲリラ的な武装蜂起が続く中、大穆降に辨務署、公学校、小学校、糖業試験場といった官公施設が連鎖的に設置されていく

プロセスを地域住民の動向と重ねて理解していくことが重要であろう。⁽³¹⁾
 学校沿革をたどるにあたり、新化を管轄する地方行政組織の変遷を概観しておく。台湾総督府の統治体制が軍政から民政に移行した後、地方制度の改編にともない、台南県警察署（一八九六年四月）、台南県台南警察署大穆降出張所（一八九六年九月）、台南県大穆降警察署（一八九七年五月）、台南庁大目降支庁（一九〇一年十一月）、台南州新化郡（一九二〇年七月）と変化する。中華民国接收後は台湾省台南県新化鎮に改編され、二〇一〇年台南市新化区に再編されて現在に至る。この間、大穆降は、辨務署開設を起点とし、大目降支庁、新化郡役所、新化鎮公所、新化区公所の所在地として、地方行政の一拠点たる位置を占めるようになる。⁽³⁴⁾

（二）学校の沿革概略

新化国民小学は、一八九八年九月に開設した台南国語伝習所大穆降分教場をその前身とし、「台湾公学校令」（勅令第百七十八号）施行にともない、同年十月大穆降公学校として開校した。同校には当初、台湾人児童を対象とする本科のほか、成人を対象とする速成科（一八九八（一九九年）、内地人児童を対象とする小学科（一九〇二（一九二二年））が置かれた。その後、大目降公学校（一九二二年十二月）、新化公学校（一九二二年四月）と改称した後、一九四一年四月「改正台湾教育令」（勅令第百五十五号）施行にともない新化北国民学校と改称する。この間、高等科（一九二二（二六年））が一時期設置されている。日本による統治が終結し中華民国が接收した後は、「国民学校法」（一九四四年三月）にもとぎ新化鎮新化第一国民学校（一九四六年一月）、新化国民学校（一九四六年十二月）と改称し、一九六八年一月「九年国民教育实施条例」（総統令）施行にともない新化国民小学と改称して、現在に至る（以下、総称として新化公学校を用いることがある。また現在の

学校名は新化国小と略称する）。

新化高級工業職業学校は、一九二六年三月に新化公学校併置の公立新化農業補習学校として設置認可を受けた後、新化農業専修学校（一九三一年四月）、新化専修農業学校（一九四一年四月）と改称する。中華民国による接收後は、県立新化第一初級農業職業学校（一九四六年二月）、県立新化初級農業職業学校（一九四九年二月）、省立新化高級農業職業学校（一九六九年八月）、国立新化高級工業職業学校（一九八二年八月）と改編を重ね、現在に至る（以下、総称として新化農補を用いることがある。また現在の学校名は新化高工と略称する）。



図1 新化公学校・新化農業補習学校正面（1920年代末）

校門中央に制服制帽を着用した男子生徒2名が立つ。手前の軌道は台南市街地から新化市街地を經由し玉井に至る。（新化国民小学所蔵）

以上が本稿で取り上げる学校沿革誌を所蔵する二校の沿革概要である。管内各地には、左鎮庄分教場（一九〇〇年七月開設、一九〇四年六月廃止）をはじめとして、山仔頂分校（一九〇八年一月開設、一九一七年四月独立）、新市分校（一九一七年四月開設、一九二〇年四月独立）、崗仔林分校（一九一八年四月開設、一九二一年四月独立）、菜寮・西勢・大坑尾・草山の各分離教室（いずれも一九二〇年四月開設）、荪拔林分離教室（一九三二年七月開設）が順次設置された（図2参照³⁶）。さらに新化公学校の併置・附設施設として、上述した新化農業補習学校のほか、一九三三年に新化女子技芸講習所（一九四〇年新化家政女学校に改編）、一九三四年に新化公学校附設幼稚園が開設している。新化地域には十七世紀後半より教会附設の学校や民間の書房など複数の教育施設が存在しており、大穆降分教場（公学校）はこれらと競合ないし規制・吸収しながら日本式／新式学校の導入・普及過程において中核的な役割を担うこととなる（図3参照）。

（三）学校所蔵史料の概要

二〇一四年十一月から二〇一六年三月にかけて新化国民小学・国民中学・高級工業職業学校において所蔵を確認した史料の一覧を表1に掲げる³⁷。

表1 新化国小・国中・高工所蔵史料

所管	史料名	年代	作成者	形態
■新化国民小学				
日拠時代	学校沿革誌	1898-1928	新化国民小学	厚紙表紙 紐綴じ
日拠時代	教職員履歴書巻	1898-1947	新化国民小学	厚紙表紙 紐綴じ
昭和八年三月卒業	第二十八回卒業生学籍簿	1927-1933	新化北国民学校	厚紙表紙 紐綴じ
昭和十年度	第三十一回卒業生学籍簿	1930-1936	新化北国民学校	厚紙表紙 紐綴じ
昭和十二年度	第三十三回卒業生学籍簿	1928-1938	新化北国民学校	厚紙表紙 紐綴じ
昭和十三年度	第三十四回卒業生学籍簿	1933-1939	新化北国民学校	厚紙表紙 紐綴じ
昭和十六年度	第三十七回修了生学籍簿	1936-1942	新化北国民学校	厚紙表紙 紐綴じ
昭和十八年度	第三十九回修了生学籍簿	1933-1939	新化北国民学校	厚紙表紙 紐綴じ
〔昭和二十年度 第四十一回修了生学籍簿〕		1940-1946	新化北国民学校	紐綴じ
〔学籍簿〕		1937-	新化北国民学校	
自大正十三年三月十五日至現在	修了台帳 高等科	1924-1947	新化北国民学校、新化国民学校	厚紙表紙 紐綴じ
各届卒業生留影〔アルバム〕			新化国民学校	赤装丁表紙 黒台紙
学生活動剪影〔アルバム〕			新化国民学校	赤装丁表紙 黒台紙
往事如昨〔アルバム〕			新化国民小学	クリアファイル式アルバム
〔写真〕			新化国民小学	デジタルデータ
奉安庫			新化公学校	
鐘				
■新化国民中学				
奉安庫			新化尋常小学校	
奉安殿（復原）			新化尋常小学校	
奉掲設備（部分）			新化尋常小学校	
■新化高級工業職業学校				
学校沿革誌		1926-1960 1969, 1982	新化農業専修学校、新化農業職業学校ほか	紺クロス表紙 紐綴じ
〔昭和二年度以降〕卒業生学籍簿		1926-1940	新化農業専修学校	黒クロス表紙 紐綴じ
昭和十六年度以降卒業生学籍簿		1939-1946	新化専修農業学校	黒クロス表紙 紐綴じ
昭和十九年〔度〕入学生徒〔学籍簿〕		1944-1945	新化専修農業学校	黒クロス表紙 紐綴じ
〔昭和〕二十年度入学生徒〔学籍簿〕		1945	新化専修農業学校	茶クロス表紙 紐綴じ
民国三十八学年以前各科成績		1946-1949	新化農業職業学校	緑クロス表紙 紐綴じ

（凡例）「史料名」には、当該史料に標題を欠く場合等には〔 〕で補った。
「年代」には、当該史料に含まれる記載内容の時期を示した。

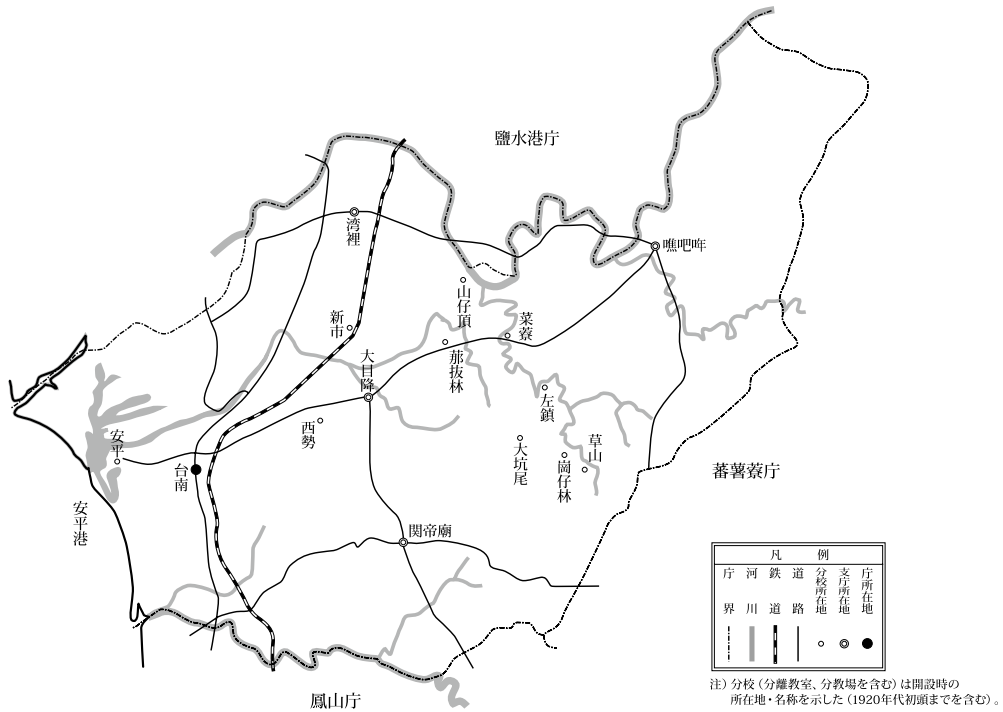


図2 台南市概略図(1910年頃)

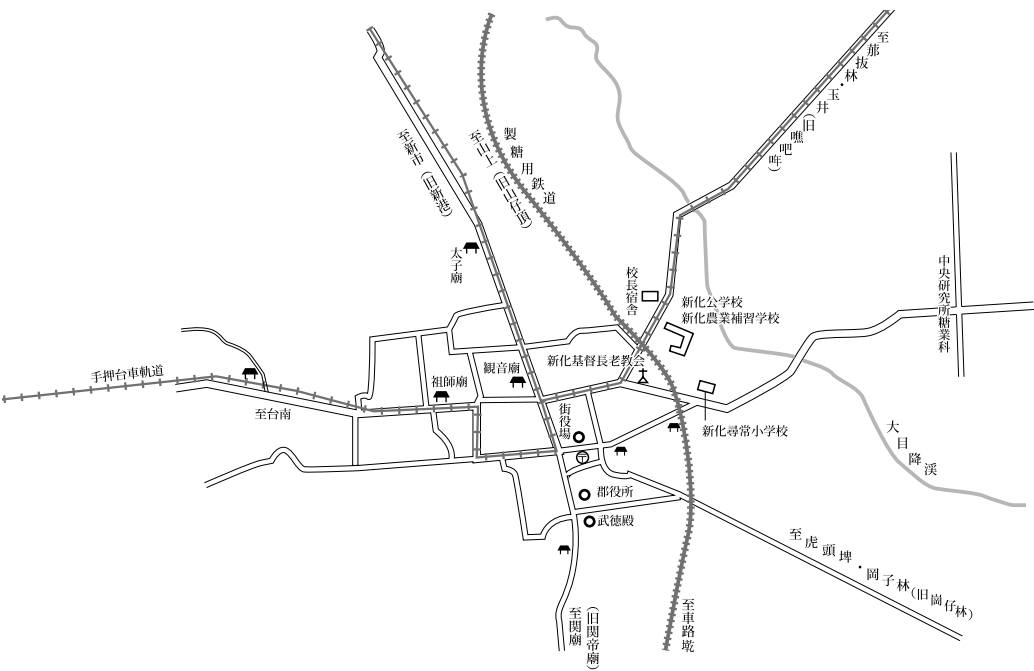


図3 新化街概略図(1920年代末)

新化国小所蔵の文書類のうち、学校沿革誌および職員履歴書綴は、厚紙で袋綴じされた形態で、表紙および背表紙に戦後に書かれたと推察される表題が付されている。いずれも水濡れの痕跡があり罫線等が一部消失しているほか、虫喰いや破損が進んでいる。

このうち学校沿革誌は、「大目降公学校沿革誌」と題する文書に始まり、分校・分教室を含む生徒・職員の異動、学級編成、授業料、寄附、敷地平面図等の記録からなる。用紙には、柱に印字のない罫紙（赤ないし朱線）が用いられており、特定の時期にまとめて記述した部分と随時追記したと思われる部分が混在する。項目によって記載内容の時期に幅があるが、総じて一九二〇年代後半以降の記録は含まれていない。

一方、履歴書綴は、冒頭に監督者（大穆降辨務署長）や学務委員等を含む名簿（一九二〇年度ごろまで）があり、次いで、初代校長に始まる職員（学務委員、雇、校医、青年学校指導員等を含む）の履歴書が一九四五年度分まで、おおよそ年代順に綴じ込まれている。なかには、中華民国接收もない時期の書込みや「服務証明書」等が若干含まれている^③。

学籍簿は、一部を除き厚紙で紐綴じされた形態で、表紙に表題が墨書されている。綴り紐の劣化・破損により簿冊が原型をとどめていない部分があるほか、表紙を含めて新化北国民学校期に作成・紐綴じされた状態が比較的保持されている。水濡れの痕跡や虫喰い・破損の状況は、学校沿革誌や職員履歴書綴とほぼ同様である。

アルバム・写真については、数度の貼り替えや複製（電子複写のうえラミネート加工など）がなされており、原史料が確認できないものもある。比較的近年の記録が多数を占めるが、公学校・国民学校期や中華民国接收後もない時期の卒業記念写真や、公学校に併置された

幼稚園の職員・児童の集合写真等を含み、周年記念事業の際に記入したと思われるキャプションが付されているものもある。

新化国小所蔵の奉安庫は施錠した状態で職員室の一角に置かれており、内部に若干の現用書類等が収められている。一方、隣接する新化国民中学の敷地（旧新化尋常小学校敷地）の一角には奉安殿および奉掲設備の一部（講堂の奉掲設備の扉部分と推定される）が移築保存されており、奉安殿内部には奉安庫が据えられている。相隣接する公学校と尋常小学校の奉護設備が揃って保存されている興味深いケースである^④。

新化高工で確認した史料は、学校沿革誌一点と学籍簿四点、成績簿一点の計六点である。いずれもクロス表紙・紐綴じの形態で保存されており、汚損等のほとんどない状態である。

このうち学籍簿は、卒業生学籍簿二点（一九四五年度卒業生まで）、入学生徒学籍簿二点（一九四五年度入学生まで）からなる。前者は、第一期生（一九二六年度入学、二七年度卒業）から第十八期生（一九四三年度入学、四五年度卒業）までの記録が年度順に配列され二分冊の形で保存されている。後者は、第一期生（一九四四年度入学）、第二期生（一九四五年度入学）の記録である。いずれもB5版の用紙に、生徒の氏名、寄留地、本拠地、生年月日、入学・卒業・退学年月日、入学前の経歴、退学事由、学年毎の学業成績および「身体ノ情况」のほか、「保護者」の氏名、寄留地、本拠地、職業、本人との関係といった欄が設けられている。一九三八年度入学者（以降）の書式には、新たに「卒業後ノ情况」「性行概評」「出席及欠席ニ対スル概評」「家庭環境」「志望及其ノ所見」といった欄が加わるが、全般的に無記入の欄が目立つ。第十八期の生徒たちは最終学年半ばで日本の敗戦・引揚および中華民国による接收を迎えることとなり、卒業年月日欄は「昭和」

という印字を抹消して「民國三十五年三月三十一日」と手書きされている一方、最終学年の評価欄は無記入となっている。同様に、第十九期は第一学年までの成績、第二十期は入学時の記載事項のみが記入され、他の欄は無記入である。両者とも表紙に貼付された表題の紙片が半ば剥がされた状態で、新たに「昭和十九年 入学名冊」「昭和二十年 入学名冊」とペン書したシールが貼付されている。

このような日本統治末期から民国接收初期の移行期を含め、農業補習学校として発足した当初から後期中等職業学校として改編される過程をつぶさに示しているのが学校沿革誌である。保管の過程で簿冊の綴じ直しが行われた痕跡があり、その際に用紙の配列が前後した可能性もある。記載事項としては、認可、予算、職員異動、設備、土地使用区画図、沿革など、公学校と共通する項目のほか、卒業生出身街庄別調、学校行事等の項目を含む。記載内容の時期は、おおよそ開設時から一九四〇年代前半期までをカバーしている。加えて、一九四〇年代後半以降に追記された記事が複数あるほか、一九四〇年代後半の学校概況や若干の公文書等が綴じ込まれている。

以上の史料のうち本稿が翻刻するのは、新化國小および新化高工所蔵の学校沿革誌である。公学校に関しては、新化農補が開校する一九二〇年代後半以降の記録が欠落している点が惜しまれるが、当初公学校に併置された農補の記録とあわせ読むことにより、新化という地域のなかで初等教育および初等後教育施設がどのような場であったかをより立体的に捉える手がかりとなるだろう。

表2 「新化公学校沿革誌」の内容構成

No.	項目	記載内容の時期
1	創立起因	1898年9月-1920年7月
2	御勅語奉戴年月日	
3	創立年月日	1898年10月-1920年4月
4	創立者ノ功績	
5	廃止理由及年月日	
6	設置区域	
7	大目降公学校山仔頂分校建物配置平面図	
8	校舎宿舎運動場	1898-1920年4月
9	土地ノ部〔附平面図〕	1916年4月末記入
10	資産	1904年-1921年
11	経費収入支出	1898年度-1922年度
12	授業料	1898年度-1915年度
13	寄附	1898年度-1916年度
14	就学生徒	1899年1月末-1916年4月末
15	学業進否ノ状況	1899年1月-1903年3月
16	校長在職年調	1899年10月-1920年10月
17	職員	1899年10月-1921年6月
18	職員賞罰	1899年12月-1915年12月
19	職員賞与	1923年12月
20	校医賞与金	
21	学務委員	1898年11月-1908年2月
22	国語普及功勞者表彰	1925年度-1926年度
23	学務委員賞罰	1903年度-1923年度
24	会計補助員	1922年度-1923年度
25	学事ノ状況	190x年記述
26	諸規程	
27	〔学校管理者〕	1895年-1928年
28	設立区域内認可書房	19xx年現在

四、「新化公学校沿革誌」「新化農業補習学校沿革誌」の内容構成と特徴

表2・表3は、二つの学校沿革誌の内容構成および記載内容の時期を現状の配列順に示したものである。便宜上、各項目に通し番号を付し、資料中に見出しのないものはその内容を「」内に記した。

表3 「新化農業補習学校沿革誌」の内容構成

No.	項目	記載内容の時期
①台南州立新化農業補習学校／農業専修学校関係		
1	認可	1926年3月-1942年11月
2	予算	1926年度-1945年度
3	校長	1948年2月-1984年2月
4	職員	1926年4月-1948年2月
5	在籍生徒数累年比較	1926年度-1946年度
6	卒業生出身街庄別調	1928年-1944年
7	設備〔附土地使用区画図〕	1926年4月-1942年5月
8	沿革	1925年12月-1965年9月
9	沿革	1925年12月-1940年6月
10	予算	1926年度-1940年度
11	職員異動	1926年4月-1937年4月
12	記事	1926年5月-1937年7月
②台南県立新化初級農業職業学校関係		
13	本校概況	1947年10月
	一、学校現況	
	一、沿革	五、校舎宿舍
	二、現在學級数及學生数	六、寄宿舎
	三、過去畢業生数	七、農業實習設備
	四、教職員一覧表	八、校地及農場
	二、三十六年度校務實施計劃	
	一、關於學校行政方面	四、關於實習方面
	二、關於教務方面	五、事務方面
	三、關於訓導方面	
14	臺南縣立新化初級農業職業学校概況	1950年
	甲 學校概況	
	一、地址	六、班級及學生数
	二、沿革	七、在籍學生鄉鎮別
	三、校地及校舎面積	八、在籍學生年齡別
	四、教職員一覧表	九、學生家長職業別
	五、歷屆畢業生数	十、實習設備
	乙 校務實施概況	
	(一) 教務方面	(三) 事務方面
	(二) 訓導方面	(四) 實習農場方面
15	新化初農學生生活之一般	
16	〔公文書〕	1950年11月
③台南県立新化農業職業学校関係		
17	〔公文書〕	1960年4月
18	台南縣立新化農業職業学校概況	1970年
	一、校史 二、各處室組織	
④台湾省立新化高級農工職業学校関係		
19	〔沿革〕	1982年

先述したように、「新化公学校沿革誌」の内容構成は台南県訓令甲第百壹号（一八九八年十二月九日）にはほぼ準じた内容構成となっている。項目名に若干の異同はあるものの、同訓令が示した「学校沿革誌記載事項」のうち本沿革誌に記載を欠く事項は「生徒賞与」のみである^⑩。一方、本沿革誌独自の項目としては、管内住民を対象とした「国語普及功勞者表彰」の記録（No. 22）や管内書房の設置認可・取消の状況（No. 28）などが注目される。書房に関する全島的な統計や地方庁単位の開設状況については「台湾総督府公文類纂」などに記録を見ることができ、本沿革誌からは「無断位置変更セルニヨリ」設置認可が取り消し

おり、為政者による顕彰という側面も看過できない。だが、たとえば辨務署参事李學禮らが「本校設立費及經常費ノ寄付金ヲ募リ校舎宿舍ノ借入レ生徒募集等諸般ノ準備ニ尽力」したとの記録は、経済的にも物理的にも地元住民の「尽力」がなければ学校の開設・維持はおぼつかなかったことをものごとくしているだろう。同時に、左鎮分教場が開設から四年弱で「通学児童ヲ次第ニ減シタルニ依リ閉鎖」に至ったとの記録（No. 5）は、新たに開設した学校に対する地域住民の受け止めの一端を示しているともいえるだろう。一九〇〇年代初頭のものとして推定される「学事ノ状況」（No. 25）には「就学ヲ障害」する要因として「専

になったケースや一九一〇年代半ばにも新たに認可を得て開設する書房があったことが確認できる。

学校開設・維持に関わる記録としては、「創立者ノ功績」（No. 4）、「寄附」（No. 13）、「学事ノ状況」（No. 25）などの項目が興味深い。「創立者ノ功績」については総督府内訓第五十七号でも盛り込むべき事項として挙げられていることから、他校の沿革誌でも地方庁員のほか参事、区長など地元の有力者とおぼしき人々の名前が列挙されて

ラ孔孟ノ学ヲノミ妄信スルノ久シキ」ことや「農業地ナルヲ以テ旧慣上耕作ヲ以テ足レトナ」すという傾向が挙げられている。定型化した叙述という印象は否めないものの、就学者の確保が容易ではなかったことを窺わせる記録ではある。また、原資料破損のため判読不能ではあるが、「^{〔破損〕}ノ居住少ク」^{〔破損〕}必要少キ」という記述は、内地人居住者の存在や日本語使用の機会が就学促進につながるという学校関係者の期待とともに、学校という空間が人々にとって異質なものであったことを想像させる。

就学の動向については、「就学生徒」(No. 14)や「学業進否ノ状況」(No. 15)の記録が貴重である。とくに前者は、学級編成のありようや受持教員の配置を年次でたどることができることから、学習の形態や進級の動向を窺う重要な記録となっている。たとえば、女子生徒が最初に入學した一八九九年以降、第一学年の女子在学者数は、九、二三、一九、三、〇、一二とかなり不安定であるほか、翌年度以降第二学年へ進級している女子児童者数は〇、一、一、〇、三と僅少な状態が続く。一九一一年に初めて一名が第六学年まで進級したことを確認できるが、その後も第六学年〇名の年度が多い。学級編成は、一学級五十〜七十名程度の幅で男女・学年ともに弾力的な組み合わせの複式が一九一〇年代半ばまで続き(以後の記録は欠如)、一九一六年度の学級数は大目降公学校六、山仔頂分校二である。

このように「新化公学校沿革誌」には、学校の設置・維持に関わる官民の関与のありようや開設から約二〇年間にわたる就学・学習の具休相に関する記録が綴られている。

一方、「新化農業補習学校沿革誌」は内容構成の点でかなり性格の異なる記録を含んでいる。まず、本沿革誌は記載内容の時期に着目するとおおよそ次の四つの部分から構成される。

- ① 台南州立新化農業補習學校／農業專修學校関係 (No. 1〜12)
- ② 台南県立新化初級農業職業學校関係 (No. 13〜16)
- ③ 台南県立新化農業職業學校関係 (No. 17〜18)
- ④ 台湾省立新化高級農工職業學校関係 (No. 19)

このうち①については、用紙や記述様式の点でさらに三つの部分、(イ)「新化農業專修學校」野紙(B 4版)(No. 1〜8)、(ロ)「新化農業專修學校」野紙(A 4版)(No. 9)、(ハ)「新化農業補習學校」野紙(B 4版)(No. 10〜12)に分けることができる。相互の記載内容に重複があり、(ハ)(ロ)などをもとにして(イ)が作成された可能性がある。

①が主に日本植民地期、②〜④が中華民國期の記録にあたるが、①には一九四五年以降も従前の野紙を用いて記録が継続されている項目がある。このように民国接收後の断続的な記録が含まれていることが本沿革誌の特徴のひとつである。そのなかで、とくに教員異動の記録は日本人に替わり新たに大陸から渡ってきた人々が過半を占めるに至った様相を如実に示している。民国接收後も従前の書式を踏襲して学校沿革誌を綴り続けた例としては、宜蘭県・利澤国民小学(利澤簡公学校)や桃園県・大溪国民小学(大崙坎公学校)などが確認できる。一九四六年以降に「学校沿革誌」の作成・保管を義務づける規定はこれまで確認できておらず、個別の学校・教員の判断によるところが大きいと思われる。^①実際、内容の点でも②〜④の部分は日本植民地期に一般的であった追記式の学校沿革誌とは異なり、特定の時期に「学校概況」としてまとめた文書や学校の名称変更に関わる公文書などを綴り込んだものといえる。

接收後初期の記録とともに、本沿革誌の主要な位置を占めるのは「記事」(No. 12)である。この項目には、開校時から一九三〇年代後半までの約十年間にわたる日常的な諸活動が記録されている。式日行事や

記念行事、教員の出張、島内外からの視察者のほか、若干ではあるが敷地を同じくする新化公学校や女子技芸講習所に関する記述も含まれている。先述した総督府内訓や台南県訓令の記載例にはこれに類する項目名が見当たらないが、類似した様式の記録は台湾島内の公学校沿革誌や本国の小学校沿革誌にも散見される^⑫。個別の記事内容は簡潔ではあるが、新化農業補習学校が新化公学校卒業生をはじめ近隣地域の人々にとってどのような存在であったのかという問題とともに、学校を媒介として台湾全島さらには帝国日本全域に「均一的」な空間がいかに創出されたか（あるいはいかにズレが生じ続けたか）を検証するうえで具体的な素材を提供している。

二冊の学校沿革誌は、両校所蔵の教員履歴書や学籍簿、写真などと重ねあわせることによりさらに多面的な読解が可能となる。今後、旧分校を前身とする国民小学や学校関係者のほか近隣諸機関の所蔵する関係史料の調査・整理を並行して進めつつ、新化地域において公学校という機関がどのような役割を担い、人々にとってどのような存在であったのか、その重層的な姿を読み解いていきたい。

〈付記〉

解題は北村が執筆し、翻刻は北村・樋浦・山本が分担し、全体について三名で検討した。

注

¹ 背景には、この四半世紀における台湾史研究の深化とともに、地域の歴史に対する人々の関心の活性化があるだろう。後者については、日本植民地統治に関わる遺跡の掘り起こしや歴史的建造物の復原などとともに、学校をめぐる歴史に対する地域住民の関心が特徴的な動向のひとつである。

とくに、一九九〇年代末以降、「百年校慶」「百年老校」と銘打って、日本植民地化まもない時期に開設した国語伝習所・同分校を前身とする国民小学の百周年を記念する行事が島内各地で相次ぎ、学校関係者による記念誌の刊行が隆盛するとともに、学校史料の整理や関係史料の収集、卒業生・関係者の聞き取り、校史室の開設など史料面での整備が一定程度前進をみた。記念誌のなかには、たとえば林炯任編集代表『三峽國小一百年』（台北県三峽国民小学創校一百周年校慶委員会、二〇〇〇年）など、学校史料を活用した研究論文を収めたものもある。こうした潮流のなか、二〇〇七年度には国立教育資料館（現・国家教育研究院教育資源及出版中心）が、百周年を迎えた学校を対象として周年記念誌の収集を行っている。

歴史研究の史料として学校文書を紹介・利用した早期のものとしては、林正芳「日據時期宜蘭地区的初等教育（一八九五—一九四五）」（文化大学史学研究所修士論文、一九九二年）、林正芳「宜蘭的教育史料」『宜蘭文獻雜誌』第二期（宜蘭県文化中心、一九九六年七月）が挙げられる。これらの土台には、宜蘭県文化中心（現・宜蘭県史館）が一九九一年に県内の国民小学のうち日本植民地期に開設した四十一校を対象として行った悉皆的な学校所蔵史料調査がある。同文化中心は、史料の所在調査や聞き取り調査とともに史料の整理・複製を進め、作業終了後には原史料を各学校に返却する一方、複製物は個人情報上の配慮を加えたうえで閲覧に供している。その後、このような地方政府単位での悉皆的な調査・保存の取り組みは他に例を見ない。

二〇〇〇年代以降には、許佩賢「台湾近代学校の誕生——日本時代初等教育

体系的成立（一八九五—一九二一）」（国立台湾大学歴史研究所博士論文、二〇〇一年）をはじめとして、学校文書を利用した学位論文（修士・博士論文）が毎年度複数執筆されている。これらの大まかな傾向としては、「日治時期〇〇学校之研究」といった個別学校史が多いこと、師範大学系の学位論文が相対的に多いこと、近年は学校行事や建造物といったモノ・コトにも関心が向けられていること、などが目につく。

なお、台湾の学校史研究をめぐる近年の動向と課題については、許佩賢による以下の整理中に言及がある。「二〇〇九年教育史研究的回顧与展望」（二〇〇九年台湾史研究的回顧与展望學術研討会、於台北：国立台湾師範大学、二〇一〇年十二月十七日）、「二〇一〇年台湾教育史研究的回顧与展望」（二〇一〇年十二月二十三日、於台北：中央研究院、「台湾教育史研究的回顧与展望（二〇一〇—二〇一三年）」（『師大台湾史學報』七、二〇一四年十二月）。

2 林廷輝訳・林修澈訳『竹南国民小学沿革史 戦前篇』（上・下、苗栗县政府國際文化觀光局、二〇一〇年）。所澤潤・林初梅「国語伝習所の設置と公学校への転換の記録（一八九八年前後）」——台北県蘆洲国民小学所蔵『学校沿革誌 和尚洲公学校』冒頭部分」（『群馬大学教育実践研究』第十七号、二〇〇〇年三月）。

3 陳思琪「日据時期台北地区初等教育之研究」（台北市立教育大学社会科教育研究所修士論文、二〇〇六年）、江燭乙「日治時期台湾桃園地区客家教育（一八九五—一九四五）」（国立台湾師範大学教育學系博士論文、二〇一三年）。

4 張秀琪「新屋范姜家族社會領導階層之探究」（国立中央大学客家社会文化研究所修士論文、二〇〇八年）。張は、清朝期の淡新檔案や日本植民地期の台湾總督府文書・学校文書のほか個人所蔵史料や聞き取り記録などを多面的に活用して新屋范姜一族の歴史をたどっており、一族（親族）に焦点を据えて地域の歴史を描出する試みとして注目される。史料としての学校文書という観点からみれば、新屋国民小学所蔵史料のうち同論文で利用されたものはごく限定的ではあるが、地域住民にとって近代学校がどのような存在であったのか、近代学校が

どのように地域のなかに定着していったのかといった問題を通史的な視野のもとで考える手がかりが示されている。

5 梶井一暁「近代日本における初等教育の地域的展開——広島県賀茂郡黒瀬地域の事例」（『鳴門教育大学研究紀要』第二十三号、二〇〇八年）ほか、梶井の一連の論文等。

6 林原久恵「学校沿革誌の編纂と資料的性格」（筑波大学修士（図書館情報学）学位論文、二〇一三年三月）、小山景子「鳥取県における学校史料の史料学的研究——米子市角盤高等学校を題材に」（『鳥取地域史研究』第十三号、二〇一一年）、田村達也「小学校資料論——かつて小学校は地域のセンターであったという視点から」（『鳥取県立公文書館研究紀要』創刊号、二〇〇五年）など。

7 このなかで、林原前掲論文は近代日本において学校沿革誌が作成・保管されるようになる過程を全国（内地）の府県教育史等を活用して網羅的に把握しようとした最初の試みである。また、田村前掲論文は鳥取県に現存する全小学校の所蔵史料を網羅的に調査し一覧にまとめている。学校の沿革記録に関するまとまった研究としては、学校沿革史研究会『学校沿革史の研究 総説』（野間教育研究所、二〇〇八年）がある。同研究は、長年をかけて野間教育研究所に集積された日本各地の沿革記録が研究基盤となっており、時期・地域・学校種別による比較の視点を有する点でも注目されるが、その検討対象は学校関係者が主体となって作成・刊行された周年誌・記念誌であり、戦後日本の大学・高等学校に限定されている。

なお、資史料により「学校沿革誌」「学校沿革史」という表記が混用されているが、明確な区別があるとはみなしづらい。本稿では、学校沿革記録のうち、所管官庁の指示にもとづき一定期間にわたり作成・継承されてきた学校備付けの文書を「学校沿革誌」と総称し、当該学校関係者の主導により作成・刊行されたものを周年誌・記念誌と区別することとする。

8 柏木敦は、「ある学校の沿革を長期にわたって記録した文書、あるいは刊行物を、

一般的に「学校沿革誌」、あるいは「学校沿革史」と呼ぶ」と述べ、小学校の「沿革史（誌）」を大きく二種に区分している。すなわち、一、「各地方自治体や所轄官庁が規定するところによって作成されるもの」、二、「各学校の創立を起点にして特定の周期を機会に当該学校関係者の意思によって作成・刊行されるもの」である。このうち前者は、学校備付けの表簿として作成・蓄積されるものと、「内容の継続的蓄積を意図した引継文書とはならないもの」に分けられるという（柏木敦「解題」「沿革史 更級郡庄内尋常小学校」について）『研究資料』二二三、二〇一一年三月。注7で述べたように、本稿が取り上げる沿革誌は第一の類型の前者である。

9 松崎弘道「明治期における学校沿革誌(1)——その編さん過程の概観」(『所報』第四号、福島県教育センター、一九七一年十二月、前掲柏木敦「解題」「沿革史 更級郡庄内尋常小学校」について)。両者とも、最も早期の例として、一八七六年に千葉県が達した「学校沿革誌並ニ日記調整概則」(県乙第百九十八号達)を挙げている(ただし月日については異同があり、松崎が「七月」としているのに対し、柏木は『千葉県教育百年史 史料編 第六卷』二〇〇〇年に依拠して「九月十二日」としている)。また、翌七七年に茨城県が訓令「学校沿革誌編輯ノ儀」(『茨城県報』)をもって学校沿革誌の編纂を指示していることを林原久恵が指摘している。(前掲林原久恵「学校沿革誌の編纂と資料的性格」)。

10 長田三男「はしがき」『藤沢市教育史 史料編 第六卷』藤沢市教育委員会、二〇〇〇年。長田は、「明治十六年二月に始まった本邦教育沿革誌編纂事業に関連して」学校沿革誌が「小学校に必ず備え置かねばならぬ表簿の一つとして、地方ごとに編纂されるようになったのでは」と推測するとともに、複数の府県の訓令をもとに一八八〇年代末から九〇年代にかけて代々の校長が作成し引き継ぐべき永久保存表簿という性格が一般化していったと指摘している。柏木敦は、複数の自治体教育史の叙述や史料をもとに、「編纂・保存スタイルが全国的にまとまっていた時期」に関わる長田の指摘に同意を示している。なお、長

田のいう「教育沿革誌編纂事業」とは、一八八三年二月「教育沿革史編纂ニ付沿革取調差出方」(文部省達第一号)をもって調査・提出が指示され、文部省総務局課編『日本教育史資料』全十巻(一八九〇～一八九二年)として編集・刊行された資料をさす。

11 「学校沿革誌并ニ日記調整概則」一八七四年七月十二日、県乙第百九拾八号達(千葉県教育百年史 第三卷 史料編(明治))千葉県教育委員会、一九七一年。ほぼ同時期に茨城県も近似した文言の通達「学校沿革誌編輯ノ儀」(『茨城県報』一八七七年)を発している(前掲林原論文所収)。

12 前掲松崎弘道論文所収の福島県管内の諸記録による。

13 『台南県報』第百二十三号、一八九八年十二月九日。同訓令は、一八九八年八月「台湾公学校規則」(府令第七十八号)の「此規則施行ニ関スル細則ハ知事庁長之ヲ定ムヘシ」(第二十四条)に基づく。

14 同右『台南県報』第百二十三号。

15 「学校諸帳簿ニ関スル件」『台湾総督府公文類纂』V0363A21(一八九九年十二月十一日、総督発、知事庁長宛、内訓第五十七号。以下、『台湾総督府公文類纂』は「公文類纂」と略記する)。同内訓が示した帳簿の種類は、以下のとおりである。「一 生徒学籍簿 / 二 職員名簿及履歴書 / 三 学校沿革誌 / 四 学事ニ関スル諸規則及公文書類 / 五 教授細目及教案並教授管理訓練ニ関スル記録 / 六 生徒賞罰ニ関スル記録 / 七 生徒卒業及修業証書ノ台帳 / 八 試験問題及成績表 / 九 教授用器械図書標本及校具目録 / 十 統計報告ニ関スル諸表簿 / 十一 学校日誌 / 十二 職員出勤簿 / 十三 生徒出席簿 / 十四 会計ニ関スル諸帳簿 / 十五 学校資産ニ関スル書類並記録」。また、これらに加えて「其他ハ必要ニ依リ便宜」備えることとした。

なお、学務課長名による起案文書には「学校整理ノ必要上諸帳簿ニ関スル件左案御通達相成可然哉」とあり、教育行政上の観点から諸帳簿調製の必要が説明されている。

- 16 台湾總督府民政部學務部『台灣學事法規』台灣教育會、一九一三年。台灣教育會編『台灣學事法規 完』帝國地方行政學會、一九二九年（加除式、最終追録第二十九号、一九四三年九月一日）など。
- 17 なお、本国では学校沿革誌の永年保存が定められていたのに対して、台湾では保存期間に関する規定は管見の限り見当たらない。
- 18 宜蘭庁訓令第九十四号（一九九九年十二月二十二日）『公文類纂』V0531/A07。
- 19 台南県令第二十五号『台南県報』第百七十七号、一九九九年十二月二十九日。
- 20 台南県訓令第七十号、第七十一号（同右『台南県報』第百七十七号）。
- 21 台北県訓令第十号・十一号（一九〇〇年三月一日）、『台北県報』第百三十三号、一九〇〇年三月一日。同様の例として、台東庁訓令第九号（一九〇五年三月二十八日）、『公文類纂』V1077/A90。「小学校、公学校及蕃人ノ子弟ヲ就学セシムヘキ公学校ニ備フヘキ諸帳簿」（一九一三年四月、花蓮港庁訓令第十号）、花蓮港庁『花蓮港庁例規』一九三二年など。
- 22 宜蘭庁訓令第十六号（一九〇二年七月）、『宜蘭庁報』第九十五号、一九〇二年七月十日、『公文類纂』V733/A04。
- 23 「公学校備附帳簿調製方」（一九〇九年五月、新総庶第一〇八三号）、新竹州知事官房文書課『新竹州例規類纂』帝國地方行政學會、一九四〇年。
- 24 目下、台湾島内において日本植民地期を含む学校文書の所蔵が確認できた国民小学は約八十校である。大まかな傾向としては、卒業生台帳や学籍簿など生徒（当該地域の住民）と密接に関わる記録の占める分量が相対的に大きく、学校沿革誌を所蔵していることを確認できた学校は三十弱にとどまる。
- 25 現在の台湾では、台湾の平地に居住する先住民の総称として平埔族という用語が用いられ、シラヤ（西拉雅、Siraya（一〇Sraja））族はそのひとつとされる。平埔族という名称については明朝期の地理書である陳第『東番記』（一六〇三年）等が早い時期の使用例である。
- 26 オランダ語の文書にはTavakan, Tavakangh, Teopangh等、多様な表記が混用されており、のちに漢字による音訳表記として大穆降（大目降）が用いられるようになる。楊森富『台南県平埔地名誌』台南県政府、二〇〇三年。国史館台湾文献館採集組『台湾地名辞書 卷七 台南県』台湾省文献会、二〇〇二年。
- 27 中村孝志「オランダ時代の台湾番社戸口表について」『南方文化』第二十輯、一九九三年。十七世紀半ばに台湾南部を統治した東インド会社がバダヴィアに送付した全島的な戸口表は六種あるという。これによれば、最も早期の一六四七年五六〇人（九十二戸）から最後期の一六五六年三六九人（七十二戸）へと減少傾向にある。
- 28 『台湾縣誌』一七二〇年（台湾銀行經濟研究室編『台湾文獻叢刊 第一〇三種』一九六一年、六八頁）。
- 29 台湾總督府民政部文書課『台湾總督府第二統計書』一九〇〇年。統計数値は一八九八年十二月末現在。同書は、「熟蕃」の人口として、蘇豆、東港など台南県内に約一万七千、台湾全島約二万四千という数値を掲げている。
- 30 「国語伝習所分教場設立ノ儀ニ付上申」（台南県知事発、総督宛、一八九八年四月五日）、『公文類纂』V0031/A026。
- 31 たとえば同じ管内の左鎮では、大穆降公学校開設の二年後に分教場が開設するものの四年足らずで閉鎖に至っている。この経緯について「新化公学校沿革誌」は、「設立其所ヲ得サリシ為メ通学兒童ヲ次第ニ減シタルニ依」ると記している。
- 32 台湾全島にわたる統一的地方制度は日本植民地期を通じて整備されるが、台湾西部・南部の平野部では明清期を通じて行政庁が設置されている。新化に関しては、十七世紀半ばに反清復明を掲げて渡台した鄭氏のもとで天興県（一六六一年～）、天興州（一六六四年～）に編入され、台湾が清朝の版図に編入された後は、福建省台湾県（一六八四年～）、台湾省安平県（一八八七年～）の所管となる。なお、「大穆降」「大目降」「新化」という名称は、明清期の地方誌等に行政区画名として散見される。
- 33 シラヤ語に由来する大穆降、大目降という地名は、一九二〇年の地方制度改編

にともない新化と改変され、現在もこれが踏襲されている。

34 行政区画が変化するため単純な比較はできないが、この間の人口規模の推移を掲げておく。一九四〇年新化郡の人口は、約九万九千人（「本島人」約九万七千、内地人千六百弱、中華民國人二百弱）。二〇一四年新化区の人口は、約四万四千二人である。（台湾総督府企画部『昭和十五年 台湾総督府第四十四統計書』一九四二年。台南市新化区公所編『中華民國一〇三年 台南市新化区統計年報』二〇一五年。）

35 一九〇二年に内地人児童を対象として大穆降公学校に開設した「小学科」は、一九一二年台南尋常高等小学校大目降分教場として公学校から分離し、翌一三年に大目降尋常小学校として独立した後、二一年に新化尋常小学校、四一年に新化国民学校と改称し、四五年をもって廃止となる。中華民國が同校の敷地・校舎を接収した後は国民中学として利用される（現新化国民中学）。

36 これらの分校・分離教室が、現在の台南市山上・新市・左鎮・永康区に位置する山上、新市、岡林（廃校）、左鎮、西勢、口埤、草山（廃校）、那拔の各国民小学の前身にあたる。

37 本稿の対象は、新化国小・国中・高工所蔵史料のうち日本植民地期および中華民國接收初期にあたる一九九〇年代末～一九四〇年代半ばの文物とした。ただし、新化国民中学所蔵の文書史料の閲覧は実現していない。

38 本文で紹介した文書のほかに、『新化国民学校慶祝創立六十週年特刊』（一九五八年）には開校から刊行時まで（一九八八～一九五八年度）の卒業生名簿（速成科、本科、高等科卒業生の姓名）および退職職員名簿（姓名、出身地、在職期間）が掲載されている。原史料の所在が確認できない現状において、貴重な記録だといえる。

39 教育勅語・御真影の「奉戴」過程と「奉護」設備の整備過程、および中華民國接收後の保存の経緯については、稿を改めて検証する予定である。なお、民国接收後、旧尋常小学校の奉安殿は、数度の移築を経て、二〇〇四年に台南県政

府所管の文化資産（歴史建築）として指定を受けて修復が施された。この間、扉を含む四周の壁面には、「養天地生氣 法古今完人」「反共抗俄 復興中華」（一九六〇年代）、「復興民族文化 敬老尊賢」「支援三民主義 統一中国」（一九九〇年代）などのスローガンが書き付けられていた（蔡錦堂「您知道「新化小學校奉安殿」的事情嗎？」『台湾教育史研究會通訊』第二十三期、二〇〇二年十月）、阿部由理香「新化尋常小学校奉安殿顛末記」『台湾教育史研究會通訊』第二十五期、二〇〇三年二月）所載の写真による。このほか、白柳弘幸「台湾の奉安殿を訪ねて」『植民地教育史研究年報』第十号、二〇〇七年）の見聞記などにも言及がある。近年、地元での歴史建築物に対する再評価の動きにともない、一部の日本の研究者や台湾縁故者の注目を集めるようになっていくが、歴史資料としての重要性という側面とともに、一九四五年以降を含めた新化の歴史的・政治的文脈に対する視座が問われているように思う。

40 「生徒賞与」とは、国語伝習所分教場期の制度を踏襲したもので、成人を対象として初期に短期間存在した速成科にのみ関わる事項であったものと推察される。

41 日本植民地期の書類の廃棄ないし保管に関する指示についても現時点では未確認である。

42 台湾島内における早い例としては、たとえば竹南国民小学（一九八八年一月新竹国語伝習所中港分教場として開設後、中港公学校、竹南公学校、竹南宮前国民学校と改称）の学校沿革誌には「雑事」という項目で類似の記録が見られる。前掲林廷輝訳・林修澈訳註『竹南国民小学沿革史 戦前篇』。

史料

〔凡例〕

- 一、原則として、旧字・俗字・異体字は通行のものに改めた。ただし、人名・地名については旧字を用いたものもある。また、台湾人の人名・地名は、原則として資料どおりとした。なお、中国語部分についても、原則として資料どおりとした。
- 二、漢数字については、原則として資料どおりとしたが、次のように統一したものもある。
 壹・壹 ↓ 弍 弍・貳・貳 ↓ 弍 参・参 ↓ 参
- 三、誤記と判断される箇所に関しては、傍注で「ママ」を付すか、「」内に正しいと思われる表記を示した。なお、表中の数値の合計が合わない箇所はそのままとした。
- 四、判読不能箇所には、およその文字数分の□を記した。このうち、虫喰い、破損、墨汚れ等による判読不能箇所には、それぞれ「虫喰い」「破損」「墨汚れ」等と示した。
- 五、資料に空白箇所がある場合には「空白」と示した。ただし、空白の内容を推定できる場合には傍注で「」内に記した。なお、表中の空欄はそのままとした。
- 六、資料に罫字がある場合には本文を空白として、傍注で「罫」と記した。
- 七、行間への書き込みや引き出し線による語句・文章の挿入がある場合、本文の当該箇所に「」を用いて、挿入された文字を記した。また、押印箇所については印の内容を四角囲みにして示した。
- 八、文章が削除・訂正されている場合、原則として削除された語句を「」内に記した。

九、割注がある場合は、「」内に記した。

一〇、個人のプライバシーにかかわる情報が含まれる箇所については、プライバシー保護の観点から、人名の部分を文字数分の*に変換して示した。

史料一 「新化公學校沿革誌」

〔表紙〕

日據時代

學校沿革誌

新化國小



図4 「新化公学校沿革誌」
(新化国民小学所蔵)

〔本文〕

大目降公学校沿革誌

創立起因

本校ハ明治參拾壹年九月壹日台南國語伝習所大目降分教場トシテ開設セラレシガ台灣公學校令ノ發布ト共ニ台灣總督府告示第五拾四号ヲ以テ同年九月參拾日限り廢所セラレタルニ因リ明治參拾壹年拾月壹日台灣公學校令ニ基キ大目降公學校ヲ創設シ同令附則第拾貳条ニヨリ元台南國語伝習所大目降分教場ノ設備全部ヲ讓与セラル

一 明治參拾參年五月貳拾參日本校設置区域内左鎮庄二分教場設置ノ件ヲ許可セラレ同年七月壱日ヨリ開始シ大目降公学校左鎮分教場ト名称ス（明治參拾七年六月參日廢止ス）

一 明治四十一年一月四日新化東里山仔頂庄三五〇番地ニ大目降公学校山仔頂分校ヲ創立セリ（明治四十年十一月二十四日創立認可）
明治四十二年夏雨季ニ際シ仮校舍倒潰セルヲ以テ更ニ永久的の校舍ノ新築ニ着手シ全年十月四日ヨリ全十二月二十三日ニ至リ竣工越テ明治四十三年一月四日本校舎ニ移転ノ上授業ヲ開始セリ

永久的校舍ノ位置ハ山仔頂庄土名苦瓜寮□(虫喰)

中村

一、新市分校

大正五年八月二十一日新市區長張芋薯外五名ヨリ設立ヲ出願シ太
正六年三月三十一日指令第一二七八七号ヲ以テ認可セラレ全年四
月一日ヨリ開校

一、崗仔林分校 南外新化南里崗仔林庄四一九番ノ一六

大正七年一月十四日南外新化区長李崑峯外五名ヨリ設立ヲ出願シ
大正七年四月十三日「指令」告示第五十三号ヲ以テ認可セラレ全
年四月二十日ヨリ開校

〔中村〕 一、大正九年四月一日新市分校独立ス

一、菜蓼分離教室 外新化南里菜蓼庄

大正九年四月九日認可
 大正十年四月一日開校
 地方制度改正ノ結果
 仔公學校三分屬

一、西勢分離教室 廣儲東里西勢庄

大正九年四月九日認可全年四月一日開校

一、大坑尾分離教室 廣儲東里大坑尾庄

大正九年四月九日認可全年四月〃開校

一、草山分離教室、外新化南里草山庄

大正九年四月九日認可全年四月 〃 開校

地方制度改正ノ結果岡仔林公学校ニ分属ス大正十年四月一日
二、大正九年十二月一日西勢分離教室ハ地方制度改正ノ結果新豊郡埔
姜頭公学校ニ分属ス。

一 大正十年四月一日岡仔林分校ハ〔制〕地方制度改正ノ結果左鎮庄ニ属ス。

一 大正十一年七月「八」「九」七日那拔林分離教室廟宇使用ノ件認可セラル。

御勅語奉戴年月日

教育勅語御奉戴 明治三十三年十月一日

創立年月日

一 本校創立

明治參拾壹年拾月壹日

一 左鎮分教場創設 明治三十七年六月三日廢止

明治參拾參年七月壹日

一 山仔頂分校 大正六年三月三十日指令第一二六三〇号獨立認可

明治四十一年一月四日

〔中村〕◎ 四十三年一月四日勅語奉戴ス

一、新市分校 大正九年四月十二日指令〔空白〕号獨立認可

大正六年三月三十一日 指令第一二七八七号

一、崗仔林分校

大正七年三月三十一日 (大正七年四月十三日告示第五十三号)

一、菜寮分離教室

大正九年四月九日

創立者ノ功績

一 本校及左鎮分教場創立ニ関シ諸般ノ指導ニ尽力セラレシ者

大目降辨務署長 石川戈足

一 本校設立費及經常費ノ寄附金ヲ募リ校舍宿舍ノ借入レ生徒募集等

諸般ノ準備ニ尽力セラレシ者

大目降辨務署參事 李學禮

同 蘇有志

曾尊三

鍾鏡清

吳克明

一 本校學務委員トシテ諸般ニ尽力セラレシ者

大目降公學校學務委員 蘇緝熙

同 王振邦

一 左鎮分教場設立ニ関シ諸般ニ尽力セラレシ者

北外新化區庄長 簡溫其

左鎮分教場學務委員 廖語

一 山仔頂分校設立ニ関シ諸般ノ件ニ尽力セラレシ者

大目降支庁長 田中鷺郎

新化里東區長 林阮金

學務委員 陳大海

全 楊左泉

廢止理由及年月日

一 左鎮分教場廢止

明治參拾七年六月三日廢止ヲ認可セラル同分校ハ設立其所ヲ得サ

リシ為メ通學兒童ヲ次第二減シタルニ依リ閉鎖セリ

設置區域

一 大目降公學校設置區域內區名及街庄社數戶數人口

大目降區、廣儲區、新化里西區、新市區、新化里東區、北外新化

ヲ告ゲ元教員宿舍ニ充用セシ家屋ヲ改造セシモノニシテ台湾風ノ平家ナリ此建坪数參拾七坪參合參勺四才

一、生徒寄宿舎

大目降街王公保ニ在リ王公廟ノ左側房ヲ借入レタルモノニシテ台湾風ノ平家ナリ此建坪数拾參坪五合

一、左鎮分教場

左鎮庄ニ在リ明治參拾參年五月民家ヲ借入レ修繕ヲ加エタルモノニシテ台湾風ノ平家ナリ此建坪数貳拾坪

一、運動場

本校舎^(五畝)□側ニ壺ヶ所及分教室ノ前面ニ壺箇所ト都合貳箇所アリ此坪数合計壺百參坪六合六勺七才

一、教員宿舍(台湾風平屋)

明治四十三年一月中從來ノ教員宿舍ニ隣レル家屋ニ修繕ヲ加ヘタリ此坪数拾「貳」五坪貳合五勺

一、浴場物置及便所(台湾風平屋)

新教員宿舍ニ隣レル一棟ニ修繕ヲ加ヘ浴室貳坪五合二勺七才物置貳坪八合八勺八才

便所壺坪五合

一、校舎

從來生徒寄宿舎トシテ使用シ來レル拾參坪五合中ノ一室八坪七合ヲ大目降派遣教授教室トセリ(四十五年四月一日派遣教場ハ分教場ト改リ他ニ移転ス)

一、山仔頂分校々舎

教室

貳室各五間ニ四間「貳」四拾坪

職員室

壺室四間ニ貳間(八坪)

廊下

幅壺間半ニ拾六間(貳拾四坪)

便所

貳坪

物置

貳坪

運動場

貳百拾四坪

井戸

壺ヶ所壺坪

大目降本校々舎大正三年七月二十日竣功 工費金一万一千八百八十円

職員宿舍一棟金一千七百五十円附屬物金七百五十円 大正三年

三月

倉庫 一棟二戸住、工費金一千四百五十円 大正四年七月竣功

倉庫 一棟工費金四百八十円 大正「三」「四」五年八月竣功

置場井戸 工費金七百四十三円 大正五年三月三十日竣功

バラック建教室

工費 (空白)

大正九年四月竣功

校舎、厠、渡り廊下(九六、四六坪) 工費一万「五」八千「八」

九百五十円

請負人嘉義街東門内松岡康次郎、起工大正九年十一月二十日

土地ノ部

大目降街王公廟五三五ノ一五則畑三分〇五毛八糸 地租一、七四〇

一三二円

大目降街王公庙五三五ノ二五則畑五厘〇六糸 地租、貳九〇

二一円三〇〇

〃 〃 五三七ノ一五則畑八分二厘九毛八糸 地租四、七三〇

三五〇円

〃 〃 〃 ノ二五則畑六厘〇四糸、三四〇

二五円七〇〇

〃 〃 〃 五三四ノ一五則畑七厘九毛二糸 地租、四五〇

三三円六〇〇

五三四 五則畑三分一厘九毛七糸 地租一、八二〇

一三五円四〇〇

五三六ノ一五則畑三厘五毛 地租、二〇〇

二〇円〇〇〇

計 一甲六分八厘〇五糸 七一七円

大目降街土名王公庙五三二一五則畑一甲一分四厘八毛五糸地租六、五五〇

二五〇円

新化東里山仔頂庄七三五ノ一八則畑七分五厘地租二、五三〇

佃 一八七、五〇〇、三八八、一二五

〃 〃 〃 七三六 〃 〃 一甲五分五厘二毛五糸 地租四、

〇四〇

新化東里山仔頂庄四七九原野七分一厘五毛五糸 一四三、一〇〇

〃 〃 〃 三五〇建物地三分五厘五毛五糸 一二四、四二五〇

大目降街土名王公庙五參九ノ一

一 畑八分參厘參毛九糸

佃金五百円三十四錢也

大目降街土名王公庙五三八番

一、畑「五」四分「貳」參厘七毛二糸

佃金二百參拾六円〇八錢也

新化東里山仔頂庄三五一番地

一 建物敷地貳參〇厘貳毛

佃金百四拾壹円四拾錢也

大目降街土名王公庙五三九ノ二

一 畑六厘二毛四糸

佃金參拾七円四拾四錢 觀音廟一二五、林大肚寄附

《◎》總計本校々地三甲〇一厘四毛

佃金一千五百二十五円二十四錢（時佃大凡一千八百円）

《◎》◎本校所有畑一甲一分四厘八毛五糸

佃金二百五十円（時佃凡四百円）

總計分校々地五分五厘七毛五糸

佃金二百六十五円八十二錢也（時佃相当）

◎分校所有畑三甲〇一厘八毛

佃金七百十八円七十二錢（時佃大凡八百円）

以上大正五年四月末日記入ス

〔折込図 略〕

新化東里山仔頂庄七三五番ノ一

〔破損〕
□□□□□七厘五厘

〃 七三六□一甲五分五厘二毛五糸

〃 四七九原野七分一厘五毛五糸

資産

一 図書

七百貳拾壹冊

購入価格八拾六円四錢六厘（明治參拾七年貳月計算）

一 器械器具及標本	貳百六拾壹点	購入価格五百七拾壹円參拾九錢八厘 (全上)	一 雜品	拾貳点価格金參拾貳円五拾五錢 (以上明治四拾壹年十月末調)
一 基本財産	明治參拾五年度經費剰余金五拾円四拾七錢貳厘ヲ本校基本財産ニ編セリ		一 圖書類	九百九拾五点
一 基本財産	金額貳百八拾參円八拾錢 (明治參拾七年十二月末調)		一 器具	價格貳百八拾四円四拾參錢五厘
	右金額ヲ国庫債券トセリ (明治參拾八年十二月末調)		六百九拾四点	價格壹千四百〇拾八円拾壹錢參厘
	金額貳百參円六拾錢 (明治參拾九年十二月末調)		壹点五円五拾錢	
	畑地參甲貳分貳厘貳毛五糸此小作料年額五〇円ヲ山仔頂庄民ヨリ寄附シ基本財産ニ編入セリ		七拾四点	
	(明治「參」小野四拾年十二月末調)		價格五拾壹円八拾四錢壹厘 (以上明治四拾三年十月末調)	
一 国庫債券壹百円 (五分利付)	公債証書貳百円 (五分利付)	} 全右	校舍新宮ノ為メ基本財産ニ編入セルモノハ左記ノ如シ	
一 基本金四拾壹円八拾五錢	圖書掛図類		明治四十一年度及其以前ニ於テ	
	九百五拾八点		明治四十二年度	
一 器具	金貳百四拾參円拾五錢四厘		但シ此六千円ハ山仔頂分校新築ニ使用セリ	
	五百四点		明治四十三年度	
一 金千參拾九円五錢五厘	標本		明治四十四年度	
	拾壹点価格金參拾八円拾錢		五千円	
一 模型	壹点価格金五円五拾錢		明治四十五年度	
			四千円	
			依而計壹万七千五百円ナリ	

一、明治四十五年四月末日調査資産左ノ如シ

種別	土地	建物	預金	計
員数	四甲三八一	〔六、五〇〕二	—	
価額	三五〇円	七、五〇円	—	七八五〇円

備 品		種別
価額	箇数	種別
	六七六	図書
	七三三	器具
	七	器械
	一三	標本
	一	模型
	二三七	雑品
		計

一、大正二年四月末日調査資産左ノ如シ

種別	土地	建物	預金	計
員数	六、〇五	一	—	
価額	二、七〇	一八〇〇	—	三、九七〇

備 品		種別
価額	箇数	種別
	六七五	図書
	六三三	器具
	七	器械
	一五	標本
	一	模型
	一一一	雑品
		計

一、大正三年四月末日調査資産左ノ如シ

種別	土地	建物	預金	計
員数	六、〇五	二	—	
価額	二、七〇	二八〇〇	—	三、九七〇

備 品		種別
価額	箇数	種別
	五五〇	図書
	六三三	器具
	一四	器械
	一六	標本
	一	模型
	一五三	雑品
		計

一、大正四年四月末日調査資産左ノ如シ

種別	土地	建物	預金	計
員数	七、六〇一	三	二	
価額	二、九八九二	一、四八〇〇〇	一〇〇〇〇	

備 品		種別
価額	箇数	種別
	五五九	図書
	六七八	器具
	一七	器械
	一四	標本
	一	模型
	二〇五	雑品
		計

一、大正五年四月末日調査資産左ノ如シ

種別	土地	建物	預金	計
員数	七、六〇一	四	二	
価額	二、九八九	一、五八八〇	一〇〇、	一九〇六九

備 品		種別
価額	箇数	種別
	三九四	図書
	七〇四	器具
	二〇	器械
	一三	標本
	三	模型
	一九五	雑品
		計

種別	土地	建物	預金	計
員數	七六〇一	六	二	一
価格	二九八九	三五八〇	二〇〇	三九〇六九
備 品				
種別	圖書	器具	器械	標本
箇數	四〇九	九	七九四	一四
価格	四二、五三〇	一〇三、九〇〇	四、六九六・三五	四六、〇八〇
種別	模型	雜品	計	
箇數	五	九三	一三四	
価格	八四〇〇〇	二三七、三六〇	五、五六九・一九五	

一、大正十年四月末日調資産左ノ如シ

種別	土地	建物	預金	計
員数	七六〇一	四	二	一
価格	二九八九	一五八〇	二〇〇	一九〇九
備 品				
種別	圖書	器具	器械	標本
箇数	三三三	七	八八五	四七
価格	四三七・一八〇	七・七〇〇	三、一九六・八〇	一四九・四〇〇
				七四、三〇〇
				二〇〇
				一〇
				二六七
				四三三・四三〇

一、大正九年四月末日調資産左ノ如シ

種別	土地	建物	預金	計
員数	七六〇一	四	二	一
価格	二九九	一五八〇	二〇〇	一九〇六九
備 品				
種別	図書	器具	器械	標本
価額				
種別	模型	雑品	計	
価額				

一、大正八年四月末日調資産左ノ如シ

種別	土地	建物	預金	計
員数	七、六〇一	四	二	一
価格	二五八九	一五八〇	二〇〇	一九〇六九
備 品				
種別	図書	器具	器械	標本
箇數				
價格				
模型				
種別	雜品			
員数				
價格				
計				

一、大正七年四月末日調査資産左ノ如シ

種別	土地	建物	預金	計
員数	七、六〇一	四	二	—
価格	二九八九	一五八八〇	二〇〇	一九〇六九
備品				
種別	図書	器具	器械	標本
価額	—	—	—	—
数量	—	—	—	—
種別	模型	雑品	計	
価額	—	—	—	—
数量	—	—	—	—

一、大正六年四月末日調査資産左ノ如シ

経費収入支出

一 明治参拾壹年度

収入惣額四百参拾壹円五拾参銭貳厘

支出惣額四百参円五拾参銭貳厘

次年度へ繰越金貳拾八円

一 明治参拾貳年度

収入惣額八百貳拾円六拾参銭貳厘

支出惣額七百七拾七円六拾六銭貳厘

次年度へ繰越金四拾貳円九拾七銭

一 明治参拾参年度（本年度以降左鎮分教場経費ヲ合算ス）

収入惣額八百九拾貳円九拾七銭

支出惣額八百四拾四円六拾銭

欠損金額四拾^{（虫喰）}□円参拾七銭（牛疾流行ノ為牛墟場寄附金中欠損アリ）

一 明治参拾四年度

収入惣額五百拾四円

支出惣額参百五拾七円九銭

次年度へ繰越金壹百五拾六円九拾壹銭

一 明治参拾五年度

収入惣額六百七拾七円四拾五銭九厘

支出惣額六百貳拾六円九拾八銭七厘

次年度へ繰越金五拾^{（酒井）}四拾七銭貳厘

一 明治参拾六年度

収入惣額七百四拾参円八拾五銭二厘

支出惣額四百八拾円五拾銭二厘

次年度へ繰越金貳百六拾参円参拾五銭

一 明治参拾七年度

収入惣額七百五十八円十六銭

支出惣額〔空白〕

次年度へ繰越金〔空白〕

一 明治参拾八年度

収入惣額八百十三円四十五銭

支出惣額〔空白〕

次年度へ繰越金〔空白〕

一 明治参拾九年度

収入惣額九百拾五円〇八銭壹厘

支出惣額八百五拾参円拾四銭壹厘

次年度へ繰越金六拾壹円九拾四銭

一 明治四十年度

収入惣額貳千四百五拾参円参拾銭貳厘

支出惣額壹千四百八拾六円参拾銭貳厘

次年度へ繰越金九拾六円七拾銭

一 明治四十一年度

収入惣額壹千五百九拾六円九拾銭五厘

支出惣額全右

次年度へ繰越金無シ

一 明治四十二年度

収入惣額壹万五千壹百五拾九円八拾四銭

支出惣額壹万四千七百八拾五円五拾八銭四厘

次年度へ繰越金参百七拾四円貳拾五銭六厘

一 明治四十三年度決算

収入惣額九千貳百五拾六円貳拾六銭六厘

支出惣額全額

次年度へ繰越金一千四百「四」五十五円二十九銭五厘

一、明治四十四年度決算

歳入金六千九百四拾五円五拾銭九厘

歳出金六千九百四拾五円五拾銭九厘

繰越金ナシ

二、大正元年度決算

歳入金四千五十二円三十四銭

歳出金二千五百六十五円九十六銭

繰越金〔空白〕

一、大正二年度決算

歳入金一万九千一百五十八円五十五銭

歳出金一万九千一百五十八円五十五銭

繰越金〔空白〕

二、大正三年度決算

歳入一万四千六百四十三円十七銭

歳出一万一千五百三十二円六十三銭

繰越金三千百十円五十四銭

一、大正四年度決算

歳入金九千四百四十円四拾銭

歳出金九千四百四十円四拾銭

繰越金〔空白〕

二、大正五年度決算

歳入金六千五百十九円四十九銭

歳出金六千五百十九円四十九銭

一、大正六年度決算

歳入金六千八百七十五円一銭

歳出金六千八百七十五円一銭

一、大正七年度

歳入金一万六千十二円八十銭

歳出金全

大正八年度決算

歳入金九千三百四十八円四十九銭

歳出金全

大正九年度決算

歳入金三万四千七百九十九円四十四銭

歳出金全

大正十年度

〔空白〕

大正十一年度歳入歳出予算決算

歳入金 五千二百九拾三円

歳出金 五千二百九拾三円

歳出臨時費 七百三十円

高等科設置ニ付予算

歳入五百円

歳出五百円

雑一〇〇五〇円 旅三八三円
需、三三六〇円 修四五〇円

水道、五〇円

授業料

一 授業料等級別

上等月額貳拾銭 五学年及六学年

- 中等月額拾五錢 三学年及四学年
下等月額拾錢 一学年及二学年
- 明治参拾壹年度授業料
収入額参円九拾五錢
- 授業料全廃
- 本校経費ハ収支相償フニ足り維持上困難ヲ認メズ依テ明治参拾壹
年拾壹月以降授業料ヲ徴セズ
- 内地人児童ニ対スル授業料
- 明治参拾壹年九月民第四四九号通達ニヨリ当校ニ収容スル内地人
児童授業料月額左ノ如シ
- 各学年月額参拾錢（明治参拾六年五月分ヨリ徴収ス）
- 明治参拾六年度授業料
収入額拾五円六拾錢（派遣教授）
- 明治参拾七年度
収入額金拾九円八拾錢（附設小学科）
- 一、明治参拾八年度
収入額金十六円五十錢（附設小学科）
- 明治参拾九年度
収入額式拾六円七拾錢（派遣教授）
- 一、明治四拾年度
収入額式百五円八拾錢（公学校及派遣教授）
- 明治四拾壹年度
収入額式百拾八円（公学校及派遣教授）
- 明治四拾貳年度
収入額式百参拾壹円九拾錢（公学校及派遣教授）

- 一、明治四拾参年度
収入額金二百三十六円四十錢 公学校二〇三、四〇錢
派遣教場三三、〇〇錢
- 一、明治四拾四年度
収入額金二百七十二円七十錢内 公学校二二九、八〇錢
派遣教場四二、九〇錢
- 一、大正元年度
収入額金式百四拾四円五拾錢
- 一、大正二年度
収入額金式百五十二円
- 一、大正三年度
収入額金式百六拾円
- 一、大正四年度
収入額金〔空白〕
- 寄附
- 一 明治参拾壹年度寄附金
金拾七円五拾八錢貳厘 台南国語伝習所大目降分教場ヨリ譲与金
金参百六拾円 牛墟場收入金
金五拾円 養魚池收益金
計金四百式拾七円五拾八錢貳厘
- 一 明治参拾貳年度寄附金
金四百五拾円 牛墟場收益金
金五拾円 養魚池收益金
金四拾円 鴨田衡量收益金
計金五百四拾円

一	明治参拾参年度寄附金	一	明治四拾年度
	金四百円 牛墟場収益金		金壹千貳百七拾四円五拾五銭
	金五拾円 養魚池収益金	一	明治四拾壹年度
	金六拾円 鴨田 収益金		無シ
	金九拾円 左鎮分教場設立費トシテ同地方有志者ヨリ寄附金	一	明治四拾貳年度
	金壹百円 市場 収益金		金貳千貳百貳円四拾五銭参厘
	計金七百四拾貳円九拾七銭	一	明治四十三年度
一	明治参拾四年度寄附金		金壹千壹百円
	金参百円 牛墟場収益金	一	明治四十四年度
	金五拾円 養魚池収益金		金二千〇五十円
	金参拾貳円 鴨田 収益金	一	大正元年度
	金壹百参拾貳円 大目降街有志者ヨリ寄附金		金一千八百円
	計金五百拾四円	一	大正二年度
一	明治参拾五年度寄附金		金五十円 梁冬鴨田ヨリ寄附
	金四拾円 蘇有志寄附金	一	大正三年度
	金参拾貳円 鴨田 収益金		金五十円 全上
	計金七拾貳円	一	大正四年度
一	明治参拾六年度寄附金		金五十円 全上
	金五拾貳円 養魚池収益金	一	大正五年度
	金参拾貳円 鴨田 収益金		金五十円 全上
一	明治参拾七年度		
	全右		
一	明治参拾八年度		
	全右		
一	明治参拾九年度		
	全右		

就学生徒

一 明治参拾貳年壹月末現在

学年	在籍生徒数		出席生徒数	日日出席平均数		日々欠席平均数
	男	女		男	女	
第壹学年	三七	—	三七	一七、〇	—	二〇、〇
速成科	二二	—	二二	一二、九	—	九、一
合計	五九	—	五九	二九、九	—	二九、一

一 明治参拾参年壹月末現在

学年	在籍生徒数		出席生徒数	日日出席平均数		日々欠席平均数
	男	女		男	女	
第壹学年	八七	九	九六	二七、一	四、六	五九、九
第貳学年	一一	—	一一	五、〇	—	六、〇
合計	九八	九	一〇七	三二、一	四、六	六五、九

備考 明治参拾貳年九月末限り速成科ヲ廃ス

一 明治参拾四年壹月末現在

学年	在籍生徒数		計	出席生徒数		計	日々出席平均数		計	日々欠席平均数		計
	男	女		男	女		男	女		男	女	
第壹学年	九五	二三	一二八	五五	〇	五五	二九、一	〇	二九、一	六五、九	二三、〇	八八、九
第貳学年	一六	—	一七	一三	〇	一三	一一、九	—	一一、九	四、一	一、〇	五、一
第参学年	四	—	四	四	—	四	一、七	—	一、七	二、三	—	二、三
合計	一一五	二四	一三九	七二	〇	七二	四二、七	〇	四二、七	七二、三	二四、〇	九六、三

一 明治参拾五年老月未現在

学年	在籍生徒数		出席生徒数		日々出席平均数		日々欠席平均数	
	男	女	計	男	女	計	男	女
第壹学年	五八	一九	七七	三六	〇	二六、三	三一、七	一九、〇
第貳学年	一三	一	一三	一三	一	七、二	五、八	一
第参学年	九	一	九	六	六	五、八	三、二	一
合計	八〇	一九	九九	五五	〇	三九、三	四〇、七	一九、〇

一 明治参拾六年老月未現在 (三五年度)

学年	在籍生徒数		出席生徒数		日々出席平均数		日々欠席平均数	
	男	女	計	男	女	計	男	女
第一学年	七八	三	八一	五二	一	三八、一	三、〇	四一、一
第二学年	二九	一	三〇	二三	一	一九、一	一、〇	二〇、一
第三学年	一七	一	一七	六	五、〇	五、〇	二、〇	九、九
第四学年	七	一	七	四	五、五	五、五	一、五	一、五
計	一三一	四	一三五	八五	一	六七、七	四、〇	七一、七

〈三六年度四月 一七〇名〉

一 明治三十七年四月末日現在

在籍	学年	第一学年		〃二		〃三		〃四		〃五		〃六		計	出席歩合	欠席歩合	出席歩合		欠席歩合	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女				男	女	男	女
在籍	学年	男 九一	女 一	男 二七	女 一	男 一九	女 一	男 六	女 一	男 五	女 一	男 一	女 一	一四八	出席歩合	欠席歩合	男 七五、六	女 一	男 六九、〇	女 一

一 明治三十八年四月末日現在

在籍児童	学年
女 男 一 七 二 四	第一学年
三 二 六	第二学年
一 一 七	第三学年
一 一 九	第四学年
一 七	第五学年
一 一 一	第六学年
一 一 五 四 三	計
欠席歩合	出席歩合
女 男 一 一 六 一 九 〇	女 男 一 二 六 三 九

一 明治参拾九年四月末日現在

在籍児童	学年
女 男 二 七 〇 六	第一学年
七 五 三	第二学年
三 二 五	第三学年
一 一 四	第四学年
一 一 六	第五学年
一 七	第六学年
一 一 三 〇 九 一	計
欠席歩合	出席歩合
女 男 九 三 八 三 〇 八	女 男 一 五 七 九 二

一 明治四拾年四月末日現在

在籍児童	学年
女 男 一 五 一	第一学年
五 六 四	第二学年
二 四 七	第三学年
二 一 八	第四学年
一 二	第五学年
一 二	第六学年
二 〇 二 〇 二	計
欠席歩合	出席歩合
女 男 六 四 七 八 三	女 男 一 六 〇 二 二

一 明治四拾壹年四月末日現在

在籍児童	学年
女 男 五 四 五	第一学年
六 四 四	第二学年
四 四 六	第三学年
二 三 五	第四学年
一 八	第五学年
一 八	第六学年
一 七 一 九 九	計
欠席歩合	出席歩合
女 男 五 五 三 六	女 男 一 四 八 三 二

出席平均数	計		第四學級		第三學級		第二學級		第一學級		種別
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	体性
											第一學年
女 男		五二 三								五二 三	第二學年
		七八 七								七八 七	第三學年
欠席平均数		三七 一								三七 一	第四學年
		三三 三								三三 三	第五學年
女 男		二五 二								二五 二	第六學年
		一五 一								一五 一	計
百中比例		二一〇 一六								二一〇 一六	受持教員
		八二、五五 七五、二五 八二、〇五								八二、五五 七五、二五 八二、〇五	

一 明治四拾参年四月末日現在（本校）

出席平均数	計		第四學級		第三學級		第二學級		第一學級		種別
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	体性
											第一學年
女 男		五六 一								五六 一	第二學年
		四八 三								四八 三	第三學年
欠席平均数		四五 五								四五 五	第四學年
		三〇 一								三〇 一	第五學年
女 男		二二 一								二二 一	第六學年
		六 一								六 一	計
百中比例		二〇六 二二								二〇六 二二	受持教員
		八三、九二 八三、六二								八三、九二 八三、六二	

一 明治四拾貳年四月末日現在

全 山仔頂分校

出席平均数	計		第二學級		第一學級		種別
	女	男	女	男	女	男	体性
女 男 六七、四二 三、二四	三	三六			三	三六	第一學年
							第二學年
欠席平均数		二三		二三			第三學年
							第四學年
女 男 三六、五八 二、七六							
百中比例							
平均	教、一、雇一、	一〇〇 六	三	六四	三	三六	計
							受持教員
							教諭 長嶺牛清 雇 傳營
							受持教員

一 明治四十四年四月末日現在

日々出席平均数	計		第四學級		第三學級		第二學級		第一學級		種別
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	体性
女 男 一七五、二〇 一三、〇九	七	四〇							七	四〇	第一學年
											第二學年
日々欠席平均数	二	五一			二	五一					第三學年
											第四學年
女 男 三七、五五 九五	一	三三	一	三三							第五學年
											第六學年
百中比例	一	二七	一	二七							計
											計
平均	雇一、	教一、訓二	教諭 小野邦彦	訓導 林允	雇 蘇江燈	訓導 劉鎮	受持教員				受持教員
											受持教員
											教諭 長嶺牛清 雇 傳營
											受持教員

種別	體性	第一學級	第二學級	第三學級	第四學級	計		日々出席平均數	種別
						女	男		
第一學年	二五	四八	一	一	一	一	一	二五	第一學年
第二學年	二五	四八	一	一	一	一	一	二五	第二學年
第三學年	二五	四八	一	一	一	一	一	二五	第三學年
第四學年	二五	四八	一	一	一	一	一	二五	第四學年
第五學年	二五	四八	一	一	一	一	一	二五	第五學年
第六學年	二五	四八	一	一	一	一	一	二五	第六學年
計	二五	四八	一	一	一	一	一	二五	計
受持教員	林允	蘇江燈	劉鎮	小田平六	教諭	平	女	男	受持教員

一 明治四十五年四月末日現在

種別	體性	第一學級	第二學級	計	日々出席平均數	種別
第一學年	一	一	一	一	一	第一學年
第二學年	一	一	一	一	一	第二學年
第三學年	一	一	一	一	一	第三學年
第四學年	一	一	一	一	一	第四學年
第五學年	一	一	一	一	一	第五學年
第六學年	一	一	一	一	一	第六學年
計	一	一	一	一	一	計
受持教員	大野石太郎	傳營	〃	〃	〃	受持教員

同年 山仔頂分校

全年全月調 山仔頂分校

種別	体性	第一學級	第二學級	計	日々出席平均数	女 男 九八、六〇 七、四四	日々欠席平均数	女 男 一〇、四〇 、五六	百中比例	女 男 九〇、四六 九三、〇〇 九〇、六三	受持教員
第一學級	女 男	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	教諭 大野石太郎
第二學級	女 男	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	雇 傳營
第三學級	女 男	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	〃
第四學級	女 男	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	〃
第五學級	女 男	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	〃
第六學級	女 男	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〃
計	女 男	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	五二	受持教員

一 大正二年四月末日現在

種別	体性	第一學級	第二學級	第三學級	第四學級	第五學級	計	受持教員
第一學級	女 男	六三	六三	六三	六三	六三	六三	(訓導) 林允
第二學級	女 男	五二	五二	五二	五二	五二	五二	(〃) 劉鎮
第三學級	女 男	四三	四三	四三	四三	四三	四三	(雇) 楊清桂
第四學級	女 男	三七	三七	三七	三七	三七	三七	〃 三輪菊次郎
第五學級	女 男	二九	二九	二九	二九	二九	二九	(教諭) 小田平六
第六學級	女 男	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〃
計	女 男	六三	六三	六三	六三	六三	六三	〃

種別	第一學級		第二學級		第三學級		第四學級		第五學級		計		受持教員
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	
第一學年	七	五四									七	五四	(訓) 林允
第二學年											六	五四	(訓) 劉鎮
第三學年											七	四〇	(雇) 楊清桂
第四學年											九	三七	(雇) 上里次介
第五學年											六	三八	(教) 小田平六
第六學年												二五	
計	七	五四									三五	二四八	百中比 八六八五四

大正三年四月末日現在
大目降公學校

種別	第一學級		第二學級		計		受持教員
	女	男	女	男	女	男	
第一學年					一	三四	教諭 大野石太郎 雇 傳營
第二學年					五	四一	
第三學年					二	一九	” ”
第四學年						一〇	
第五學年						一九	百中比 八三八四九
第六學年							
計					八	一二三	

全 山仔頂分校

全山仔頂分校

種別	第一學級		第二學級		計		受持教員
	女	男	女	男	女	男	
第一學年	一	二	一	二	一	二	(教) 笠原憲一郎 (雇) 傳營
第二學年	一	二	一	二	一	二	
第三學年	一	二	一	二	一	二	
第四學年	一	二	一	二	一	二	
第五學年	一	二	一	二	一	二	
第六學年	一	二	一	二	一	二	
計	六	六	六	六	四	四	百中比 八六、四〇

大正四年四月末日現在
大目降公学校

種別	第一學級		第二學級		第三學級		第四學級		第五學級		計		受持教員
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	
第一學年	六	六	一	一	一	一	一	一	一	一	六	六	(訓) 林允 (訓) 劉鎮 (教) 小田平六 (雇) 内山泰蔵 (教) 加藤虎太郎
第二學年	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	八	八	
第三學年	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	
第四學年	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	
第五學年	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	
第六學年	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	二	
計	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	二六	二六	百中比 八五、五四

種別	第一學級		第二學級		第三學級		第四學級		第五學級		計		受持教員
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	
第一學年	九	五八	一	六六	六	四四	一	四一	二	二八	五	二二	(訓) 林允
第二學年	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	(訓) 王戊子
第三學年	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	(雇) 林福
第四學年	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	(雇) 楊清桂
第五學年	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	(教) 小田平六
第六學年	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	一	六六	百中比 八八八〇八
計	九	五八	一	六六	六	四四	一	四一	二	二八	五	二二	

大正五年四月末日現在
大目降公學校

種別	第一學級		第二學級		計		受持教員
	女	男	女	男	女	男	
第一學年	一	三三	一	二八	一	二二〇	(雇) 傳營
第二學年	一	三三	一	二八	一	二二〇	(教) 笠原憲一郎
第三學年	一	三三	一	二八	一	二二〇	百中比 八六八五九
第四學年	一	三三	一	二八	一	二二〇	
第五學年	一	三三	一	二八	一	二二〇	
第六學年	一	三三	一	二八	一	二二〇	
計	一	三三	一	二八	一	二二〇	

山仔頂分校

全山仔頂分校

種別	体性		第一学年		第二学年		第三学年		第四学年		第五学年		第六学年		計	受持教員
	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男		
第一学級	一	三	一	三	一	三	一	三	一	三	一	三	一	三	六	(雇) 傳營
第二学級	一	三	一	三	一	三	一	三	一	三	一	三	一	三	八	(教) 加藤虎太郎
計	一	三	一	三	一	三	一	三	一	三	一	三	一	三	一四六	百中比 八五八五三

学業進否ノ状況

一 明治参拾貳年壹月学期試験成績

学年	各科平均										合格	不合格	優等
	修身	國語	作文	読書	習字	算術	唱歌	体操	通約				
第壹学年	六七	六四	六七	七八	七〇	五九	七四	六九	六八、五	一〇	四	一	
速成科	八一	七〇	七一	七四	六八	七六	六〇	六一	七〇、四	一二	七	一	

一 明治参拾参年壹月学期試験成績

学年	各科平均										合格	不合格	優等
	修身	国語	作文	読書	習字	算術	唱歌	体操	通約				
第壹学年	六二	五九	七八	五五	六五	六三	六八	七四	七〇、三	六	九	二	
第貳学年	七六	六二	六八	八二	八二	七一	七三	七五	七三、六	一八	一	四	

一 明治参拾四年壹月学期試験成績

学年	各科平均										合格	不合格	優等
	修身	国語	作文	読書	習字	算術	唱歌	体操	通約				
第壹学年	八二	六七	七〇	八七	六八	八六	八二	七八	七六・二	一二	一	五	
第貳学年	七七	七〇	六五	七三	八五	七六	九〇	七六	七五・六	九	二	五	
左鎮分教場 第壹学年	七六	六六	八四	七一	七五	四一	五七	六八	六七・六	一〇	四	一	

学年	修身	国語	作文	読書	習字	算術	唱歌	体操	通約	合格	不合格	優等
第壹学年	六八	五八	五九	六四	五八	四九	五八	六二	五八、二	一九	九	五
第貳学年	八九	五三	六三	八五	六四	六二	六六	六三	六八、二	一七	五	五
第參学年	七七	六二	七〇	七二	八九	五二	五七	六五	七二、六	四	二	二
第四学年	九四	八〇	六六	八八	九四	六五	六九	九〇	八〇、六	五	一	二
左鎮分教場 第壹学年	七三	／	八一	七六	六六	六一	／	／	七一、二	一〇	六	七
全上 第貳学年	八〇	／	八〇	九七	七三	九七	／	／	八五、三	三	一	三
全上 第參学年	八〇	／	一〇〇	一〇〇	八五	九〇	／	／	九一、〇	一	〇	一
小学科 第壹学年	八七	／	九〇	九〇	八三	六五	八五	八〇	八三、一	二	二	二
全上 第貳学年	七二	／	九〇	九〇	八五	八〇	／	／	八二、八	一	一	一
全上 第四学年	八〇	／	七〇	六五	八〇	一〇〇	八〇	八五	八〇、〇	一	一	一

一 明治参拾六年参月学期試験成績

学年	修身	国語	作文	読書	各科平均					合格	不合格	優等
					習字	算術	唱歌	体操	通約			
第壹学年	六一	五三	七三	六八	八五	六九	〔七五〕七〇	六五	六七、四	二三	一〇	九
第貳学年	七一	六八	六四	八一	八六	四三	〔八〇〕七五	八一	七〇、七	七	一	一
第參学年	八二	八一	八八	八二	九二	七二	〔四二〕八〇	八八	八三、一	七	一	四
左鎮分教場 第壹学年	七三	三四	七三	五八	七三	九九	〔六九〕四二	六七	六四、八	五	四	一
全上 第貳学年	七七	七四	七二	七八	八三	九〇	〔七〇〕六九	七三	七六、九	一二	一	六
小学科 第壹学年	七八	／	六五	八〇	七〇	三〇	七三	／	六五、九	一	一	一
全上 第貳学年	七五	／	九〇	一〇〇	八五	一〇〇	七〇	／	八六、七	一	一	一

一 明治参拾五年壹月学期試験成績

一 卒業者

年月日	学科	姓名	生年月日
明治参拾貳年貳月壹日	速成科	林世鴻	明治十二年二月
明治参拾貳年貳月壹日	速成科	林世春	明治九年九月
明治参拾二年参月参拾日	尋常小学校	田中明	明治二十四年十二月

校長在職年調

1	2	3	4	5	6	7	8
明治三十一年十月一日	〃 参拾四年六月式拾八日	〃 四拾参年六月式拾五日	〃 四拾五年二月拾九日	大正五年十二月六日	大正八年七月八日	大正九年十月五日	
教諭兼校長	教諭兼校長	教諭兼校長事務取扱	教諭兼校長	全	全	全	
京都府平民	和歌山県土族	京都府平民	埼玉県土族	広島県平民	徳島県平民	茨城県平民	
中田政之助	酒井達	小野邦彦	小田平六	大苗大雅	高岡武明	中村亀吉	安部俊亮
明治四年八月	慶応元年六月	明治十六年十月	明治貳年拾貳月	明治十八年三月二日	明治十五年二月八日	明治四年十二月十七日	
明治三十四年二月十八日転勤	〃 四拾参年六月拾三日死亡	明治四十五年二月十九日転勤	大正五年十二月六日転勤	大正八年七月八日鳳山ニ転勤	大正九年九月三十日嘉義子公ニ転		
貳年四ヶ月	九年四ヶ月	壹年九ヶ月	四年十ヶ月	二年七ヶ月	一年二ヶ月四ヶ月		

職員

×	×	×	×	×	×	×	×
明治三十二年四月一日	全日	明治三十二年十月一日	〔退職年月日〕就職年月日	官職名	族籍	姓名	生年月
雇	雇	教諭兼校長	京都府平民	林登庸	中田政之助	萬延元年一月	明治四年八月
本嶋人	本嶋人	楊其琛	明治八年一月	明治三十四年二月二十八日台南師範学校へ転任	明治三十五年三月二十七日病死		

明治四十三年六月 ^{〔史實い〕} □□日	雇		全	全	全	全	「明治四」大正三年三月三十一日解雇
明治四十三年六月三日	全		全	陳學淵	安政九年一月	明治四十三年十二月二十七日解雇	明治四十三年三月三十一日解雇
明治四十三年八月廿五日	教諭 山仔頂分校主任	愛媛県平民	大野石太郎	明治廿一年十月	明治廿一年十月	大正二年八月十三日林仔邊公学校校長ニ転勤	
明治四十三年十二月二十六日	雇	本島人	傳營	明治廿二年十月	明治廿二年十月	退	退
明治四十四年三月卅一日	訓導	全	林允	明治二十四年十二月	明治二十四年十二月	退	退
明治四十五年二月十九日	教諭兼校長	埼玉県士族	小田平六	明治貳年拾貳月	明治貳年拾貳月	転	転
今年八月十五日	雇	鹿児島県士族	平山季雄	明治貳拾六年貳月	明治貳拾六年貳月	大正二年三月八日解雇帰国	大正二年三月八日解雇帰国
大正二年三月三十一日	〃	本島人	楊清桂	〃 貳拾四年拾月	〃 貳拾四年拾月	新分へ転 後退職	新分へ転 後退職
〃 年四月一日	〃	埼玉県平民	三輪菊次郎	〃 拾八年壹月	〃 拾八年壹月	大正二年九月九日解雇帰国	大正二年九月九日解雇帰国
〃 年四月三十日	〃	本島人	楊氏「阿」岡	〃 貳拾九年拾壹月	〃 貳拾九年拾壹月	大正九年十一月二日教諭ニ任官	大正九年十一月二日教諭ニ任官
〃 年八月十九日	教諭	新潟県平民	笠原憲一郎	〃 貳拾參年一月卅日	〃 貳拾參年一月卅日	大正十一年四月一日安順寮公学校校長ニ転任	大正十一年四月一日安順寮公学校校長ニ転任
大正二年九月三十日	雇	沖縄県	上里次介	明治八年八月二十二日	明治八年八月二十二日	大正三年五月二十八日打狗小学校教諭ニ転任	大正三年五月二十八日打狗小学校教諭ニ転任
大正二年八月二十九日	雇	鹿児島県	内山泰蔵	明治二十九年二月二十五日	明治二十九年二月二十五日	大正五年三月三十一日打狗小学校教諭ニ転任	大正五年三月三十一日打狗小学校教諭ニ転任
大正四年三月三十一日	教諭	埼玉県	加藤虎太郎	明治二十七年十月十二日	明治二十七年十月十二日	転	転
大正三年十一月三日	雇	新潟県	清水リウ	明治二十九年七月二十六日	明治二十九年七月二十六日	大正五年四月一日安順寮公学校へ転任	大正五年四月一日安順寮公学校へ転任
大正五年二月二十八日	雇		林福	明治三十一年九月十一日	明治三十一年九月十一日	退	退
大正五年三月三十一日	訓導		王戊子	明治二十九年七月六日	明治二十九年七月六日	転	転
大正五年六月十二日	教諭	広島県	沖元謙市	明治二十四年七月三日	明治二十四年七月三日	藤笠公学校へ転任	藤笠公学校へ転任
大正五年十月十九日	雇		蘇江燈	全二十四年五月六日	全二十四年五月六日	退職	退職
大正五年十二月六日	校長	広島県	大苗大雅	全十八年三月二日	全十八年三月二日	鳳山公学校へ転任	鳳山公学校へ転任
大正六年三月三十一日	教諭	愛媛県	山口哲也	〔公〕二十九年一月二十五日	〔公〕二十九年一月二十五日	崗仔林分校へ転任 後休職	崗仔林分校へ転任 後休職

大正六年十一月九日	雇	広島県	谷テルコ	明治三十一年十月二十五日	退職
大正七年四月二十六日	雇	(崗分)	穆徳昌	全三十九年七月十八日	
大正七年四月一日	教諭	崗分主任 佐賀県	副島末太郎	全三十五年十一月五日	阿公店公学校へ転
大正七年十二月二十七日	教諭	新分主任 鹿児島県	喜入柔準	全三十二年十二月十日	石冲分校へ転
大正八年二月二十八日	雇	新分	黄永居	全三十二年三月八日	退職
大正八年十月二日	雇	全	王榮達	全三十五年九月三日	御用済免職務
大正八年三月三十一日	教諭	新分主任 愛知県	矢野乙矢	全三十九年十一月六日	退職
	〔雇〕		〔穆清桂〕		
大正七年三月一日	訓心	新分	林氏雪梨	明治三十三年一月十二日	新市公へ転
大正七年三月一日	訓心		戴氏金	全三十四年八月二十七日	退職
大正九年二月二十一日	訓心	新分	鄭耀坤	(公)三十二年十一月五日	新市公へ
大正八年十一月二十八日	雇		林清南	明治三十三年十一月十二日	新市公へ
大正九年十月五日	校長	茨城県	中村亀吉	明治三十五年一月十七日	
全七年三月三十一日	教諭	熊本県	沼川定雄	全三十二年一月十七日	大正十年十一月十二日林鳳營公長ニ命ス
全九年三月三十一日	全	長野県	竹村安太郎	全三十二年五月十四日	大正十二年十一月六日依願免本官
全七年三月三十一日	全	本島人	梁長江	全三十二年五月八日	八年十二月二十八日教諭ニ任官
全八年三月三十一日	全	全	王桂塘	全三十二年八月十日	九年三月三十一日教諭ニ任官
全八年七月八日	全	熊本県	山中初次	全三十六年六月一日	九年九月十一日教諭ニ任官
全八年八月二十六日	教心	岡山県	戸田浩	全三十四年九月十七日	大正十年四月廿三日依願退官
全八年四月二十日	全	佐賀県	田中信治	全三十七年十月十日	大正十一年四月二十七日依願退職
全八年十月一日	訓心	本島人	林大埤	(公)三十六年十月十六日	

大正十年六月〔四〕廿五日	教心	福岡県平民	則松知明		大正十年六月三十日依願免官
大正十年六月廿三日	教諭	本島人	王桂塘		大正十年六月廿五日南化公へ転勤
	教心	岡山県平民	戸田浩		大正十年四月二十三日依願免本職 郡役所へ
大正十年三月卅一日	教諭	熊本県平民	森知明	明治三十二年五月十四日	
大正十〔一〕年四月廿四日	訓心	本島人	李氏鶯	明治三十八年十月一日	大正十三年三月三十一日准訓導
大正十年四月廿四日	訓心	本島人	陳氏嫌	明治三十九年二月十九日	
〃	訓心	〃	蕭其來	明治三十九年七月二十二日	大正十三年三月三十一日准訓導
大正十年四月廿四日	訓心	〃	陳文裕	明治三十九年七月廿七日	大正十三年三月三十一日准訓導
大正十年三月三十一日	教諭	本島人	林火爐	明治三十二年十月四日	
大正九年十二月廿五日	教心	岡山県	河本静子	全三十四年一月廿八日	崙北公学校ヨリ転任
大正九年二月二十八日	全	全	蔡万枝	全三十六年十一月二十一日	〃
大正八年二月二十八日	全	全	李信德	全三十四年五月二十三日	〃
大正六年三月三十一日	崗教諭	全	李德彰	全三十四年五月七日	大正〔七〕八年十二月二十九日任官 岡子林公
全	全	全	林放	〔全〕三十六年二月十日	大正十一年三月三十一日依願退職
全	全	全	鄭新丁	〔全〕三十六年十一月二十六日	大正十一年四月九日岡子林公ニ転勤
全	全	全	黄石印	全三十四年八月十九日	
全	全	全	林氏連子	全三十五年二月十六日	大正十一年九月四日依願退職
全	全	全	歐神恭	〔全〕三十三年六月一日	地方分属ノ結果岡子林公へ

職員賞罰

年月日	摘要	官職名	姓名
明治三十二年十二月十六日	教務特別勉勵ニ付慰勞手当トシテ金五拾參円給与ス	教諭兼校長	*****
全日	特別勉勵ニ付慰勞手当トシテ金拾八円給与ス	雇	***
全日	全上 金七円給与ス	雇	***
明治三十三年十二月二十二日	職務特別勉勵ニ付慰勞手当トシテ金四拾円ヲ給与ス	教諭兼校長	*****
全日	全上 金拾五円ヲ給与ス	教諭	*****
全日	事務特別勉勵ニ付慰勞手当トシテ金七円ヲ給与ス	雇	***
全日	全上 金五円ヲ給与ス	雇	***
明治三十四年十二月二十三日	職務特別勉勵ニ付為慰勞金參拾五円ヲ給与ス	教諭兼校長	*****
全日	全上 金參拾五円ヲ給与ス	教諭	*****
全日	全上 金拾壹円ヲ給与ス	雇	***
全日	全上 金拾五円ヲ給与ス	訓導	***
明治三十四年十二月二十三日	職務特別勉勵ニ付為慰勞金四円ヲ給与ス	雇	***
明治三十五年十二月二十二日	職務特別勉勵ニ付為慰勞金四拾五円ヲ給与ス	教諭兼校長	*****
全日	全上 金拾円ヲ給与ス	雇	***
全日	全上 金六円ヲ給与ス	雇	***
明治三十六年十二月二十二日	職務特別勉勵ニ付金五拾五円ヲ賞与ス	教諭兼校長	*****
全日	全上 金拾円ヲ賞与ス	訓導	***
全日	全上 金九円ヲ賞与ス	訓導	***
全日	全上 金拾貳円ヲ賞与ス	雇	***
全日	全上 金六円ヲ賞与ス	雇	***
明治卅七年十二月廿二日	全上 金六拾円ヲ賞与ス	教諭兼校長	*****
全日	全上 金拾參円ヲ賞与ス	雇	***
全日	全上 金貳拾壹円ヲ賞与ス	訓導	***
全日	全上 金拾壹円ヲ賞与ス	全	***
全日	全上 金五円ヲ賞与ス	雇	***
全日	全上 金七円ヲ賞与ス	訓導	***
明治參拾八年十二月廿二日	全上 金六拾五円ヲ賞与ス	教諭兼校長	*****

全三十九年十二月廿二日	全上	金六拾七円ヲ賞与ス	全	全	全	***
全四十年十二月廿三日	全上	金五拾円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十一年十二月廿一日	全上	金六拾七円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十二年十二月廿一日	全上	上	全	全	全	全
全四十三年六月十二日	全上	(金) 貳百五拾円ヲ賞与ス	全	全	全	***
明治三十八年十二月廿二日	全上	金拾六円ヲ賞与ス	雇	***		
明治卅八年十二月廿二日	全上	金貳拾七円ヲ賞与ス	訓導	***		
全卅九年十二月廿二日	全上	金貳拾四円ヲ賞与ス	全	全	全	全
明治四十年十二月廿三日	職務格別勲励ニ付金貳拾四円ヲ賞与ス		訓導	***		
全四十一年十二月廿一日	全上	金貳拾七円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十二年十二月廿一日	全上	金參拾円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十二年十二月廿一日	全上	金貳拾八円ヲ賞与ス	全	全	全	全
明治卅八年十二月廿二日	全上	金拾八円ヲ賞与ス	全	全	***	
全卅九年十二月廿二日	全上	金拾六円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十年十二月廿三日	全上	金拾五円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十一年十二月廿一日	全上	金拾九円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十二年十二月廿一日	全上	金貳拾壹円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十二年十二月廿一日	全上	金貳拾四円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全卅八年十二月 ^(山) 〇二日	全上	金拾参円ヲ賞与ス	雇	***		
全卅九年十二月廿二日	全上	金拾参円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十年十二月二日	全上	金拾五円ヲ賞与ス	全	全	***	
全卅八年十二月廿二日	全上	金拾五円ヲ賞与ス	訓導	***		
全卅九年十二月二十二日	全上	金拾参円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十年十二月廿三日	全上	金拾九円ヲ賞与ス	教諭	***		
全四十一年十二月廿一日	全上	金參拾六円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十二年十二月廿一日	全上	金參拾五円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十二年十二月廿一日	全上	金四拾七円ヲ賞与ス	全	全	全	全
全四十二年十二月廿一日	全上	金五拾壹円ヲ賞与ス	全	全	***	

全四十二年十二月廿一日	全上	金拾六円ヲ賞与ス	雇	*****
全四十二年十二月廿一日	全上	金拾五円ヲ賞与ス	全	*****
明治四十三年十二月廿一日	職務格別勉勵ニ付金七円ヲ賞与ス		雇	*****
全日	全上	金八円ヲ賞与ス	全	*****
全日	全上	金四拾円ヲ賞与ス	教諭	*****
明治四十一年十二月廿一日	全上	金拾円ヲ賞与ス	雇	***
明治四十二年十二月廿一日	全上	金拾貳円ヲ賞与ス	全	全
明治四十三年五月卅一日	全上	金拾円ヲ賞与ス	教諭兼校長取扱	*****
明治四十四年十二月二十一日	職務格別勉勵ニ付金六拾円ヲ賞与ス		教諭	*****
〃	〃	金參拾七円ヲ賞与ス	訓導	***
〃	〃	金拾八円ヲ賞与ス	〃	***
〃	〃	金拾五円ヲ賞与ス	雇	***
〃	〃	金拾七円ヲ賞与ス	〃	***
大正元年十二月廿一日	事務格別勉勵ニ付金百拾円ヲ賞与ス		教諭兼校長	*****
〃	〃	金七拾円ヲ賞与ス	教諭	*****
〃	〃	金貳拾四円ヲ賞与ス	訓導	***
〃	〃	金貳拾五円ヲ賞与ス	〃	***
〃	〃	金拾五円ヲ賞与ス	雇員	*****
〃	〃	金貳拾円ヲ賞与ス	〃	*****
〃	〃	金拾七円ヲ賞与ス	教諭兼校長	*****
大正三年十二月二十一日	事務格別勉勵ニ付金八拾五円ヲ賞与ス		教諭	*****
〃	〃	金四拾円ヲ賞与ス	訓導	*****
〃	〃	金拾六円ヲ賞与ス	訓導	***
大正三年十二月二十一日	事務格別勉勵ニ付金拾六円ヲ賞与ス		雇員	***
〃	〃	金拾貳円ヲ賞与ス	〃	***

職員賞与

年月日	摘要	官職	姓名
大正十二年十二月十五日	事務格別勉勵ニ付金貳百八十円ヲ賞与ス	校長	*****
全日	全上 九十五円ヲ賞与ス	訓導	*****
全日	全上 百參拾円	全	*****
全日	全上 百貳拾円	全	*****
全日	全上 七拾円	全	*****
全日	全上 六拾円	全	*****
全日	全上 六拾六円	全	*****

” 金六円ヲ賞与ス

大正三年十二月二十一日

事務格別勉勵ニ付金百拾五円ヲ賞与ス

”	金六円ヲ賞与ス	”	金六円ヲ賞与ス
”	金七拾四円ヲ賞与ス	全	教諭
”	金貳拾四円ヲ賞与ス	全	訓導
”	金貳拾六円ヲ賞与ス	全	全
”	金(空白)	全	全
”	金拾參円ヲ賞与ス	全	全
”	金六円ヲ賞与ス	全	全
大正四年十二月二十 ^(正) 日	事務格別勉勵ニ付金百拾四円ヲ賞与ス	全	教諭
”	金六拾五円ヲ賞与ス	全	全
”	金參拾參円ヲ賞与ス	全	全
”	金貳拾六円ヲ賞与ス	全	全
”	金貳拾參円ヲ賞与ス	全	全
”	金(空白)	全	全
”	金拾四円ヲ賞与ス	全	全
”	金八円ヲ賞与ス	全	全
”	金十一円ヲ賞与ス	全	全

就職年月日	族籍	姓名	生年月	移動
明治三十一年十一月十一日	本嶋人	李學禮	嘉永五年十一月六日	明治四十年三月退職
全日	本嶋人	蘇緝熙		明治三十二年十二月依願免職
明治三十二年十二月二十二日	本嶋人	王振邦		明治三十七年十二月(空白)日病死
明治三十三年七月(空白)日	全	廖語	安政五年九月二十一日	明治三十八年一月(空白)日依願免職
明治三十八年一月九日	全	蘇葉	慶応三年十二月	明治四十一年三月退職
全	全	王武	明治元年八月	全
全	全	楊源	安政二年九月	全
明治卅八年一月九日	全	梁清溪	文久二年六月	大正八年九月二十日死亡退職

学務委員

年月日	職務勉勵賞与
大正八年十二月廿一日	金六十五円
大正九年十二月廿一日	金六十五円
大正十年十二月廿一日	金六十五円
大正十一年「大正」十二月廿一日	金六十円
大正十二年十二月廿一日	金六十五円
大正十三年十二月廿一日	金六十円
大正十四年十二月廿一日	金六十円
大正十五年十二月廿一日	金参十円

校医賞与金

年月日	職務勉勵賞与
全日	全上 三十四円
全日	全上 三十五円
全日	全上 三十八円
全日	全上 三十五円

年月日	職務勉勵賞与
全日	全 教員心得
全日	全
全日	全
全日	全

年月日	職務勉勵賞与
全日	全上 三十四円
全日	全上 三十五円
全日	全上 三十八円
全日	全上 三十五円

年月日	職務勉勵賞与
全日	全上 三十四円
全日	全上 三十五円
全日	全上 三十八円
全日	全上 三十五円

全	全	林 妥	元治元年十一月	明治四十一年三月退職
明治三十八年一月九日	全	王 錦	安政二年十一月	大正六年一月二日死亡退職
全	全	□（虫喰い）達	元治元年十一月	明治四十年三月退職
明治四十年四月	本嶋人	歐□（虫喰い）進	明治九年五月	明治四十年（空白）退職
全四十年五月十五日	全	梁天賜	安政三年一月	
明治四十一年三月五日	全	林榮芳	安政三年四月	明治四十年五月十五日学務委員ヲ命セラレ全四十一年二月十二日免職
明治四十一年二月十二日	全	楊左泉	明治八年十月	山仔頂分校
全	全	陳大海	明治十三年九月	全右

国語普及功勞者表彰

大正十四年十月三十日

新化街新化觀音廟三四八 蘇江燈

大正十五年十月三十日

林 允

昭和二年十月三十日

林神助

学務委員賞罰

年月日	摘要	姓名
明治三十六年三月（空白）日	職務勉勵ニ付慰勞手当トシテ金拾五円ヲ給与ス	***
全日	全上 金拾五円ヲ給与ス	***
明治三十六年十二月二十二日	職務格別勉勵ニ付金拾円ヲ賞与ス	***
全日	全上 金拾円ヲ賞与ス	***
全日	全上 金拾円ヲ賞与ス	***
明治四十年十二月廿三日	全上 金八円ヲ賞与ス	***
全四十年十二月二十一日	全上 金拾円ヲ賞与ス	全
全四十年三月卅一日	全上 金拾円ヲ賞与ス	全
全四十四年三月卅一日	全上 金八円ヲ賞与ス	全
全三十八年十二月廿二日	全上 金拾円ヲ賞与ス	***
全三十九年十二月□□□（虫喰い）	全上 金拾円ヲ賞与ス	***

[illegible]

會計補助員

大正十一年

大正十一年十二月廿五日

大正十二年十二月廿五日

〃 金拾円ヲ賞与ス

事務格別勉勵ニ付金拾二円ヲ賞与ス

***新化街役場

大正十三年六月三十日

新化公学校小使ヲ免ス 林原面

大正十三年七月十五日

新化公学校小使ヲ命ス日給六十錢

〔破損〕

新化公学

御用済ニ付小使ヲ免ス

大正十四年八月三十一日

嚴麒麟

公学校小使ヲ命ス

日給五十錢ヲ給ス 大正十四年九月一日

十五年四月一日 新化公学校小使ヲ命ス 日給五十錢 林開字

十五年四月〔卅〕一日 御用済ニ付小使ヲ免ス 嚴麒麟

十五年四月八日 農業補習学校農夫ヲ命ス 陳仙

十五年五月九日 御用済ニ付小使ヲ免ス 陳炒

十五年五月十日 新化公学校小使ヲ命ス 林志

日給五十五錢

大正十五年十月一日 日給五十八錢ヲ給ス 林志

〃 十月一日 日給五十五錢ヲ給ス 林開字

大正十五年四月一日 小使ヲ命ス 林開字 日給五十錢

昭和二年五月十二日 御用済ニ付小使ヲ免ス 林開字

昭和二年五月十二日 小使ヲ命ス 姚有祿 日給四十五錢ヲ給ス

学事ノ状況

一 本校設置区域ハ式街壹百拾八庄ヨリ成リ東西六里南北参里余ニ互リ人口貳万九千七百有余ノ多キニ至ルモ普通教育ノ基礎タル公学校ハ只一ノ本校及左鎮分教場アルノミ是恰モ広漠タル原野ノ一樹枝ニ過キサルノ觀アリ之ニ因テ栽培ニ努メ繁茂ヲ計ル前途尚ホ遼遠ノ感ナクンバアラズ

一 本嶋旧来清国政^{マデ}度ノ許ニ成育シ専ラ孔孟ノ学ヲノミ妄信スルノ久シキ心頑ニシテ自省ノ念ニ乏シク旧ニ^{破損}フノ風弊^{破損}ニ^{破損}居住少ク^{破損}必要少キトハ就字ヲ障害スル^{破損}ナリトス加之本校設置区域内ハ最ニ農業地ナルヲ以テ旧慣上耕作ヲ以テ足レリトナシ概シテ向学心ニ乏シ雖然当校設置以來年二月ニ勸誘奨励怠ラサルノ結果現今稍其必要ヲ感シ逐次漸進ノ傾向アルニ至レリ

一、本年ニ入リテ本嶋殊ニ南部ハ断髮解纏ノ風行ナハレ当校生徒ハ全部此二ツヲ為スニ至レリ而シテ斯ハ一ノ時勢ニ伴ナフ風潮ト見ルベキモ一面其父兄ニ於テモ古陋ヲ捨テ新制度ノ学業ニ傾心シ^{マデ}ツ、アルヲ見ルベク近年漸次生徒ノ入学ニ関シ督促勸誘ナクシテ自身入学ヲ希望スル者多キハ喜ブベキ現象ナリ

新化農業専修学校予算

年度	雑給	需用費	修繕費	臨時費	計	備考
大正十五年年度	三八二円	八三一円	―円	四五二円	一、六六六円	
昭和二年年度	五〇七	一、三三六	一六八	―	二、三〇一	
全三年度	五四一	一、五五五	七五	三〇	二、二〇一	
全四年度	五五一	一、三三七	三〇	―	一、九一八	
全五年度	八九五	二、七〇九	二六	一二四	三、八五四	
全六年度	八六五	二、五九六	一〇〇	―	三、五六一	
全七年度	六九五	二、〇九九	一七〇	―	二、九六四	
全八年度	七四五	二、〇七九	一〇〇	―	二、九二四	
全九年度	八九六	一、一三一	二〇〇	奨学補助一、五一二 実習費一、二〇〇	四、九三九	
全十年度	一、〇〇〇	一、五三一	二〇〇	奨学補助一、五〇〇 実習費 八〇〇 営繕土木七 二〇〇	五、〇三一	
全十一年度	一、〇四五	二、〇五五	三三六	奨学補助一、〇八〇 奨学ホ助金 八六四 建築費 一〇〇 宿舍修繕 二〇〇	三、四三六	
昭和十二年年度	一、〇六六	二、三三四	二五〇		三、八一四	
全十三年度	一、一九四	二、五二〇	四五〇	九〇〇	四、一六四	
全十四年度	一、一五四	二、三二〇	三五五	一、二六〇	五、〇八九	
全十五年度	一、七七二	三、四五〇	二八八	一、四四〇	五、五一〇	
全十六年度	二、四一一	二、八八二	三〇〇	一九、六〇四	二五、一九七	全 外ニ校舍並寄宿舎建築ニ新化信用組合ヨリ五万円借入予定議決 建築費(決定) 十六年度 一七、三六〇 十七年度 二二、八八〇 十八年度 一八、三六〇
全十七年度	三、一二四	三、一一六	一、二九六	二四、九八〇	三三、五一六	
全十八年度	三、一八二	二、四六八	五二一	一八、三五八	二四、五二九	
十九年度	三、九四八	四、一五八	七一九	三、〇〇〇	一一、八二五	
二十年度	四、四四二	五、六八九	二、三四〇	三、二〇〇	一五、六七一	

31	31	30	28	29		29	28	28	27							○	
〃	昭和 一七、三	昭和 一六、三	昭和 一四、四	昭和 一五、九	大正 十五年五月八日	昭和 一五、三	昭和 一四、九	昭和 一四、一	昭和 一二、四	昭和 一一、三	昭和 九、一〇	昭和 九、五	昭和 七、八	昭和 五、四	昭和 三、四	昭和 四、五	
一九、三、三一	一九、三、三一	昭和 一七、三	昭和 一六、三	昭和 一七、三		一九、一、一〇	昭和 十五、九		全一四、四	全一四、一	全一〇、一二	全一〇、四	全一五、四	全七、七	全一二、三	昭和 九、八	
二、〇	二、〇	一	二、	一、六		三、一〇	一、一		二、〇	三、一	一、二	一、〇	七、八	二、三	九、〇	五、四	
京都須知農林学校	福井師範二部	台北師範校演習科	東京農業大学農学部	台南師範学校本科	台湾総督府医学校	台中師範学校演習科	富山県立産業講習所 第一部	茨城県立農業補習学校 教育養成所	台北師範演習科 東京帝大 農業教員養成所	水戸農学校	茨城県立 高等蚕業学校	京都 農林専門部	台北帝大	岩手県立農学校	大分県立 四日市農学校	千葉師範学校	
実業学校教員	国訓	国訓	中等教員	「公甲〈本〉」正 小本正	公医	「公甲〈本〉」正 小本正	小農專正	尋本正	「公甲〈本〉」正 中等教員（農教）	農專正	農專正	中等教員（農業）	農專正	農專正	農專正	「公甲〈本〉」正	
教諭 （全監）	学校長	学校長	学校長	助教諭 （全監）	校医	助教諭 （全監）	助教諭 （全監）	助教諭 （全監）	教諭	教諭	助教諭	助教諭	教諭	助教諭	助教諭	助教諭	
今西愛之助	平井高行	中島潔	石井勝三	丸野助	梁道	大島一夫	長久松雄	大和田郁男	芦川熊次	山口羊生	高野穰	田中綾雄	國分廉二	池田孝	郭良恩	高野太平	
京都府	福井	鹿児島	東京	熊本	台南	佐賀	富山	茨城	神奈川	茨城	長野	滋賀	岩手	大分	台南	千葉	

新化農職事務處：

一、據王教本鎮長稱：在貴校服務年資其離職日期填入內簿有差錯。

應為民國三十四年十二月五日。經查確為屬實。當時我「是」印在貴校兼代校長、可予以證明。

二、敬請予以更正。

現任 台南縣山上國校校長 王萬全

49、9、20 王萬全之印

							33	33	33	33	32	31
民國三十五年六月一日	〃 卅五、五、一四	〃 卅五、四、一六	〃 卅五、四、一六	〃 卅五、四、一六	民國卅五、四、一六	民國卅四、一二、三	昭和一九、一〇、一	昭和一九、六、一九	昭和一九、三、三一	昭和一九、三、三一	昭和一九、四	〃
				民國卅八、九、二〇		民國卅七年二月校長 民國卅七年二月至卅八年 拾月七日教務主任	民國卅五、一、五	民國卅五、二、二八	昭和一九、一〇、一		昭和一九、一〇	昭和一九、四
									〇、六			一、二
台南農業	台南師範	嘉義農林	嘉義農林	嘉義農林	台南二中	台南師範	台南師範	台北師範	嘉義農林	台北師範	台南師範講習科	熊本第二師範一部
	國訓			專科教員	國初訓	國訓	國訓	國訓	初訓	國訓	國訓	國訓
代用教員	教員	代用教員	教員	教員	教員	校長	助教諭金監	台灣公立中等 學校校長	助教諭	助教諭	(金監) 助教諭	助教諭 (金監)
陳水和	林滄海	蔡金泉	王寶川	林仁德	周逢傑	王萬全	石井正	川田文次	林仁德	川上保	王教本	青山千代人
台南	台南	台南	台南	台南	台南	台南	千葉	大阪	台南	熊本	台南	熊本

在籍生徒数累年比較

年度	学年		
	第一学年	第二学年	第三学年
大正十五年	四二		
昭和二年	二六	二七	
全三年度	四〇	一五	
全四年度	三〇	一六	
全五年度	二〇	一一	
全六年度	二一	一五	
全七年度	三〇	一二	
全八年度	二七	一九	
全九年度	四一	一七	
全十年度	三四	二七	
計			
	六一	五八	四六

年度	学年		
	第一学年	第二学年	第三学年
昭和十一年	二〇	二七	
全十二年度	二一	一五	
全十三年度	四九	二〇	
全十四年度	三九	四三	
全十五年度	三五	三八	
全十六年度	四五	三三	
全十七年度	五五	三九	
全十八年度	五八	四九	
昭和十九年度	五四	五一	
民國三十四年度	五八	五〇	
民國三五年度	六一	四〇	
計			
	一四三	一五八	一四三

卒業生出身街庄別調

卒業年別	街庄別									
	新化	新市	安定	善化	山上	玉井	楠西	南化	左鎮	其他
昭和三年(第一回)	八		五					一	四	一
全四年(第二回)	八				一	一			一	二
全五年(第三回)	二	一	一		二	一			一	四
全六年(第四回)	一		三			四				三
全七年(第五回)	三				一		二		二	二
全八年(第六回)	三	一	三			二		一		一
全九年(第七回)	七	四	二		二	三		一		
全十年(第八回)	五	二	五			一		二		
全十一年(第九回)	五	二	八		一	二		二		
全十二年(第十回)	五		六	二		四	一	六	二	
全十三年(第十一回)	一		三	一		三		五	一	
昭和十四年(第十二回)	六	三	二			二	一	四	二	
計										
	一九	一四	一二	一一	一〇	一一	一七	二五	二六	一五

以上六修業年限
二年卒業者

	全 十五 年 (第十三回)	全 十六 年 (第十四回)	全 十七 年 (第十五回)	昭 和十八 年 (第十六回)	昭 和十九 年 (第十七回)
	七	二	一二		二〇
	三	二	一		一
	四	六	四		五
	一	一	二		一
	二	一	一		九
	四	二	一		一
	六	三	二		二
	九	三	四		一
	八	七	一		四
	一	三	三		八
	四	三	三		五〇
	二四二	三〇九			

設備

一、創立當時ノ設備（公学校併置設當時）

校地

種別	坪数	備考
建物敷地	七九	公学校ヨリ借入
運動場	六三二〇	全上
実習地	三〇〇〇	公学校用地及 民有地借入
其他	二〇	公学校ヨリ借入
計	一一、二〇九	
備考		

建物

種別	坪数
教室	四〇
寄宿舎	二〇
肥料舎	六
農具舎	九
牛舎	三
豚舎	三
鶏舎	三
計	八四

二、昭和九年五月當時ノ設備（旧糖業試験所跡へ移転當時）

種別	面積
水田	二甲
畑	一甲
其ノ他	三甲
計	六甲
備考	

建物

種別	坪数
事務室	三七、五
教室	四九、〇
寄宿舎	九四、〇
食堂	三九、〇
校長宿舎	二六、〇
職員宿舎	一一二、〇
農具舎	七〇、〇
鶏舎	八四、〇
其ノ他	二二四、〇
計	七二五、五

〇〇昭和十七年「四」五月竣工
 二六
 九七、五

三、昭和十五年九月ノ設備

昭和十五年六月二十九日附指令第八七九号国有建物九百四坪三六譲与許可
 昭和十五年六月二十九日附指令第八七五〇号国有地拾貳甲〇五二五貸付許可
 (但シ自昭和十五年六月二十九日至昭和貳拾年六月二十八日迄満五年)

建物

本館(事ム室)	教室実験室	寄宿舎	食堂	農具舎	収納舎	堆肥舎	家畜家禽舎	硝子室	校長宿舎	職員宿舎	其ノ他	計	備考
四八坪	一〇六	一三〇	四〇	七〇	二八	一〇五	一二三	二〇	二六	一二二	四	九三五坪	三一坪ハ学校ニテ建設セシモノナリ

土地

使用区画図左記ノ通り〔図7〕

建物敷地	水稻区	輪作第一区	輪作第二区	輪作第三区	試作区	雑作区	蔬菜区	果樹園	特作区	苗圃
二、八五二〇 甲	一、一〇〇	一、一〇〇	一、三〇七三	一、一三	〇、六〇〇	〇、七〇〇	〇、八〇〇	〇、八〇〇	〇、八五〇〇	〇、二六三三

沿革

年月日	記事
大正十四年十二月二十二日	台湾公立新化農業補習学校(修業年限二年)設置認可申請
大正十五年三月三十日	台湾公立新化農業補習学校設置認可
大正十五年三月三十一日	新化公学校校長中村亀吉兼任校長ヲ命セラル
大正十五年四月一日	新化公学校内ニ一学級併置シ生徒ヲ募集ス
大正十五年六月二日	開校式ヲ挙行授業開始
民国十五年四月一日	二学級ニ学級編制認可
昭和二年三月三十一日	

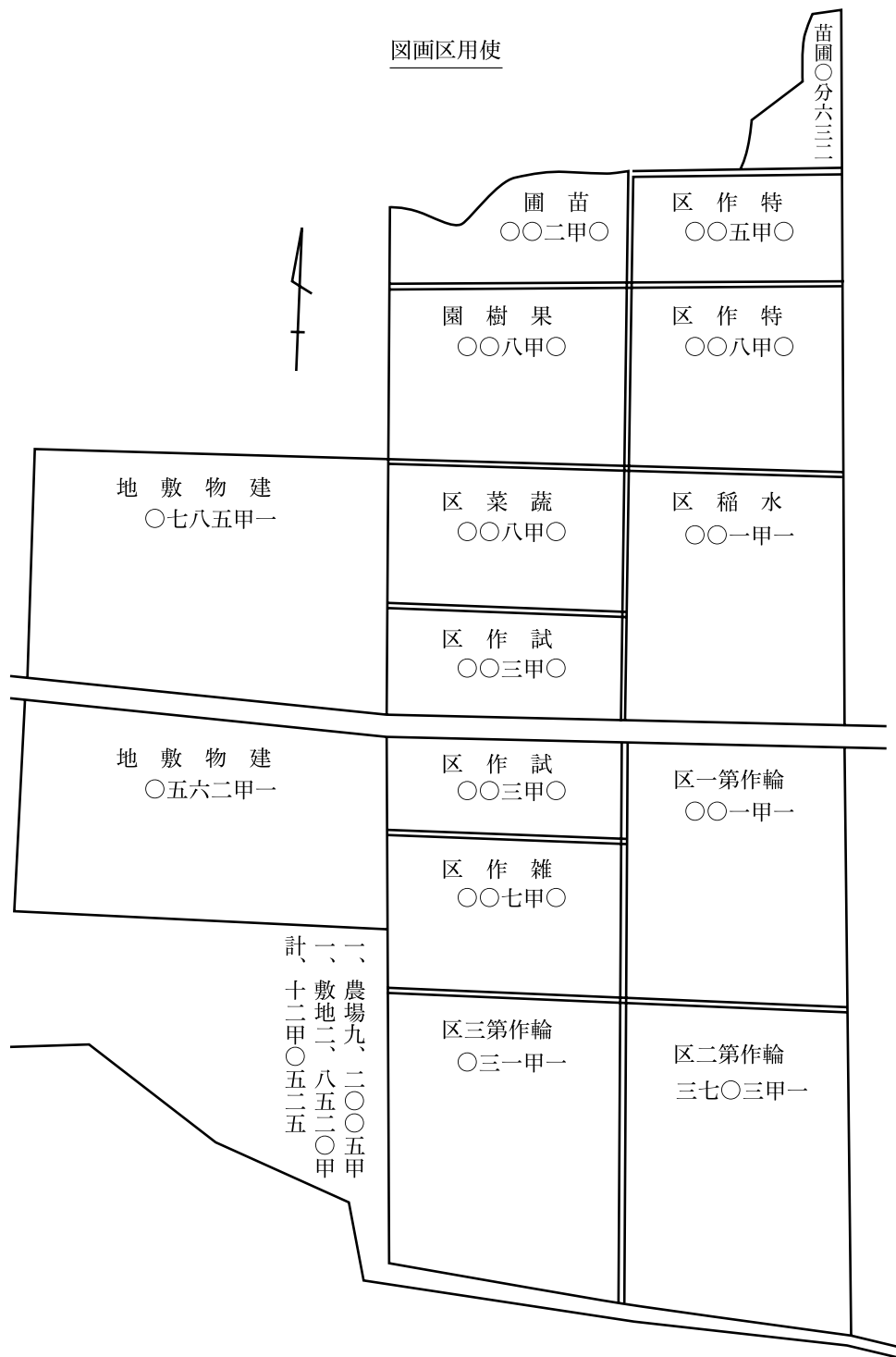


図 7 使用区画図

昭和十五年三月二十六日	昭和十五年二月一日	昭和十四年九月十三日	昭和十四年六月十六日	昭和十四年四月二十八日	昭和十三年七月十六日	昭和十三年四月二十三日	昭和十三年二月	昭和十三年一月三十一日	昭和十一年六月二十二日	昭和十一年五月二十四日	昭和十一年三月三十一日	昭和十年二月四日	昭和九年五月五日	昭和九年四月二十二日	昭和九年四月六日	昭和九年二月二十八日	昭和八年十二月八日	昭和八年十一月十二日	昭和八年十月二十三日	昭和八年八月十五日	昭和八年七月三日	昭和六年四月八日	昭和六年二月十六日	昭和五年四月二十一日	昭和五年四月五日	昭和五年一月二十七日	昭和四年二月十五日	
新化農業專修学校修業年限三年學則變更認可	新化農業專修学校則變更認可申請	新化農業專修学校則變更認可申請	青少年學徒ニ賜リタル勅語謄本御下賜	官有地貸下願ニ関シ認可速達方内申	台灣公立実業学校校長石井勝三学校長任命	教育勅語謄本御下賜	坂江校長嘉義市東門公学校校長ニ転ジ本校教諭芦川熊次校長事務取扱ヲ命ゼラル	二宮尊徳翁像建設	州主催実業補習学校教育研究会於本校開催	農專会（卒業生団体）設立	鶏舎二十五坪新築竣工	女子技芸講習所ヲ新化公学校へ移転	新化農業專修学校學則變更認可	安部校長大内公学校校長ニ転ジ新化公学校校長坂江哲雄兼任校長	女子技芸講習所ヲ併置、授業開始	專修科ヲ併設シ六名編入ヲ許可ス	新化農業專修学校學則變更認可申請	簡易購買部設置	事務室東側ニ泉水構築	校庭ニ国旗掲揚台設置	事務室裏ニ植木柵設置	旧總督府糖業試驗所跡一部借用内諾ヲ受け移転	新化公学校倉庫ヲ寄宿舎ニ改築シ生徒收容	新化公学校校倉庫ヲ寄宿舎ニ改称認可	実業教育奨励金參百円ヲ下附サル	新化街外八箇庄新化農業補習学校組合認可	州主催農業教育研究会本校ニ於テ開催	校長中村亀吉依願免、新化公学校校長安部俊亮兼任校長

昭和十五年三月三十一日	簡易購買部ヲ廃シ新化農業専修学校模範信用販賣購買利用組合設置
昭和十五年四月二十八日	余水使用料並特水租免除出願
昭和十五年五月一日	教科書採用一部變更認可
昭和十五年五月二十二日	余水使用料免除認可
昭和十五年六月二十九日	国有建物九百四坪讓与許可
全	国有土地十二甲〇五二五貸付許可
昭和十六年三月三十一日	石井校長台南州立台南第一中学校教諭ニ転ジ台湾公立実業学校校長中島潔学校長任命
昭和十七年三月三十一日	中島校長台南州立柳宮国民学校ニ転ジ台湾公立実業学校校長平井高行学校長任命
昭和十九年三月三十一日	平井校長林鳳宮国民学校校長ニ転ジ助教諭川上保校長事務取扱ヲ命セラル
昭和十九年六月十九日	助教諭川上保校長事務取扱ヲ免ゼラレ台湾公立中等学校校長川田文次学校長ニ任命
民國卅五年二月一日	改稱台南縣立新化第一初級農業職業学校 校長王萬全
民國卅八年二月一日	改稱台南縣立新化初級農業職業学校 校長黃璧玉(第一任) 丁春波(第二任) 賈守勛(三任)
民國四十七年八月	奉准試辦五年制農校 校長賈守勛
民國四十九年四月廿一日	奉准自四十九年度第一学期起正式開辦五年制農校
民國四十九年六月一日	校長駱美光
民國50年7月15日	四十九年八月一日校名改為台南縣立新化農業職業學校
民國50年〔9〕10月〔30〕1日	代校長王築辰
民國54年9月2日	校長許溢明 校長曾邁敦

沿革

- 一、大正十四年十二月二十二日 台湾公立新化農業補習学校（修業年限二年）設置認可申請（新化街庶第五六号）
- 一、大正十五年三月三十日 台湾公立新化農業補習学校設置認可（台南州内教第一四四号）
- 一、大正十五年三月三十一日 新化公学校長中村亀吉兼任校長ヲ命「セサル」サル
- 一、大正十五年四月一日 新化公学校ニ（一学級）併置シ生徒ヲ募集ス
- 一、大正十五年四月二十一日 左記教科書使用ヲ認可サル
公民教科書上・中下巻 中等国語読本巻一、二
- 台湾実業教育算術教科書 全
- 台湾農業教科書（法制及經濟編、作物編、園芸編、土壤編、肥料編、養畜編、養蚕編）
- 農業教本（作物病虫害編、農産製造編、林業編）
- 一、大正十五年六月二日 開校式ヲ举行シ授業開始ス
- 一、昭和二年三月三十一日 二学級ニ学級編制認可サル
- 一、昭和四年二月十五日 校長中村亀吉依願免官トナリ新化公学校長安部俊亮兼任校長ヲ命セラル。
- 一、昭和五年一月二十七日 州主催農業教育研究会ヲ本校ニ開催
- 一、昭和五年四月五日 新化街外八庄組合認可サレ本校組合立ニ移管認可サル
- 一、昭和五年四月二十一日 実業教育奨励金参百円ヲ下附サル
- 一、昭和五年四月二十四日 本校設立後援会（ヘ）設置「サレ」シ校舍改修築ス
- 一、昭和六年二月十六日 校名ヲ新化農業専修学校ト改称認可サル
- 一、昭和六年四月八日 新化公学校倉庫ヲ寄宿舎ニ改築シ生徒ヲ收容ス
- 一、昭和八年七月三日 旧總督府糖業試験所跡ヲ本校用地（建物（空白）坪 耕地（空白）坪）トシテ使用「認可」内諾アリ十一日迄ニ移転ヲ完了ス
- 一、昭和八年八月十五日 事務室裏ニ植木柵設置ス
- 一、昭和八年十月二十三日 校庭ニ国旗掲揚台設置ス
- 一、昭和八年十一月十二日 事務室東側ニ泉水構築ス
- 一、昭和八年十二月八日 簡易購買部設置ス
- 〈昭和九年一月二十八日新化農業専修学校学則變更認可申請〉
- 〔昭和九、二、二八 新化農業専修学校学則變更認可申請〕
- 〔昭和十年二月四日（台南内教第一三九号ノ一）学則變更認可〕
- 一、昭和九年四月六日 専修科設置シ（空白）名編入許可ス
- 一、昭和九年四月二十二日 女子技芸講習所併置シ（空白）名入学ヲ許可シ授業開始ス
- 一、昭和九年五月五日 安部校長大内公学校長ニ転シ新化公学校長坂江哲雄兼任校長ヲ命セラル
- 〈×〉一、昭和九年九月二十五日 伏見宮（？）（博義）殿下御成精洗麻実習台覧
- 一、昭和十年二月四日、新化農業専修学校学則變更認可（台南内教第一二九号ノ一）
- 一、昭和十一年三月三十一日、女子技芸講習所ヲ新化公学校ヘ移転併置ス
- 一、昭和十一年「六」五月二十「二」四日 鶏舎「空白」坪新築
- 一、昭和十一年六月二十二日、卒業生団体農専会本校内ニ設置。
- 一、昭和十三年一月三十一日、州主催実業補習学校教育研究会本校ニ開催。
- 昭和十三年二月 二宮尊徳翁ノ銅像「設」建置

新化農業專修学校予算

年度	雑給	旅費	需用費	修繕費	臨時費	計
大正十五年	三二二	七〇	八三二	一		一、六六六
昭和二年	三八七	一二〇	一、三二六	一六八		二、三〇一
全三年	三九一	一五〇	一、五五五	七五	三〇	二、二〇一
全四年	三八一	一七〇	一、三三七	三〇		一、九一八
全五年	六九五	二〇〇	二、七〇九	一二四	雑出、予備七二六	三、八五四
全六年	六六五	二〇〇	二、五九六	一〇〇	一	三、五六一
全七年	四九五	二〇〇	二、〇九九	一七〇	一	二、九六四
全八年	四九五	二五〇	二、〇七九	一〇〇	一	二、九二四
全九年	五四六	三五〇	一、一三一	二〇〇	奨学補助一、五一二 実習費一、二〇〇	四、九三九
全十年	六五〇	三五〇	一、五三一	二〇〇	奨学補助一、五〇〇 実習費 八〇〇 宮緒土木 二〇〇	五、〇三一
全十一年	一、〇四五	雑給中ニ	二、〇五五	三三六	奨学補助一、〇八〇	三、四三六
昭和十二年	一〇六六	雑給中ニ	一、三三四	二五〇	奨学補助金 八六四 建築費 一〇〇 宿舍修繕 二〇〇	三、八一四

一、昭和十三年七月十六日 教育勅語謄本御下賜サル

一、昭和十三年四月二十三日 坂江校長嘉義市東門〈公学〉校長ニ転

シ本校教諭芦川熊次学校長事務取扱ヲ命ゼラル

一、昭和十四年四月二十八日 台湾公立実業学校長石井勝三本校々長

ニ命ゼラル

一、昭和十四年九月十三日 青少年学徒ニ賜リタル勅語謄本下賜

一、昭和十[四]五年[十二]三月二十六日 修業年限三年ニ学則変更認

可

一、昭和十五年三月三十一日 模擬組合設置 指令八七五〇 八七九

九号

〈五月二日 教科書一部変更〈採用〉認可 台南内教二三三五号〉

〈五月二十二日 余水使用料〈二部〉免除(新化水第二五号ノ三)〉

一、昭和十五年六月二十九日 建物譲与許可 土地貸付許可 自六月

二十九日 二十年六月二十八日

〈東門町一—一〇八〉

職員異動

年月日	氏名	摘要
大正十五年四月一日	中村亀吉	兼補新化農業補習学校校長
全 四月十九日	呉南枝	補新化農業補習学校 助教諭
全 六月廿五日	綿引三郎	兼補新化農業補習学校 助教諭
昭和二年四月十八日	全人	補新化農業補習学校 助教諭
全 三年三月廿四日	呉南枝	依願免官
全 三年三月卅一日	郭良恩	補新化農業補習学校 助教諭
全 十二月七日	中村亀吉	依願免官
全 四年二月十五日	安部俊亮	兼補新化農業補習学校校長
全 三月三十一日	綿引三郎	補婦仁農業補習学校 助教諭
全 五月八日	高野太平	補新化農業補習学校 助教諭
全 九年八月三十一日	國分廉二	新市公学校ニ転出
昭和四年十二月廿四日	國分廉二	新化公学校教員心得國分廉二本校ニ助勤スルコトナル
昭和五年三月卅一日	國分廉二	善化公学校ニ転任、助勤ヲ解カル
昭和五年三月卅一日	池田孝	命新化農業補習学校 助教諭心得
五、一〇、〇一九一四	池田孝	公学校農業科専科正教員免許状受領
昭和六、一二、二五	池田孝	補新化農業専修学校 助教諭
昭和七、七、一三	池田孝	免依願免官
全 七、六、三〇	郭良恩	給月俸六十円
昭和七、六、八、三〇三二	國分廉二	任台湾公立実業学校 助教諭
		補新化農業専修学校 助教諭 (給四三)
昭和九、五、四	田中綾雄	任台湾公立実業学校 助教諭
		補新化農業専修学校 助教諭 (給六〇)
昭和一〇、四、五	田中綾雄	東石農業補習学校ニ転出

昭和十三年度	一、一九四	〃	二五二〇	四五〇	奨学補助金 九〇〇	四一六四
昭和十四年度	一、一五四	〃	二、三二〇	三五五	〃 一、二六〇	五、〇八九
昭和十五年度	一、七七二	〃	三、四五〇	二八八	〃 一、四四〇	五、五一〇

昭和九、五、五	安部俊亮	補大内公学校長
全	坂江哲雄	兼補新化農業專修学校長
昭和九、一〇、三一	高野穰	任台湾公立実業学校 助教諭 補新化農業專修学校 助教諭（給十一 ^圓 給俸）
昭和一〇、一二、二三	高野穰	任台南州座技手 補嘉義郡役所駐在
昭和一一、三、三一	山口羊生	水上農業補習学校 助教諭 補新化農業專修学校 助教諭
昭和一二、三、三一	郭良恩	任台湾公立公学校 訓導 補台湾台南州公学校 訓導 善化公学校勤務ヲ命ス
昭和一二、四、一三	芦川熊次	任台湾公立実業学校 教諭 補新化農業專修学校 教諭

記事

大正十五年四月一日設立認可 新化農業補習学校ト称ス
全五月一日授業開始 公学校ノ一教室ヲ借用授業開始
當時一學級 來年度四月一日二學級トナス。

年月日	件名	記事
大正十五年五月八日	校医任命	梁道氏 本校々医ヲ囑託セラル。
〃 五月十四日	送迎	糖業科視察ノ為米新ノ後藤總務長官ノ出迎ヘ見送りヲナス。
〃 五月廿七日	遠足	海軍記念日ヲ利用シ虎頭埤方面ヘ遠足ス。
〃 六月二日	開校式	午前十時ヨリ本校開校式举行。州教育課長曾文郡守新化郡守等ノ來賓アリ。
〃 六月十日	国葬	李王殿下国葬ニ付講話ヲナス。
〃 六月十七日	皇位	長慶天皇御登極。
〃 六月廿八日	遙拜式	始政記念日ニ付挙式。
〃 十月廿八日	奉読式	台湾神社祭ニ付遙拜式举行
〃 十月卅一日	挙式	教育デーニ付教育勅語捧読式举行 天長節祝賀式举行

〃	十一月五日	修学旅行	台北地方修学旅行ニ出発
〃	十一月廿一日	運動会	公学校ト聯合大運動会举行
〃	十二月廿四日	陛下ノ御病勢	聖上陛下ノ御容態御急変
〃	廿五日	崩御	午前一時廿五分遂ニ崩御遊バサル
昭和二年一月一日	年頭訓話	喪中ニ付挙式ヲ行ハズ年頭訓話ヲナス。	
〃	二月七日	遙拝	御大葬ニ対シ遙拝式举行
〃	三月十日	講話	陸軍紀念講話ヲナス。
〃	三月廿日	卒業式	大正十五年度修業証書授与式举行
〃	三月廿八日	終業式	大正十五年度終業式举行
レ	四月一日	入学式	昭和二年度入学式举行
〃	九月十日	御誕生	午前四時四十六分内親王御誕生
〃	十二月廿六日	来校者	州教育課長来校視察アリ
昭和三年一月一日	四方拝		午前九時四方拝挙式。
全三月八日	薨去		久宮内親王本日午前三時薨去。事務休止。
レ	四月一日	入学式	入学式举行
レ	四月三日	異動	安定公学校訓導郭良恩三月三十一日本校助教諭ニ補セラレ本日着任。
六月十日	時ノ紀念日		時ノ紀念日ニ付講話ヲナス。
六月十七日	始政紀念日		第三十二回始政紀念日ニ付祝賀式举行
七月廿一日	見送		中村校長内地帰還ニ付台車場ニ見送ル。
十月十六日	修学旅行		台北方面ヘ修学旅行ヲナス。
十月廿七日	異動		高野太平本校勤務ヲ命ゼラ〔レ〕本日着任。
十月三十日	捧読式		教育デーニ付捧読式举行
十一月三日	挙式		午前九時卅分ヨリ明治節祝賀式举行
十一月十日	奉祝		御即位御大典ノ奉祝儀式举行
昭和三年十一月十三日	旗行列		小公学校ト合同奉祝旗行列ヲナス。
昭和三年十二月七日	異動		校長中村亀吉依願免官
全 十二月廿八日	終業式		第二学期修業式举行
昭和四年一月一日	四方拝		午前九時三十分ヨリ四方拝举行
昭和四年一月七日	始業式		第三学期始業式举行

全 一月十二日	出張	高野綿引両職員東石郡朴子街ニ開催サル、農業教育研究会ニ出張
全 二月一日	訓話	六氏先生ニ対スル訓話ヲナス。
全 二月三日	訓話	久邇宮殿下ノ御葬儀当日ニ付訓話ヲナス。
全 二月十一日	挙式	午前九時半ヨリ紀元節祝賀式挙行
全 二月十五日	異動	安部俊亮本校々長ニ兼任セラル
全 二月廿八日	来校者	大澤郡視学ノ巡視アリ
全 三月廿五日	卒業式	午前九時三十分ヨリ卒業式挙行(第二回)
全 三月廿八日	終業式	昭和三年度終業式挙行
全 四月一日	入学式	昭和四年度入学式挙行
全 四月二日	異動	綿引助教諭三月卅一日附 給月俸五十六円。
全 四月二日	昇給	郭助教諭三月卅一日附 給月俸五十六円。
全 四月四日	告別式	綿引助教諭ノ告別式挙行
全 四月十六日	捧読式	皇太子殿下ノ御沙汰書捧読式挙行
全 四月十九日	巡視	大澤郡視学ノ巡視アリ
全 四月廿九日	挙式	天長節祝賀式挙行
全 四月卅日	訓話	建功神社祭ニ付訓話ヲナス
全 五月八日	異動	高野太平本校助教諭ニ補セラル 月俸五十七円。
全 五月十六日	会議	校長、校長会議出席ノ為台南市へ出張。
全 五月廿日	巡視	午前十時永山台南州知事ノ巡視アリタリ。
全 五月廿二日	見送	永山知事帰南ノ途ヲ見送リス。
昭和四年五月廿七日	講話	海軍記念ノ講話ヲナス。
全 六月二日	記念日	本校創立記念日ニ付一場ノ訓話ヲナス。
全 六月六日	巡視	大澤視学ノ巡視アリ
全 六月十日	時ノ記念日	時ノ記念日ニ対スル講話ヲナス。
全 六月十六日	巡視	塩田州視学ノ巡視アリ
全 六月十七日	鎮座祭	新化社鎮座祭ニ付職員生徒、祭式ニ列ス。
全 六月廿二日	始政記念日	第三十三回始政記念日ニ付祝賀式挙行
全 六月卅日	体育会	公学校ト合同小体育会挙行
全 六月卅日	出張	本日ヨリ向フ四日間校長学事視察ノ為屏東方面へ出張ス

全 七 月 十 日	終業式	第一学期終業式举行
全 七 月 十 四 日	出張	郭助教諭台北ニ開カレタル工業講習会ニ出席 自十四日／至 十六日
全 七 月 十 五 日	出張	高野助教諭新渡台講習会ニ出席(台南市 自十五日／至廿八日)
全 七 月 廿 日	出張	安部校長道德教育講習会ニ出席(関子嶺)
全 七 月 廿 五 日	視察	実習地視察ノ為郡守、視学来校
全 七 月 卅 日	任命	從三位勲一等石塚英藏台湾総督ニ任ゼラル
	退官	正四位勲二等川村竹治全日総督ヲ免ゼラル
全 九 月 二 日	始業式	第二学期始業式举行
全 九 月 五 日	出張	安部校長台南農事試験場視察ノ為出張
全 九 月 十 七 日	月見	公学校職員ト合同月見ノ会ヲナス
全 九 月 三十 日	御誕生	午前六時十五分内親王御誕生遊バサル
全 十 月 二 日	遙拝式	皇大神宮式年遷宮祭ニ付遙拝式举行
全 十 月 廿 一 日	参拝	新化社祭典ニ付参拝ス
全 十 月 廿 二 日	修学旅行	高野助教諭引率台北地方修学旅行ニ出発
全 十 月 廿 六 日	奉送迎	新市駅ニ東伏見妃殿下ノ奉送迎ヲナス。
全 十 月 三十 日	訓話	教育勅語御下賜記念日ニ付訓話ヲナス。
全 十 月 三 日	挙式	明治節祝賀式举行
全 十 月 十 一 日	来校者	台南師範学校長田中友次郎氏視察ノ為来校
全 十 月 十 二 日	歓迎会	田中校長ノ歓迎茶話会ヲ開ク
全 十 二 月 一 日	運動会	公学校ト聯合シ大運動会開催ス。
全 十 二 月 十 九 日	寄附募集ニ就テ	補習学校新設寄附募集ノ件ニ関シ大澤視学ノ来校アリタリ。打合セヲナス。
全 十 二 月 廿 四 日	異動	公学校教員心得國(分)廉ニ本校ニ勤務スルコト、ナル。
全 十 二 月 廿 八 日	終業式	第二学期修業式挙式
昭和五、一、一	四方拝	午前九時半ヨリ举行
全 一、一、六	始業式	午前九時ヨリ第三学期始業式举行
全 一、一、二一	転任	大澤新化郡視学嘉義郡視学ニ転任。
全 一、一、二七	任命	坂江哲雄氏(台南市末広公学校訓導)本郡視学トナル。
全 二、四	研究会 巡視	州下農業教育研究会ヲ本校ニ開催 参会者約三百。 内海内務部長ノ巡視アリ(午前十一時)

全二、一一	挙式	午前九時三十分ヨリ紀元節祝賀式举行
全二、一五	奉仕	職員生徒全員新化社ニ桃苗植付ノ奉仕作業ヲナス。
全二、二〇	巡視	杉本文教局長ノ巡視アリ（午前十時三十分）清水教育課長随行
全二、二七	天然痘	台南市ニ天然痘患者發生
全三、三	種痘	生徒ニ種痘ヲナス。
全三、六	地久節	地久節ニ関スル訓話ヲナス。
全三、一〇	講話	陸軍記念日ニ関スル講話ヲナス。
全三、一八	卒業式	午前十時三十分ヨリ公学校ト合同卒業式ヲ举行
全三、二二	謝恩会	本年度卒業生父兄生徒ノ謝恩会ニ職員全部出席
全三、二八	終業式	午前八時ヨリ終業式举行
全三、三一	昇給	校長安部俊亮 給四級俸
全參、三一	異動	國分廉二氏善化公学校ニ転任、本校助勤ヲトカル
全三、三一	全	池田孝氏本校助教諭心得ヲ命ゼラル
全四、一	入学式	午前八時三十分ヨリ入学式举行
全四、一九	打合	午後七時ヨリ郡役所ニ於テ補習学校設立寄附ニ関スル打合会ヲ開催ス
全四、二一	助成金	助成金（恩賜財団済美会ヨリ）参百円也受領
全四、二四	役員会	補習学校設立後援会役員会ヲ本校ニ開催ス
全	修繕	校舍修繕ニ着手、臨時寄宿舎ニテ授業ヲナス。
全四、二九	挙式	午前九時三十分ヨリ祝賀式举行
全五、四	視察	新竹州視学田中一郎氏視察ノ為来校
全五、一〇	會議	安部校長校長會議ニ出席
全五、一二	視察	台南師範学校附属公学校主事西卷南平氏来校
全五、一五	異動	池田助教諭心得善化小学校ニ助勤スルコト、ナル
全五、一七	視察	安部校長郡視察団員ノ一員トシテ東海岸地方ニ出張
全五、二三	異動	台南州知事永山止米郎殿本日附依願免官
全五、二三	異動	元秋田県知事名尾良辰殿台南州知事ニ任ゼラル
全六、四	講話	海軍記念日ニ関スル講話ヲナス。
全六、一〇	巡視	坂江視学巡視セラル
全六、一〇	講話	時ノ記念日ニ関スル講話ヲナセリ

全六、一七	全六、二八	全六、三〇	全七、一	全七、一〇	全八、一三	全八、一五	全八、二三	全八、二九	全九、一	全九、七	全九、一六	全九、二四	全一〇、一	全一〇、一七	全一〇、二〇	全一〇、二一	全一〇、二八	全一〇、三〇	全日	五、一一、三	五、一一、九	五、一一、一三	五、一一、二八	五、一二、一	五、一二、九	五、一二、一四	五、一二、二〇	五、一二、二五
挙式	巡視	昇給	巡視	終業式	出張	講習会	来訪	講習会	始業式	研究会	点呼	訓話	国勢調査	訓話	奉祝	全	訓話	挙式	遠足	挙式	旅行	出張	講話	交迭	帰軍式	講習会	終了式	訓話
始政記念日祝賀式举行 午前八時三十分ヨリ 新任台南州知事名尾良辰氏ノ巡視アリ 午前十時二十八分 助教諭郭良恩 給月俸五十八円 中山総督府図書館長鈴木州視学、坂江郡視学来校 午前八時ヨリ第一期終業式举行 本日ヨリ四日間高野助教諭産業組合講習会ニ出席 本日ヨリ五日間本郡教育会主催ノラヂオ講習会アリ本校ヨリ郭助教諭出席ス。 午前十一時台南第二聯隊兵士五十名来校 国勢調査訓練会アリ 校長、高野両職員出席 補習学校ニ関スル研究会アリ 校長、高野、郭、三職員虎尾農業補習学校ニ出張 本校庭ニ於テ簡閲点呼アリ。 秋季皇霊祭ノ前日訓話ヲナシタリ 国勢調査施行ノ為校長、高野両職員其ノ任ニ当ル 前日神嘗祭ニ対スル訓話ヲナス。 新化社、奉祝提灯行列ヲナシ虎頭埤新化社ニ参拝ス 全大運動会開催 前日及当日、台湾神社ニ関スル訓話ヲナス 教育勅語捧読式举行 台南市ニ開催ノ文化三百年記念会見学ノ為全市ニ遠足。 明治節儀式举行 曾文郡烏山頭ニ新化郡教員ノ懇親旅行アリ本校ヨリ校長、高野、池田三職員参加 本日ヨリ七日間、台北州士林ニ開催サレタル少年団指導者講習会ニ高野助教諭出席 津村農会技手来校、農業ニ関スル講話アリ、職員生徒聴講 津田、長谷川新旧庶務課長ノ交迭アリ 霧社蕃倒伐隊（本郡警官隊）ノ帰軍式並ニ歓迎会举行、校長、高野両職員出席。 本日ヨリ一週間郡下青年幹部講習会開催。安部校長、高野助教諭、郭助教諭講師トシテ活動。 右講習会終了式举行 前日、大正天皇祭ノ訓話ヲナス。																												

五、二、二五	昇給	助教諭心得池田孝 給月俸五十三円。
五、二、二八	終業式	第二学期終業式挙行
六、一、一	四方拝	四方拝祝賀式挙行
六、一、六	始業式	第三学期始業式挙行。
六、一、一八	研究会	安部校長、郭助教諭、池田助教心州下農業教育研究発表会ニ出席。
六、一、二四	来校	台南衛戍病院長以下約二十名来校
六、一、二九	見学	糖業試験場見学ノ為生徒全員出発。
六、一、三〇	視察	沖縄県視学、玉城常和氏本校視察ノ為来校
六、二、五	参州	補習学校制度改正及新設打合ノ為安部校長、坂江視学ト共ニ参州
六、二、七	出張	校長、高野兩職員斗六小学校ノ修身研究会ニ出席
六、二、一一	挙式	紀元節儀式挙行ヲ「付」ナス
六、二、一六	改名	校名ヲ新化農業専修学校ト改称ノ認可アリ。
六、二、一七	学芸会	公学校ト合同学芸会挙行
六、二、二一	工事	校庭運動場ノ地均シ工事始マル
六、三、三	節句	訓話ヲナス
六、三、一一	会議	専修学校新設ニ関スル予算会議アリ 校長出席。
六、三、一三	挙式	第四内親王殿下御命名式当日ニ付午前十一時ヨリ本校庭ニ於テ遙拝式挙行 順宮厚子内親王殿下
六、三、一九	卒業式	午前十時三十分ヨリ卒業証書授与式挙行
六、三、二八	終業式	午前八時ヨリ昭和五年度第三学期終業式挙行
六、四、一	入学式	午前九時ヨリ入学式挙行
六、四、二	訓話	四月三日神武天皇祭ニ関スル訓話ヲナス
六、四、四	助勤	池田助教諭心得新化公学校ニ助勤ヲ命ゼラル。
六、四、九	改築	新化公学校倉庫ヲ寄宿舎ニ改築スル工事初マル。
六、四、九	修繕	生徒用机腰掛ノ塗替ヲナス。
六、四、一二	収入	実習地甘蔗売上代収入受入
六、四、一六	挙式	皇太子殿下御渡台記念日ニ付御沙汰書捧読式挙行一場ノ誨告ヲナス。
六、四、二〇	出張	安部校長新豊郡北門郡ニ出張、二十二日帰校。
六、四、二四	会議	郡下校長会議アリ 安部校長出席

六、四、二五	六、四、二五	全	新化郡教育総集会アリ 職員全部出席
六、四、二五	六、四、二五	身体検査	郡下教員ノ身体検査アリ職員全部受診
六、四、二九	六、四、二九	挙式	午前九時三十分ヨリ天長節儀式挙行
六、四、三〇	六、四、三〇	遙拝式	午前八時ヨリ建功神社遙拝式挙行
六、四、五一	六、四、五一	出張	高野郭両助教諭実業学校教務研究会ニ出席
六、五、五	六、五、五	訓話	子供デーニ関スル訓話ヲナス
六、五、一八	六、五、一八	講話	台南市外開元寺法王東海師ノ講演アリ職員生徒聴講
六、五、二六	六、五、二六	演技	石坂呉峰氏一行ノ舞踏演技アリ 観覧ス
六、五、二七	六、五、二七	訓話	海軍記念日ニ対スル訓話ヲナス
六、五、二九	六、五、二九	予防注射	チブス予防注射ヲナス。
六、六、二	六、六、二	視察者	台中州視察団十四名来校
六、六、七	六、六、七	奉迎	午后三時十一分新市駅ニ於テ賀陽宮殿下ヲ奉迎ス
六、六、一〇	六、六、一〇	記念日	時ノ記念日ニ対スル訓話ヲナス。
六、六、一四	六、六、一四	奉送	賀陽宮殿下ノ奉送ヲナス。
六、六、一七	六、六、一七	挙式	九時三十分ヨリ始政記念日祝賀式挙行
六、六、一七	六、六、一七	表彰	安部校長十五年勤続ノ故ヲ以テ表彰セラル。
六、六、一八	六、六、一八	出張	安部校長実業学校打合会ニ出席ノ為向フ四日間台北ニ出張。
六、六、二五	六、六、二五	出張	安部校長州下学校長会議ニ出席ノ為台南市ニ出張
六、七、六	六、七、六	会議	郡下学校長会議アリ安部校長出席
六、七、八	六、七、八	遠足	生徒二十六名山上水源地、烏山頭ニ遠足 引率者、高野郭両助教諭
六、七、九	六、七、九	懇親会	午后七時ヨリ公学校ト合同、職員懇親会開催
六、七、一〇	六、七、一〇	終業式	第一学期終業式挙行
六、七、一四	六、七、一四	送迎会	寺島新、長谷川旧両庶務課長ノ送「別」迎会アリ
六、七、一四	六、七、一四	講習会	本日ヨリ向フ六日間郡下中堅青年講習会開催
六、七、二七	六、七、二七	講習会	安部校長本日ヨリ七日間ラヂオ講習会ニ出席
六、八、四	六、八、四	講習会	高野助教諭本日ヨリ七日間山上水源地ニ於ケル少年団指導者講習会ニ出席
六、八、一一	六、八、一一	巡視	横光知事ノ巡視アリ 職員生徒迎ヘヲナス。
六、八、一四	六、八、一四	講習会	郡下体育講習会員向フ参日間寄宿舎ニ止宿。
六、八、一七	六、八、一七	出張	高野助教諭向フ十三日間社会教育補習会ニ出席ノ為台北ニ出張

六、九、一	始業式	第二期始業式举行
六、九、一一	見学	在郷軍人簡閲点呼アリ職員生徒見学。
六、九、一九	交戦	本日突如満洲ニ於テ交戦ス。
六、九、二三	訓話	明廿四日秋季皇霊祭ニ対スル訓話ヲナス。
六、九、二七	見学	新化在郷軍人ト共ニ職員三人屏東地方見学
六、一〇、一六	訓話	明十七日神嘗祭ニ付訓話ヲナス
六、一〇、一七	会葬	猪口郡守令息ノ葬儀アリ職員一同会葬ス。
六、一〇、二七	運動会	新化社大祭ニ付奉祝大運動会ヲ本校庭ニ開催。
六、一〇、二九	慰労会	霧社事件出征者慰労会アリ学校長出席
六、一〇、二八	遙拝式	台湾神社祭ニ付遙拝式举行 一場ノ訓話ヲナス。
六、一〇、三〇	捧読式	教育勅語御下賜記念日ニ付捧読式举行
六、一一、一	結団式	本校庭ニ於テ新化郡聯合青年団ノ結団式举行
六、一一、三	挙式	明治節祝賀式举行
六、一一、一〇	記念事業	国民精神作興証書御下賜記念日ニ付門前道路並木ノ手入ヲナス。
六、一一、二三	訓話	明廿三日新嘗祭ニ付訓話ヲナス。
六、一一、一三	研究会	郷土資料研究発表会アリ
六、一一、一四	講話	台中州囑託細野浩三氏来校 少年団ニ関スル講話アリ
六、一一、二四	訓話	明廿五日大正天皇祭ニ付訓話ヲナス。
六、一一、二八	終業式	第二期終業式举行
七、一、一	挙式	四方拝儀式举行。
七、一、六	始業式	第三期始業式举行
七、一、一八	講習会	郡下青年幹部講習会発会式举行
七、一、二三	閉会式	全右閉会式举行
七、一、二九	奉戴式	新化小学校御真影奉戴式アリ職員生徒奉拝
七、一、二九 三二	出張	高野助教諭台中州下視察ノ為出張。
七、二、六	学芸会	午前八時ヨリ学芸会举行（公学校ト共ニ）
七、二、一一	挙式	八時三十分ヨリ紀元節祝賀式举行 式後御真影奉拝、建国祭儀式参列
七、二、一二	見学	当街五甲勢ニ於ケル台南歩兵第二聯隊機関銃隊ノ実弾射撃演習「ヲナス」。ノ見学ヲナス
七、二、一二	撮影	卒業記念写真撮影ヲナス。

七、二、一七	訓話	祈年祭ニ関スル訓話ヲナス。
七、二、二〇	出張	安部、郭両助教諭農業教育研究発表会ニ出席ノ為、嘉義市並ニ大林庄ニ出張。
七、二、二四	視察者	總督府森谷視学官ノ視察アリ。嘉義農林学校校長島田庸明氏、鈴木台南州視学、池満南師教諭、猪口郡守、坂江視学、寺島庶務課長同道。第四時限生徒一同ニ対シ一場ノ挨拶アリ。
七、二、二九	協議会	新化街外八庄組合協議会アリ。安部高野参与トシテ出席
七、三、三	訓話	桃ノ節句ニ対スル訓話。
七、三、一〇	遠足	高野郭両助教諭引率生徒全員婦仁庄、台南市安平ニ遠足
七、三、一七	卒業式	十時半ヨリ卒業式挙行
七、三、二〇	訓話	春季皇霊祭ニ対スル訓話
七、三、二二	休業	春季皇霊祭ニ就キ休業。
七、三、二八	終業式	第三学期終業式挙行
七、四、一	入学式	昭和七年度入学式及始業式挙行
七、四、三	始業式	神武天皇祭ニ付休業。
七、四、二一	祭日	猪口郡守嘉義郡守ニ、那須郡守新任セラル。
七、四、二六	交迭	小林楽山氏ヲ聘シ乃木将軍ト孝子辻占売ノ教育講談ヲ催ス
七、四、二七	講談	靖国神社臨時大祭ニ付休業ス。
七、四、二九	臨時休業	午前九時ヨリ公学校ト合同大長節祝賀式挙行。式後小学校ニ至リ
七、五、二	挙式	マラリヤ採血施行
七、五、三	採血	天皇皇后両陛下ノ御真影奉拜
七、五、五	身体検査	単名票ヲ作製スベキ身体検査施行
七、五、六	訓話	子供デー及端午ノ節句ニ対スル訓話ヲナス。
七、五、一〇	協議	猪口前郡守胸像建設ノ協議アリ安部校長出席
七、五、一一	看護婦省	池田助教諭実父危篤ノ為看護婦省。
七、五、一四	巡視	那須郡守、坂江郡視学ノ巡視アリ。
七、五、一四	巡視	今川知事ノ巡視アリ。
七、五、一六	會議	郡下学校長會議アリ安部校長出席
七、五、一五	遭難訓話	犬養首相遭難ニ関スル訓話ヲナス。
七、五、一六	講習会	郡下陸上競技選手及テニス選手ノ一日講習会アリ高野助教諭出席。
七、五、一六	講話	洋画家是澤真隆氏ノ欧洲 ^記 行談アリ

七、五、一七	巡視	坂江郡視学ノ巡視アリ。
七、五、一九	遙弔式	午後一時ヨリ街役場楼上ニ於テ故犬養首相ノ遙弔式アリ職員及生徒代表参列。
七、五、二四	視察	大分県教育視察団挟間 亮氏外五名来校。
七、五、三〇	身体検査	学校職員ノ身体検査アリ安部、高野、郭、受査。池田助教諭看護婦省中ニ付欠席
七、五、三一	転地療養	池田助教諭ノ転地療養願進達 自六月一日 至二十三日
七、六、二	視察者	台北州新莊郡小公学校長一行八名来校
七、六、九	全	虎尾郡大屯子公学校長菊地札右衛門氏来校
七、六、九 一三	研究会	新竹州湖口農業補習学校ニ全島実業補習学校研究打合会アリ 安部校長出席
七、六、一三	授業短縮	授業時間短縮ヲナス
七、六、一七	挙式	始政記念日祝賀式挙行
七、六、二一	巡視	川村内務部長ノ巡視アリ。
七、六、二三	視察者	松尾新竹州中壢郡視学来校
七、六、二四	落成式	郡役所会議室落成式アリ 安部、高野、出席
七、六、一五〔ママ〕	小体育会	公学校ト合同小体育会開催
七、六、二五	打合会	郡下各学校長ノ事務打合会アリ安部校長出席
七、六、三〇	昇給	郭助教諭月俸六十円ニ昇給ス
七、六、二四	転地療養	池田助教諭向フ一ヶ月間転地療養願進達。
七、七、二	採血	マラリヤ採血、施行
七、七、八	退職願	助教諭池田孝ノ退職願提出。
七、七、一二 一三	講習会	郡下教員体育講習会アリ高野出席。
七、七、一三	退職	助教諭池田孝、本日附依願退職
七、七、二四	出張	高野助教諭左鎮青年団講習会講師トシテ出席
七、七、二九日 八、三日	全	高野助教諭州下少年団指導者講習会講師トシテ山上庄ニ出張。
七、七、五 一〇	講習会	安部校長高野助教諭新化公ニ開カレタル体育講習会ニ出席。
七、七、七	庭球会	新化公家庭ニテ郡下軟式庭球大会挙行
七、七、二〇 二五	講習会	郡下青年団幹部講習会開催。安部、高野、郭、講師トシテ出席。
七、九、一	始業式	第二学期始業式挙行
全	訓話	震災記念日ニ於ケル訓話。
七、九、二	授業復旧	本日ヨリ授業時間ノ復旧ヲナス。

七、八、三一	辞令	國分助教諭本校助教諭ヲ命ゼラル。
七、九、一一	遠足	高野、郭、國分三助教諭引率ノ下ニ生徒三十四名台南市ニ遠足。農業試験場、航空ページェント見学。
七、九、一三	訓話	明治天皇御大葬当日ニ付、乃木大将殉死免囚保護ニ関スル訓話ヲナス。
七、九、一五	観月会	職員全部、街主催虎頭埤観月会ニ参加。
七、九、一七	理科指導	公学校ニ於テ大場指導員ノ理科指導会アリ。
七、九、一八	慰霊祭	滿洲事変一週年記念陣歿将士慰霊祭公学校ニ開カレ職員生徒参列。
七、九、二三	休業	秋季皇霊祭ニ付休業。
七、一〇、七	見学	第二学年生徒蓬萊米実地見学ノ為善化庄ニ遠足
七、一〇、一〇	会葬	台南市南門小学校校長神田辰次郎氏葬儀ニ付安部校長参列、会葬。
七、一〇、一五	指導会	大場指導員来校理科指導アリ。
七、一〇、一七	休業	神嘗祭ニ付休業。
七、一〇、二〇	大祭	新化社大祭宵祭ニ付提灯行列施行、参拝。
七、一〇、二二		新化社参拝、奉祝大運動会举行。
七、一〇、二八	訓話	台湾神社祭ニ対スル訓話ヲナス。
七、一〇、三〇	奉読式	教育勅語捧読式举行、式後旗行列ヲナシ教育宣伝ヲナス。
七、一一、一	童話会	台南志村氏ノ童話会ヲ催ス。
七、一一、三	拝賀式	明治節拝賀式举行、式後小学校ニ到リ 天皇皇后兩陛下ノ御真影奉拝ヲナス。
七、一一、五	打合会	郡役所会議室ニ於テ郡下農業教育打合会アリ安部、高野、郭、國分三助教諭出席。
七、一一、一〇	奉読式	国民精神作興詔書記念日ニ付捧読式举行
七、一一、一五	寄生虫駆除	警察係員出張来校寄生虫駆除業服業。
七、一一、二一	巡視	宮尾教育課長ノ巡視アリ、堀之内坂江兩視学来校
七、一一、二三	休業	新嘗祭ニ付休業。
七、一一、二三	野球大会	本校庭ニ於テ第一回郡下軟式野球爭覇戦举行
七、一二、八	寄附募集	新化公学校故職員記念碑改設寄附金トシテ生徒ヨリ応分ノ寄附ヲ募集ス。
七、一二、二五	休業	大正天皇祭ニ付休業。
八、一、一	四方拝	公学校ト合同四方拝儀式举行、式後小学校ニ至リ 天皇皇后兩陛下ノ御真影ヲ奉拝ス。
八、一、三	野球試合	本校庭ニ於テ郡役所、新化、善化、玉井、四団ノ野球試合アリ
八、一、六	始業式	第三学期始業式举行
八、一、一四	訓話	今後毎月十五日ヲ国語普及デイト定メタルニ付訓話ヲナス。

八、一、一五 二〇	指導	本日ヨリ六日間新化青年団夜間講習会アリ、高野助教諭指導ニ当ル
八、一、一八	視察者	嘉義小学校訓導樋口氏視察ノ為來校
八、一、二二	總會	郡聯合青年団總會アリ。
八、一、二四 二七	出張	関子嶺ニ開カレタル青年指導者講習会ニ高野助教諭出席。
八、一、二四	見學	第二学年生頂山脚南台農場見學。
八、一、三〇	協議会	街役場楼上ニ於テ新化街外八庄組合協議会アリ、安部校長参与員トシテ出席。
八、二、一	遙拝	芝山巖祭ニ付、遙拝訓話
八、二、二	音楽会	宮澤音楽師ノ音楽演奏アリ
八、二、三	巡視	坂江郡視學巡視セラル
八、二、三	視察者	婦仁農補校職員山下矢吉氏視察ノ為來校
八、二、一	挙式	紀元節祝賀式挙行、式後官民合同建国祭ニ参列
八、二、一	表彰	郭助教諭多年本郡教育界ニ尽 ^忠 粹セル廉ニ依リ新化郡守ヨリ表彰セラル。
八、二、一六	童話会	藤井抱月氏ノ童話アリ。
八、二、一八 一九	研究会	郡主催教育實際化研究会アリ。
八、二、二〇	献金	職員生徒壹円拾六錢ヲ国防費トシテ献金ス。
八、二、二三	ポスター配布	昭和八年度新入生募集ポスター配布。
八、二、二七	記念撮影	卒業記念写真撮影。
八、二、二八	童話会	志村氏ノ童話会アリ。
八、三、一	接木	欖果新種バカナシダノ接木ヲナス。
八、三、四	來校者	婦仁農補生徒二十数名見學ノ為來校
八、三、七	苗木分与	糖業試験ニ苗木（欖果）五百本分与
八、三、一〇	遠足	職員生徒三十三名台南市ニ遠足。
八、三、一一	盗難	昨夜事務室ニ盗人侵入、ストツプウオツチ、テニスボール、□□等紛失。
八、三、一三	義捐	三陸地方災害義捐金トシテ職員月収二百分ノ一ヲ釀出ス。
八、三、一四	視察者	北門郡学甲公学校長外一名視察ノ為來校
八、三、二〇	卒業式	卒業式挙行。
八、三、二一	休業	春季皇霊祭ニ付休業。
八、三、二八	終業式	第三学期終業式挙行
八、四、一	入学式	入学式挙行

○	◎		
八、四、一七	八、四、三	休業	神武天皇祭ニ付休業。
八、四、一四	八、四、一四	巡視	坂江郡視学ノ巡視アリ、教育諸般ノ指導ヲ受ク
八、四、一七	八、四、一四 二一	出張	高野助教諭少年団実修所入所ノ為台北州ニ出張。
八、四、二三	八、四、一七	視察者	高雄州萬丹農補教諭大畑政之氏来校
八、四、二四	八、四、二三	全	学甲公学校職員数名視察ノ為来校
八、四、二五	八、四、二四	訓話	火防デーニ関スル訓話。
八、四、二七	八、四、二五	会葬	故菊地警部補ノ葬儀アリ職員参列。
八、四、二九	八、四、二七	休業	靖国神社臨時大祭ニ付臨時休業。
八、五、五	八、四、二九	挙式	天長節儀式挙行。
八、五、五	八、五、五	訓話	端午節句、子供デーニ関スル訓話ヲナス。
八、五、五 八	八、五、五	校長会議	郡下各学校長会議アリ安部校長参郡。
八、五、二七	八、五、二七	講習会	山上水源池ニ於テ各学校長ノ少年団講習会アリ。高野助教諭指導ノ任ニ当ル。
八、六、三	八、五、二七	遠足	海軍記念日行事トシテ職員生徒山上水源池及烏山頭貯水池ニ遠足
八、六、三	八、六、三	除幕式	猪口前郡守ノ胸像除幕式アリ。
八、六、一〇	八、六、三	視察者	シヤム国教育視察者来校 安倍視学官同行
八、六、一〇	八、六、一〇	訓話	時ノ記念日ニ関スル訓話ヲナス。
八、六、一二 一五	八、六、一二 一五	研究会	台中州東勢農林国民学校ニ全島実業補習学校教務研究会アリ安部、高野出席。
八、六、一三	八、六、一三	鳳梨売却	実習地鳳梨一千三百ヶ(単価二錢五厘)売却
八、六、一七	八、六、一七	祝賀式	始政記念日祝賀式挙行。
八、六、二二	八、六、二二	授業短縮	本日ヨリ授業時間ノ短縮ヲナス
八、七、三一	八、七、三一	移転	旧糖業試験所跡ヲ本校用地トシテ使用スベキ内諾ヲ得タルヲ以テ七月三日移転開始、全十一日全ク完了セリ。
八、七、一五	八、七、一五	出張	高野助教諭本日ヨリ七日間嘉義市水道水源池ニ開催セラレタル州下少年団指導者講習会講師トシテ出席。
八、七、二九 三一	八、七、二九 三一	出張	國分助教諭学事視察ノ為台中州東勢、台北州ニ出張。
八、八、四 一四	八、八、四 一四	白蟻駆除	台南市藤崎氏ヲ招ジ宿舍、寄宿舍ノ白蟻駆除ヲナス。
八、八、六	八、八、四 一四	庭球大会	新化公校庭ニ於テ新化郡庭球選手権大会アリ。
八、八、一五	八、八、六	苗木植付	農会ヨリオリーブ苗ヲ譲受ケ校庭ニ植樹。
八、八、一五 二七	八、八、一五 二七	植木置場	事務室裏側ニ植木置場設置。
八、八、一六	八、八、一五 二七	ピンポン苗植付	新市庄社内ヨリピンポン苗購入 校庭ニ植付。
八、八、一七	八、八、一七	会葬	新化公訓導、林秋楓ノ嚴父葬儀台南ニ於テ行ハレ職員葬送ニ参列ス。

八、一八	会葬	山田郡庶務課長巖父ノ葬儀アリ職員参列。
八、二〇	視察者	嘉義農林学校職員及鹿沼留吉氏等九名本校視察ノ為来校。
八、二〇 二五	出張	高野助教諭左鎮南化玉井、三庄農家青年講習会ニ講師トシテ出席。
八、二六 二七	教育総会	新宮郡関子嶺ニ郡教育総会開カレ全職員参加。
八、二三	修繕	テニスコート周囲垣根ヲ作ル
八、三〇	測量	州地方課宮崎氏外二名、来校 本校用地ノ測量ニ当ル。多田書記、楊、林、役場書記立合。
八、三〇	備品検査	学校備品ノ検査ヲナス。
八、三一	歓迎	公学校訓導杉山啓一氏短期現役満期除隊ニ付歓迎。
八、九一	始業式	第二学期始業式挙行
八、九一	訓話	東京大震災記念講話、及酒ナシ日ニ対スル訓話ヲナス
八、九一	見学	公学校庭ニ開催サレタル陸軍簡閲点呼見学。
八、九一	植樹	寄宿舎横ニクロトン、ジュラン、クチナシ、モクセイ等植樹
八、九一	訓話	免囚保護デーニ付訓話ヲナス。
八、九一	慰霊祭	満洲事変陣歿将士慰霊祭公学校庭ニ開カル、職員生徒参列。
八、九一	講話	台南市津川氏ヲ聘シ教育講話ヲ行フ。
八、九一	研究会	婦仁農業補習学校ニ州下実業補習学校研究会アリ、全職員出席。
八、九一	視察者	斗六公学校長大里七郎氏視察ノ為来校
八、九一	巡視	細井州地方課長宮尾教育課長本校巡視。塩田州視学、那須郡守、山田庶務課長、大岡属来校
八、九一	観月会	本夜中秋明月ニ付寄宿舎生一同校庭ニテ観月会ヲ催ス。
八、九一	遠足	郭、國分両助教諭引率ノ下ニ生徒四〇名婦仁農補及台南農事試験場ニ遠足。
八、九一	奉仕作業	職員生徒新化社ニ奉仕作業
八、九一	奉読式	戊申詔書、御下賜記念日ニ付朝会時、奉読式挙行
八、九一	休業	神嘗祭ニ付休業。
八、九一	運動会	新化社大祭ニ付奉祝大運動会開催
八、九一	掲揚台設置	事務室西側ニ仮国旗掲揚台ヲ設置セリ
八、九一	講演	午後二時ヨリ公学校ニ於テ台北市南光青年団長ノ講演アリ聴講ス。
八、九一	視察者	嘉義郡婦人視察団二十数名来校
八、九一	訓話	台湾神社祭ニ付前日訓話ヲナシ休業。
八、九一	奉読式	教育勅語御下賜記念日ニ付奉読式挙行

八、一一、三	學式中止	明治節祝賀式舉行ノ予定ナルモ朝香宮允子内親王殿下薨去遊バサレタルニ付、學式取止、弔旗掲揚、訓話ヲナス。
八、一一、七	作興週間	本日向フ一週間国民精神作興週間実施。
八、一一、八	植樹	郡農事組合ヨリオリブ苗一〇〇本南洋欒果八本ブラジルチエリー四本ノ無償配布ヲ受ケ植樹ヲナス。
八、一一、八	記念事業	国民精神作興週間記念事業トシテ事務室東側ニ泉水構築
八、一一、七	巡視	伊藤州教育課長初巡視。
八、一一、一〇	奉読式	街主催ノ国民精神作興詔書捧読式ニ參列。
八、一一、一一	キャンプ	寄宿舎生一同ニ対シキャンプ生活実施（グラウンド）
八、一一、一二	訓話	朝香宮允子内親王殿下御葬儀当日ニ付訓話。
八、一一、一三	請負	郡役所官舎ノ家庭一坪実習場ノ請負実習ヲナス。
八、一一、一五	來校者	婦仁農補職員生徒約三十名來校。
八、一一、二三	新嘗祭	新嘗祭ニ付休業。
八、一一、二八	遠足	高野助教諭引率ノ下ニ第二学年生玉井庄ニ遠足 畜産品評会及郡野球爭霸戦ヲ見ル。
八、一一、二八	購買部設置	簡易購買部設置、学用品販売開始
八、一一、二二	科外講話	津村属ノ科外講話アリ。
八、一一、一九	全	藤原技手ノ科外講話アリ。
八、一一、二三	皇太子殿下御誕生	午前六時三十九分皇太子殿下御降誕ノ旨、報知アリ
八、一一、二三	大麻頒布式	本日郡役所ニ於テ皇大神宮ノ大麻頒布式アリ。
八、一一、二五	大正天皇祭	大正天皇祭ニ付休業。
八、一一、二八	終業式	第二学期終業式舉行。
八、一一、二九	御命名式	皇太子殿下御命名式当日ニ付祝賀式舉行。
九、一一、一	四方拝	公学校ト合同新年拝賀式舉行
九、一一、六	始業式	第三学期始業式舉行
九、一一、一一	科外講話	第二学年生ニ対シ石森技手ノ科外講話アリ
九、一一、一七	図書館週間	本日ヨリ向フ一週間図書館週間ニ付行事実施
九、一一、一三	青年団総会	郡聯合青年団ノ總會公学校庭ニ開カレ高野助教諭出席
九、一一、一五	視察者	東石農補校長林庄一氏永康庄長田中郁氏來校
九、一一、一六	巡視	坂江視学ノ巡視アリ。
九、一一、一八	科外講話	藤原技手ノ科外指導アリ。
九、一一、二〇	奉仕作業	新化社奉仕作業ヲナス。

九、一、二五	遠足	台南市ニ遠足、遊就館巡回展覽会及農事試験場見学。
九、一、二八	猪狩	職員懇親ノ意味ニテ公学校職員ト共ニ虎頭先ニ山豚狩ヲ行ス。
九、一、三一	協議会	新化街外八庄組合協議会郡役所会議室ニ開カレ安部校長、高野助教諭参与トシテ出席。
九、一、三〇	科外講話	藤原技手ノ科外講話アリ。
九、二、五	検診 [㊤]	郡警察課員來校阿片矯正患者検診 [㊤] ノ為本校使用
九、二、七	調査	田代森林主事、林街産業技手來校 旧糖業科跡地ノ檬果調査ヲナス
九、二、一一	参拝	午前七時ヨリ自転車ニ依リ新化社ニ至リ神前修養会ヲ催シ [㊤] 記元節ニ対スル訓話ヲナス。
九、二、一一	国防議會発会式	紀元節祝賀式後公学校庭ニ於テ官民参列ノ下ニ建国祭並ニ国防議會発会式舉行セラル。
九、二、二〇	出迎	元新化公学校長中村龜吉氏來新ニ付出迎ヲナス
九、二、二四 二五	研究会	善化公学校ニ於テ郡主催教育實際化研究会 [㊤] 在リ全職員出席。
九、三、一	講演会	午後一時ヨリ小学校ニ於テ南豫文化協會講師森岡天涯氏ノ講演会アリ職員生徒聴講ス。
九、三、一六	卒業式	午前十時ヨリ卒業証書授与式舉行、臨席官、郡守、庶務課長、視学其他多数。
九、三、二二	入札	富澤助役小野寺技手立合ノ元ニ修繕工事ノ入札ヲ行ヒ結局壹千円ニテ呉江寛氏落札セリ
九、四、四	愛林記念日	愛林デー記念行事トシテ新化社境内ニ記念植樹ヲナス
九、四、六	挙式	第一年及ビ専修科ノ入学式舉行
九、四、二二	移転式	女子技芸講習所本校ニ移転ス
九、四、三〇	転勤「並」後任	安部校長曾文郡大内公学校長兼二重溪公学校長ニ転ジ新化郡視学坂江哲雄本校々長トナル。
九、五、一	新任	田中助教諭新任
九、五、一四	科外指導	郡役所各位ニ公民科農業科ノ科外指導ヲ依頼
九、六、九	田植	水稻ノ田植、郡守ヲ始メ庶務課長外職員数名御來校
九、七、一	視察	嘉義郡教育視察團來校
九、七、二	遠足	職員生徒防空展覽会並ニ農事試験場見学ノ為台南市ニ遠足
九、七、二三	講習会	郡下職員農業講習会開催
九、八、一	〃〃〃	郡下中堅青年農事講習会開催
九、八、九	視察	職員一同嘉南塾視察
九、九、三	講習会	郡下役場吏員事務講習会開催
九、九、二五	奉迎	本校産ノ精洗麻御成リノ伏見宮殿下ノ御台覧ニ浴セラル 伏見宮殿下奉迎。
九、一〇、一〇	転勤	高野太平助教諭新市公ニ転任
九、一〇、一六	巡視	林田内務部長本校初巡視。

九、一〇、一七	研究会	全島実業補習学校教育研究会ニ全職員出席（於婦仁農補）
九、一一、九	遠足	岡子林迄強行遠足（国民精神作興週間）
九、一一、二三	旅行	嘉義市ニ修学旅行
九、一一、二六	講習会	郡下中堅青年農事講習会開催
九、一二、一〇	見学	ギヤングブラウニ依ル看天田改良見学（潭頂）
一〇、一、二三	奉迎	李王琅殿下奉迎。
一〇、一、二七	記念式	実業補習教育五十週年記念式挙行。
一〇、一、二七	品評会兼展覧会	創作品展覧会並ニ農産物品評会開催
一〇、二、一	遙拝	芝山巖祭典ニ付キ生徒ニ対「スル」シ一場ノ訓話ナシ後台北ニ向ヒ遙拝ヲナス。
一〇、二、七	採血	本日第三時限ニ全校生徒ニ対シ麻病防遏採血ヲ行フ
一〇、二、八	黄牛分婉	飼養セル牝牛ヨリ壹頭分婉（牝）
一〇、二、九	種豚購入	種牝豚壹頭二十二円（百七十斤）ニテ購入
一〇、二、一〇	来校者	東石郡農支会技術員陳氏本校視察ノタメ来校
一〇、二、一一一〇	実習事項	榕樹挿木既肥製造□棉甘蔗補肥培土鶏豚舎修繕、第一期作水稻田植（一甲歩）
一〇、二、一一	挙式	午前八時ヨリ公学校ニ至リ紀元節祝賀式挙行式後小学校ニ至リ 天皇皇后両陛下ノ御真影奉拝ヲナス
一〇、二、一七	建国祭	紀元節祝賀式後公学校々庭ニ於テ官民参列下ニ建国祭並ニ旗行列挙行セ（ヘラ）ル 式後全校生徒相撲大会ヲ開催
一〇、二、一七	挙式	本日祈年祭ニ付職員生徒新化社ニ於テ催シタル式典ニ参列
一〇、二、一一二〇	実習事項	果樹定植、飼料作物甘藷定植、鶏運動場製作、水稻補植、麦收穫
一〇、二、一二二	訓話	肉弾三勇士戦死日ニツキ朝会時訓話ヲナス
一〇、二、一二三	記念写真撮影	本年卒業並ニ修了セル男女生ニ対シ記念撮影ヲナス
一〇、二、一二二八	実習事項	葱畑整地、豚舎修繕、黄麻畑設計、甘蔗園跡仕末
一〇、二、二六	賞品注文	本年卒業並ニ修了式ニ於ケル賞品ノ注文ヲナス
一〇、三、一	訓話	基隆御入港ノ 伏見、朝香、久邇、三宮殿下御動静ニツキテ
一〇、三、二	講演	公学校ニ梁宰氏ノ滿洲状況ノ講演アリ生徒一同聴講ニ参加。
一〇、三、六	地久節	久邇宮邦久候御逝去ニツキ 皇后陛下ニハ本日ノ御内宴ヲ御取止メコトニツキ訓話
一〇、三、六	産業組合記念日	街組合書記ヲ招キテ産業組合ニ関スル講話ヲナシタリ
一〇、三、一〇	陸軍記念日	本日ノ陸軍記念日ニ関「スル」シ当校ハ左記ノ行事ヲナス
一〇、三、一一一〇	実習事項	一、国旗掲揚、二、職員非常召集ニ参加、三、テニス大会 四、燈火管制 水稻田耕除草、黄麻畑整地、小麦刈取、飼料園整地

一〇、三、一四	謝恩会	午後七時ヨリ本年卒業セル生徒ノ謝恩会アリ全職員ヲ招カル
一〇、三、一五	卒業式	午前十時半挙行、庶務課長郡守代理トシテ御臨席
一〇、三、二〇	遠足	職員生徒一同湾裡製糖所ニ見学遠足
一〇、三、二一	神社参拝	本日春季皇霊祭ニツキ国旗掲揚 午後二時ヨリ新化社参拝
一〇、三、二三	終業式	午前十時ヨリ第三学期終業式挙行 校長代理ヨリ一場ノ訓話アリ
昭和十年四月二日	始業式	午前十時挙行
〃	職員会	午前十時半挙行
一〇、四、五	転勤	田中助教諭東石農補へ転勤発令
〃 六	入学式	午前十時新入生入学式挙行
〃 八	告別式	午前八時田中助教諭告別式挙行
〃 一二	新任	女子技芸講習所講師郡山八重子氏新任式
〃 〃	科外講話	新化郡属近藤氏ノ講話アリ
一五	職員会	午後一時ヨリ挙行
一七	大掃除	午前八時ヨリ校舎校庭寄宿舎大掃除
一八	科外講話	郡属近藤氏産業講話アリ
〃	身体検査	昭和十年度生徒身体検査施行
二九	挙式	天長節挙式（公学校ニ於）
一〇、五、三	送別会	前講師大室勝子氏送別会
一〇、五、六	訓話	端午ノ節句ニ就イテ
七	職員会	午後一時開催
二三	訓話	嘉義飛行聯隊設置決定ニ就イテ
二七	〃	海軍記念日ニ関シテ
一〇、六、一〇	〃	時ノ記念日ニ関シテ
一七	挙式	午前九時郷土室ニ於イテ始政記念日挙式
一九	職員会	午後零時半ヨリ職員会開催
二六	訓話	皇太后陛下秩父宮殿下御誕辰日ニ関シテ
一〇、七、九	訓話	七夕祭ニ就キ講話ヲナス
一二	〃	静岡地方大震災ニ関シテ講話ヲナス
一三	〃	盂蘭盆ニ関スル講話ヲナス

一〇、八、二	講習会	本日ヨリ一ヶ月間農家青年講習会ヲ開催ス
一一	体操	ラデオ体操ノ会ニ出席
一〇、八、二七	講習会	全職員地方制度講習会出席
三一	総会	新化郡教育総会ニ出席
一〇、九、一四	巡視	台南州地方課長本校巡視
一〇、一〇、二〇	祭典	新化社大祭、宵祭、奉祝提灯行列ニ参加ス（奉祝運動会参加）
一一	〃	新化社祭典ニ参列、授業休
一二	〃	午後四時定例職員会開催
一三	職員会	國分助教諭「産」畜産研究授業
一五	研究教授	朝会時台湾神社祭ニツキ訓話ヲナス
一八	台湾神社祭	教育勅語御下賜記念日ニ付左記行事ヲ行フ
三〇	教育記念日	一、勅語捧読式、二、綴方当選者受賞式、三、宣伝ポスター配布
一〇、一一、一	訓話	熱田神宮遷座式ニ付朝会時訓話ヲナス
三	挙式	明治節祝賀式挙行
五	旅行	本日ヨリ向フ四日間生徒五十一名台北ニ修学旅行ヲ行フ
一〇	挙式	国民精神作興詔書御下賜記念日ニ付街主催記念式ニ参列
一一	奉仕作業	国民精神作興週間ニ就キ一同道路開鑿ニ参加
一五	研究授業	高野助教諭第一学年国語科研究教授ヲ行フ
二二	選挙	地方制度改正ニ於ケル選挙ニ関シ訓話ス
二八	遙拝	午前七時五十七分第二皇子殿下御降誕ニツキ謹話シ一同遙拝万歳三唱ス
一〇、一二、二	視学巡視	作佐部視学本校巡視
三	訓話	朝会時第二皇子殿下御命名ニツキ謹話ス
四	研究授業	郭助教諭第二学年書方科ノ研究授業ヲ行フ
四	御命名式	本朝六時半公学校校庭ニ於テ街主催ノ御命名祝賀式挙行一同参列ス
一〇	出張	坂江校長、郭助教諭兩名督府主催全島実業補習教育研究会出席ノタメ萬丹農補ニ出張
一四	義士会	義士精神ニツキ朝会時訓話ヲナス
一五	馬受領	高野助教諭台南ヨリ無償配布ノ馬受領
一六	講話	郭助教諭生徒一同ニ対シ萬丹農補概況ニツキ講話ス
二〇	職員異動	高野助教諭本日付嘉義郡役所ニ州産業技手トシテ転勤

二五	二〇	二〇	一一	一一	〃	〃	一〇	一一、三、三	〃	二七	一一、二、二四	一八	一七	一四	一一、二、一一	二八	二七	二三	一四	九	六	三	一一、一、一	二八	二六	二五	二三
終業式	視察	訓話	講話	卒業式	謝恩会	記念植樹	記念日	雛祭	農夫死去	訓話	全前	農業経営審査	祈年祭	来校者	挙式	訓話	道路補修	出張	視察	訓話	始業式	備品整理	挙式	終業日	告別式	訓話	懸賞募集
終業式挙行	押見州技師本校試作ノ蓖麻視察ニ来校	春季皇霊祭ニ就キ訓話ス	独逸ラインランド占拠事件ニツキ講話	第九回卒業式挙行、郡守外多数来賓アリ	生徒発起ノ謝恩会開催	本年卒業生ノ記念植樹ヲ行フ	陸軍記念日ニ付職員街主催ノ祝賀会ニ参加	桃ノ節句ニツキ祝餅ヲ生徒ニ分ツ	午後九時農夫、陳仙死去、二九日生徒代表会葬参列	二・二六事件ニ就キ訓話ス	卒業生農業経営審査ノタメ郭助教諭本日ヨリ五日間平地方面出張	午後二時郡主催ノ祈年祭ニ列席ノタメ一同新化社へ	紀元節祝賀式挙行、午後街主催建国祭ニ参加	台湾歩兵第二聯隊將兵五十名来校休憩ス	午後二時郡主催ノ祈年祭ニ列席ノタメ一同新化社へ	卒業生農業経営審査ノタメ國分助教諭五日間山□方面出張	農業経営審査ノタメ郭助教諭本日ヨリ五日間平地方面出張	午後九時農夫、陳仙死去、二九日生徒代表会葬参列	桃ノ節句ニツキ祝餅ヲ生徒ニ分ツ	陸軍記念日ニ付職員街主催ノ祝賀会ニ参加	本年卒業生ノ記念植樹ヲ行フ	生徒発起ノ謝恩会開催	第九回卒業式挙行、郡守外多数来賓アリ	独逸ラインランド占拠事件ニツキ講話	春季皇霊祭ニ就キ訓話ス	押見州技師本校試作ノ蓖麻視察ニ来校	終業式挙行

○		◎
一一、七、一〇	一一、五、二	一一、三、三一
一一、六、二一	一一、三	二六
二八	二四	移転
一七	二七	来校
一五	〃	砲兵隊八十名来校
一〇	〃	技芸講習所公学校ニ移転
	〃	前小学校小使力萬順本校農夫トナル
	〃	午前八時第一期始業式挙行
	〃	新化公職員四名転出ニ就キ送別会開催
	〃	生徒一同烏山頭ニ行苗木ヲ採取シ虎頭埤ニ植エタリ
	〃	山口助教諭本日着任
	〃	職員宿舍ノ大清潔施行
	〃	職員宿舍ノ大清潔施行
	〃	第十一回新入生入学式挙行、郡守外來賓多数
	〃	新任藤田知事初巡視ヲナス、随員、地方課長、勸業課長、教育課長以下数十名
	〃	農会ヨリ種諸六品種受領
	〃	行啓記念日ニ就キ訓話ヲナス
	〃	昭和十一年度教育総会ヲ小学校講堂ニテ開催職員出席
	〃	結核予防デーニ付講話ス尚日光消毒ヲ行ハシム
	〃	春季身体検査施行
	〃	天長節ニツキ祝賀式挙行
	〃	校長、山口助教諭歴史編纂趣意書説明会ニ出席ノタメ嘉義市へ出張
	〃	三原州視学午後五時五十分本校視察
	〃	鶏舎建築起工、総工費五百円
	〃	海軍記念日ニ就キ安平ニ遠足
	〃	押見州技師蒞麻視察ノタメ本校視察
	〃	時ノ記念日ニツキ訓話ス
	〃	第二学年肥料ノ研究授業ヲ山口助教諭行フ
	〃	始政記念日祝賀式挙行
	〃	鶏舎本日落成
	〃	國分助教諭本日ヨリ向フ一ヶ月間内地へ学事視察ノタメ出張
	〃	午前九時ヨリ第一期終了式挙行
	〃	終業式
	〃	出張
	〃	鶏舎竣工
	〃	挙式
	〃	研究授業
	〃	記念日
	〃	視察
	〃	遠足
	〃	建築
	〃	巡視
	〃	出張
	〃	天長節
	〃	身体検査
	〃	予防デー
	〃	教育総会
	〃	行啓記念日
	〃	種諸
	〃	巡視
	〃	入学式
	〃	大清潔
	〃	着任
	〃	愛林デー
	〃	送別会
	〃	始業式
	〃	任命
	〃	移転
	〃	来校
	〃	遙弔式

○		
二一	出張	坂江校長対岸視察ノタメ本日午前十時出發、二十三日歸校
二二	全	郭助教諭台北帝大主催農業講習ニ出席ノタメ出張、二十四日歸校ノ予定
二六	会誌配布	農専会報第一号ヲ編纂旧職員並卒業生ニ配布ス
一一、八、一	發会式	郡主催青年農事講習会發「開」会式ヲ午前十一時ヨリ施行、講習員二十八名
六	病害予防	二期作水稻病害ニ罹リタル故ボルドー液並石灰撒布
八	艦隊拝觀	郭助教諭青年団員二十八名ヲ引率シ、高雄ニ軍艦見學ス
一〇	ラヂオ体操	街主催ラヂオ体操會ニ青年団員、生徒、職員参加ス
二〇	苗木採取	青年団員、生徒全部、國分助教諭引率ノモトニ烏山頭へ苗木採集
一一、八、二三	馬蹄裝調	馬蹄裝調ノタメ第二聯隊曹長來校、生徒一同見學
二五	閉会式	午前十一時ヨリ青年農事講習會閉會式舉行
一一、九、一	始業式	始業式舉行
〃	視察	棉指導団本校ニ設置ノ件ニツキ州ヨリ田島次夫氏來校
四	備品検査	近藤郡属並街役場吏員六名來校、備品検査ヲナス
一二	訓話	釈放者保護デーンニツキ訓話ス
一七	來校者	藤田知事旧糖業科土地問題ノ件ニツキ午前八時半來校
一八	記念日	滿洲事變記念日滿五周年ニツキ記念大會開催
一九	視察	東石農業実修學校校長石川氏來校
二五	訓話	十一年度陸軍特別大演習ニ天皇陛下北海道ニ涉ラセラル
二七	視察	北港郡街庄長一行六名本校視察ノタメ來校
三〇	觀月會	本夜觀月會ヲ開催ス
一一、一〇、二	奉仕作業	小学校ニ於ケル郡下國語演習會場設置作成ノタメ全体师生応援ニ行ク
一一、一〇、九	講演	午後一時ヨリ武徳殿ニ修養団講師赤坂氏ノ講演ヲ聴ク
一二	校外実習	キャッサバ栽植実習ノタメ郭助教諭引率ノ下ニ礁坑子へ行ク
一三	懸賞募集	火災防止ニ関スル宣伝ポスターヲ募集ス
一五	校外実習	第二学年キャッサバ栽植実習ノタメ礁坑子へ行ク
〃	視察	山田、磯両技師棉作視察ノタメ押見技師ノ案内ニテ本校へ
二〇	運動會	新化公校庭ニ於テ新化社大祭奉祝運動會開催一同参加ス
三〇	勅語奉讀式	教育勅語御下賜記念日ニ付午前九時ヨリ勅語奉讀式ヲ行フ

一、一、二	遠足	生徒一同台南へ遠足
三	挙式	明治節ニツキ祝賀式挙行
七	装蹄見学	嘉義憲兵隊員馬ノ装蹄ノタメ来校
八	巡視	鶴内務部長初巡視ノタメ来校
一〇	奉読式	街主催国民精神作興詔書奉読式ニ参加
一、二、四	出張	総督府主催全島補習学校研究会出席ノタメ三名花蓮港へ
一〇	出迎	郡役所前ニ新任川村知事ノ出迎ヘヲナス
一二	研究会	州下実業補習教育研究会出席ノタメ三名嘉義商工校へ
一八	視察	陸軍航空本敵會計課長石毛長蔵氏外三名鹿麻視察ノタメ来校
二八	終業式	午前十時ヨリ第二学期終業式挙行
一、一、一	挙式	新年祝賀式挙行
六	始業式	午前九時ヨリ第三学期始業式開始
〃	視察	安平カストル会社高田道信、山田千太郎、岩切武一郎諸氏来校
一六	全	大蔵省資源局部長、海軍省、陸軍省、農林省、衛生局等ヨリ鹿麻視察ノタメ多数来校
二、一	訓話	芝山巖祭ニ就キ訓話ス
三	講話	神田龍誠氏ノ軍事講話アリ一同聴講
五	研究会	東石郡蒜頭公学校ニ州主催農業研究会開催、郭助教諭出席
五	巡視	郡守庶務課長本校鹿麻栽培状況視察
九	観劇	和製チャップリ(ン)事牧十五氏ノ小劇ヲ見ル
一一	挙式	紀元節祝賀式挙行
一二	審査	卒業生農業経営状況審査ノタメ職員交互十日間郡内ニ出張
二四	撮影	第十回卒業記念写真ヲ撮影ス
二八	予算会議	昭和十二年度本校予算会議ヲ新化街役場ニ開催
一、三、一	訓話	納税ニ関スル訓話ヲナス
六	〃	地久節ニ関スル訓話ヲナス
一一	卒業式	午前十時ヨリ第十回卒業式挙行
二〇	訓話	春季皇霊祭ニ関シテ行フ
二四	終了式	午前十時ヨリ第三学期終了式挙行
一、四、一	始業式	昭和十二年度始業式ヲ行フ

二、四、三	訓話	神武天皇祭ニ就キ訓話ス
四	全	愛林日ニ就キ訓話ス
五	入学式	新入生三十二名ノ入学式ヲ行フ
二七	訓話	靖国神社祭ニ就キ訓話ス(大祭)
二九	挙式	天長節祝賀式挙行
三〇	訓話	建功神社祭ニ就キ訓話ス
二、五、五	訓話	「子供ノ日」ニ就キ訓話ス
八	映画	楠公父子ノ映画ヲ公会堂ニ見ル
二七	遠足	海軍記念日ニ就キ台南市ニ遠足
二、六、一―七	航空愛国週間	航空機ノ重要性ヲ説明シ愛国切手葉書ヲ購入ス
一〇	記念日	時ノ記念日ニ就キ訓話ス
一五	講演	棉作ニツキ台南試験場長三浦技師ノ講演ニ職員生徒出席
一七	挙式	始政記念日祝賀式挙行
二、六、二三	訓話	夏至ト農事ニ就イテ
二、七、三	体育会	郡主催体育会公学校ニ挙行
一〇	終了式	第一学期終了式ヲ八時半ヨリ挙行
一二―一六	講習	台湾博物協会主催ノ講習ニ國分助教諭出席
二八	音楽会	南師校友会音楽部主催ノ音楽会公会堂ニ開催生徒出席

本校概況

縣立新化初級農業職業學校

一、學校現況

- 一、沿革
- 1. 民國十五年四月一日創立校名稱爲新化農業補習學校修業年限二箇年
- 2. 民國二十年二月十六日改稱新化農業專修學校

- 3. 民國二十八年九月十三日學則改正修業年限三箇年
- 4. 民國二十九年三月二十六日改稱新化專修農業學校
- 5. 民國三十四年十二月三日移管接收
- 6. 民國三十五年二月一日改爲台南縣立新化初級農業職業學校

二、現在學級數及學生數

種別	一年	二年	三年	計	備註
班級數	二	一	一	四	
學生數	九一	四八	四〇	一七九	

三、過去畢業生數

種別	年別	性別
本省人	男	民國三十年以前 民國三十一年度 民國三十一年度 民國三十一年度 民國三十三年度 民國三十四年度 民國三十五年度 計
	二四二	三四
	三三	三九
	五〇	五〇
	三五	四八三

四、教職員一覽表

職名	姓名	籍貫	担任學科	到校年月	備註
校長	王萬全	台南	公民	民國三十四年十一月	
教員	林滄海	全	歷史、地理	〃 三十五年五月	兼教務主任
全	鐘順吉	全	英語、博物	〃 三十六年十月	兼事務主任
教員	方亮	台南	畜牧、蔬菜、花卉	民國三十六年九月	兼實習主任
全	周金源	全	體育、生理	〃 三十六年一月	
全	周逢傑	全	數學、理化	〃 三十五年四月	
全	林仁德	全	特作、普作	〃 三十五年四月	
全	王寶川	全	加工、林業、農經	〃 三十六年八月	
全	馬星範	四川	國文、童子軍	〃 三十六年二月	
幹事	陳清川	台南		〃 三十六年二月	
書記	梁慎祥	台南		〃 三十六年二月	

助理員

五、校舍宿舍

種別	辦公室	教室	圖書室	儲藏室	值夜室	校長宿舍	衛生室	教職員宿舍
室數	一	四	一	一	一	一	一	二棟(九戶)

六、寄宿舍

種別	寄宿舍	廚房	浴室	膳房	炊婦室	廁所	網球庭
室數	一棟(十二室)	一	一	一	一	一	一

七、農業實習設備

種別	農機具室	加工室	堆肥舍	豚舍	雞舍	溫室
室數	三	一	一	一	一	一

八、校地及農場

種別	建築物敷地	水稻區	蔬菜園	輪作區	飼料園	果樹園	植物苗圃	其他	計
面積	二、八五二	三、八三五	一、〇八九	二、四〇〇	一、五二七	〇、三三三	〇、三六二	〇、一二七	一一、五二五

二、三十六年度校務實施計劃

本校爲使本學年度學校工作順利進行各得以圓滿進展特依據各項議規學校具備條件以及斟酌當前需要訂定本計劃付諸實施

一、關於學校行政方面

- 1、調充人事健全行政組織以期增進工作效率
- 2、組織學校行政系統
- 3、擬訂各種重要規章

4、訂定學校行政歷

5、舉辦教職員國語講習班

二、關於教務方面

1、實行國語教學

實行禁止使用日語教學各科教師必須採用國語講授

2、嚴格考查學生出缺席

對學生之出席及缺席決加嚴格考查藉以矯正過去懶惰之惡習

- 3、注意教學進度
依照進度教授完
- 4、編譯教材

實科方面教科書過去係沿用日人教本、本校由各担任教師翻譯或編成講義以利教學

- 5、增闢圖書室

特名科原有圖書進中管理并添購各種書報以便學生閱覽增進學生知識

三、關於訓導方面

- 1、學生個別調查

舉行學生個別調查一次以為訓導之根據

- 2、加強學生管理

擬訂通學生及寄宿生管理辦法并付實施

- 3、注重精神訓練

利用升旗及週會時間作精神講話以冀確立三民主義之信仰

- 4、鍛鍊學生体格

體育練習、貫徹衛生常識及定期舉行体格檢查

- 5、指導學生組織學生自治會

為養成學生自治能力訓練作事技能特指導學生組織學生自治會

- 6、舉行各種競賽會

舉行國語演講球類及作業比賽等

四、關於實習方面

- 1、添購農器具

- 2、布置校園

將原有學校園重行規劃使學校美觀化

- 3、整理農場

- 4、培養各種畜牧

五、事務方面

- 1、處理教職員的簽到、日夜值勤怠

- 2、處理文書

- 3、購買品處理

- 4、處理會計收支出納

- 5、校產保管

臺南縣立新化初級農業職業學校概況

甲 學校概況

- 一、地址：台南縣新化鎮東榮里一七四號

二、沿革：（一）、本校創始于民國十五年四月一日校名為台南縣新化農業補習學校修業年限為二年于民國二十年二月十六日又改稱為新化農業專修學校二十八年九月十三日將修業年限改為三年制迄台灣光復始於卅四年十二月三日移管接收

（二）、民國卅五年二月一日改為台南縣立新化第一初級農業職業學校仍為三年制後于卅八年二月一日改稱為台南縣立新化初級農業職業學校蓋自本校創立迄今已有二十五年矣

職別	姓名	籍貫	學歷	簡歷	到着年月日	担任學科	教學時數
校長	丁春波	遼寧省	東北大學畢業	國立西北醫學院教授 四川省立教育學院教授 中正大學教授兼教務長 東北政務委員會專門委員	三八、八、八		
教員兼教導主任	張立成	河北省	河北農業專科學校畢業	中學教員及實習主任	三九、二、二〇	稻作學病虫害 農業土木	一八
教員兼事務主任	劉哲人	遼寧省	國立長春大學畢業	南京中央林業實驗所技官 東北初級教員	三九、五、一	測量、英文	一八
教員兼實習主任	孫建農	山東省	北京大學農學院畢業	松北聯中教員 北平志成中學教員	三八、二、一九	特用作物 作物概論	一九
教員	莊騰租	遼寧省	國立東北大學法商學院政治系畢業	遼寧省立第四中學訓育主任 東北大學講師兼訓導員	三八、九、一六	國文、歷史、公民	一六
〃	張毅忱	安東省	東北農林專科學校畢業 北平鐵路學院畢業	安東省立恒仁縣職校校長 國立中央大學合作社業務主任 安東省撫松縣々々長	三八、八、一〇	國文、歷史	一四

四、教職員一覽表

校地					
種別	數量	建築用地	運動場	實習地	其他
		一一、九五八、五三坪	三、〇五〇、〇〇〃	九、二〇甲	二、七八五、〇〇坪
計					一七八二〇、五三坪 九、二〇甲
校舍設備					
種別	單位	數量	容納人數	辦公廳	教室
	間	四	四〇人	三〇〇〃	一五〇〃
遊藝室	棟	六	一五〇〃	四	三〇〃
倉庫	棟	一	五〇	一	一〇〇
飯廳	棟	一	一〇〇	一	二〇
實驗室	棟	一	二〇	一	二〇
圖書室	間	一	二〇	一	二〇
宿舍	棟	四	一五〇〃	四	三〇〃
圖書室	間	一	三〇〃	一	二〇
遊藝室	棟	一	一〇〇	一	二〇

三、校地及校舍面積

五、歷屆畢業生数

職別	姓名	籍貫	學歷	簡歷	到着年月日	担任學科	教學時数
〃	張□（破損）華	遼寧省	長白師範學院畢業	長白師範學院助教	三八、一二、二〇	物理、化學、植物	一八
〃	鍾順吉	台灣省台南縣	日本明治大學畢業	中學教員及教務主任	三九、三、一	英文、代數、算術、農村副業	一九
〃	丁□	安東省	遼寧省立師範專修科數理系畢業		三八、一〇、一	國文、幾何、体育、童子軍	一九
幹事	苗景隆	遼寧省	北平朝陽學院肄業	國立第四中學會計佐理員 台南市立初級中學教員 兼出納組長	三八、一〇、一		
書記	何今□	台灣省台南縣	國校高級班畢業	總督府糖業試驗場雇員 汽車公司書記	三七、一、二〇		
助手	陳海塗	全	新化初農畢業		三八、八、一		

六、班級及學生数

年別	人數	年別	人數	年別	人數	年別	人數	年別	人數
民國三十一年以前	三四八	民國三十三年度	五〇	民國三十四年	一四四	民國三十五年度	九七	民國三十六年度	一〇九
民國三十七年度	九九	民國三十八年度	一二七	計	九七四				
年級別	組別	學生数	備攷	年級別	組別	學生数	備攷	年級別	組別
一年級		四〇		三年級	甲組 乙組	三三二 二九		二年級	
二年級		四一		計	四	一四二			

室數	種別	農具室	堆肥舍	畜舍	鷄舍	溫室	農產標本室	花棚
		三間	二間	一棟	一間	一棟	一間	二架

十、實習設備

年級	職業			
	一年級	二年級	三年級	合計
農業	三三二	三五	四六	一三三
公務員	六	五	七	一八
商			一	五
工	二			二
其他			四	四
小計	四〇	四一	六一	一四二

九、學生家長職業別

年級	年齡			
	一年級	二年級	三年級	合計
十四	七			七
十五	三一	六		三七
十六	二	一八	六	二六
十七		九	三六	四五
十八		五	一二	一七
十九				七
二十			一	二
二十一				一
小計	四〇	四一	六一	一四二

八、在籍學生年齡別

年級	人數				鄉鎮
	一年級	二年級	三年級	合計	
山上		4	7	11	
南化	7	1	6	14	
左鎮	11	4	6	21	
大甲			1	1	
安定	9	4	9	22	
新豐	1		1	2	
善化	1	6	3	10	
麻豆			1	1	
新化	9	11	6	26	
玉井			1	1	
台南	1	1	3	5	
新市		4	6	10	
南安		1		1	
新宮		2		2	
安平		1		1	
噍口			2	2	
永康		1	1	2	
荖拔林			1	1	
林鳳宮			1	1	
高雄		1		1	
台中	1			1	
小計	40	41	61	142	

七、在籍學生鄉鎮別

乙 校務實施概況

(一) 教務方面

一、教務實施方針：本校教務遵照政府法令宣揚三民主義灌輸國家民族思想加強科學知識改進農業技術增進鄉村福利並注重推行國文史地課程提高學生國文程度吸收祖國文化並以鍛鍊健強之體格養成將來為國家盡忠為社會服務之人材

二、教務行政組織：

- 1、教學組 處理研究關於教學事項
- 2、註冊組 辦理統計學生入學出席等事項
- 3、設備組 辦理有關於教學設備事項

三、教學工作：

- 1、訂定教學章則：以供各項教學之參「加」考
- 2、編製學號學籍：以確定學生在學之資格
- 3、充實教學設備：理化器具藥品圖書及農業科標本儀器每期逐漸添設以利教學
- 4、加強研究工作：成立教學研究会討論教材教法以期提高學生素質與向學心
- 5、推行教學進度：教學進度表於開學之初分發各科教師填寫按月核對預定進度與實際進度務求一致
- 6、舉行臨時考試：於每月舉行一次俾明學生每月學習成績用資鼓勵向學之情緒
- 7、注重實驗觀察：教材計畫中指出實驗或觀察宜求理論與事實互相印証
- 8、抽查各科作業：使教與「教」學得以密切聯繫
- 9、指導自動學習方法：以注重學生自動研究提高學習興趣
- 10、慎選師資：專任教員八名均係國內外大學或專科畢業者

(二) 訓導方面

一、訓導實施計劃

本校為嚴格執行部頒訓育法令並行導師制度切實指導學生之思想行為以期養成健全之農業人材與優良之學風特訂定〈此〉計劃

二、訓導目標

- 1、陶冶學生忠孝仁愛信義和平之國民道德
- 2、激「法」發學生之國家民族思想並堅〈定〉學生對三民主義之信仰
- 3、培養學生刻苦耐勞之精神並啟發學生反共抗俄之情緒「並指導」及為國盡忠之大智大勇

三、訓導實施原則

- 1、本校々長及全體教師均以身作则訓導學生並指導其思想及生活
- 2、訓導工作之重心在堅定三民主義之信仰與學風之整頓〈遂〉頒發學生家庭概況調查表藉明瞭學生家庭環境並就學生身心發展情形謀妥善之疏導且與學生家長經常聯絡而對學生之管理訓練均嚴格執行
- 3、訓導工作之推行採隨時隨地因勢力導而身教重於言教〈為〉原則

四、訓導實施辦法

- 1、集體訓練：根據學生各種組織加以指導監督以養成學生自覺自動自治之習慣
- 2、個別訓練：教導處每期均個別與學生話談藉考察其思想行為特長缺點隨時予以指導或糾正之

五、訓導之組織及工作

(A) 生活管理組：設組長一人兼代舍監掌管舍務事宜並依新生活動員法令經常指導訓「導」練學生之生活方式養成良好習慣配合勘亂國策

(B) 課外活動組：設組織一人由童訓教員担任指導學生課餘之活動並按規定項目細則切實推行之

- 1、提倡勞働服務期全校學生養成勤勞與認真服務之習慣
- 2、推行課餘活動規定每個學生只少參加一項運動以調節生活鍛練体魄
- 3、提倡時事研究使學生瞭解國內外之情勢 教導處逐日揭示重要之新聞時事畫報及舉行時事測驗與各項演講等
- 4、強化學生自治組織使學生養成自覺自動自治之風氣提高警覺灌輸國家民族意識減少曠課造成優良之自治精神

(C)、體育衛生組：體育組設幹事一人並增添運動設備及運動器具務使學生体魄雄壯精神飽滿且施行童軍管理藉增青年之進取心（設衛生室）普通藥品應有盡有聘有校醫經常診療

(三)、事務方面

- 一、校地面積：本校校舍佔地一七、八二〇、五三坪、學生實習地九、二甲
- 二、環境衛生及防衛：有見於校舍校園之廣大為整飭環境健康身心及嚴防奸宄曾先後剪修樹木清除雜草整理庭院並於校之四週掘寬二尺深四尺之溝渠藉資防衛

三、修建情形：新建教室一棟計三課室重建前後校門整修與粉刷代用礼堂農具室值夜室閱覽室溫室宿舍倉庫及學生宿舍教職員宿舍等處又因卅八年九月十四日受颱風災害奉准折除代用教「員」室舊儲藏室各一棟並開闢庭院大花壇荷花池體育場及新設藍球場網球場重修乾燥場花棚等工程

四、經濟狀況：本校經費除員工薪餉公費隨到隨發外每月縣撥經費有限且較實際所需數字不敷甚鉅又因學生多係農家子弟為休念其家庭之困苦減輕家長之負擔除所收費用按教育廳規定斟予減低外並設有公

費學生額數由學校供給膳宿並免交學「費」雜各費俾資獎勵而藉體卹放力求農場增加生產俾建校工作得以逐漸加強

(四) 實習農場方面

一、實習土地經營狀況

本校實習土地面積共八、九二四公頃皆為可灌水田劃分下列三種不同性質區域栽培之

- 1、試驗栽培區：共一、五〇〇公頃其中分普作特作園藝作物採精耕栽培制專供學生試驗研究之用
- 2、示範栽培區：共一公頃專栽培適合現地之蓬萊稻原種即嘉南二號嘉南八號
- 3、經濟栽培區：共六、四二四公頃栽培有利作物除供學生練習普通性田間技術外並以生產獲益補助學校經費採粗放制經營

二、實習生編制

本校學生實習組織編成下列三種實習

- 1、團體實習：將全體學生統一分成四個中隊共同管理經濟栽培區
- 2、分組實習：按各年級分別管理試驗栽培區各種作物一年級蔬菜園二年級甘蔗、甘藷三年級水稻
- 3、個別實習：三年級學生除參加團體實習及分組實習外並分配少部分水稻區令其個人分別栽培及管理俾便研究水稻生態及生育狀況觀察比較用以加強其「工」作興趣

新化初農學生生活之一般

〔写真〕

新化初農校門全景

本校大花壇養魚池全景

本校實習農場甘藷試區除草

本校蔬菜園試驗區除虫
本校水稻收穫乾燥場脫穀

〔公文〕

〔新化初農〕

〔^(綴込)〕

〔農場……〕農分別彙集資料〕

〔訓導……莊騰租〕

〔十一、廿七、〕

民國39年11月17日収□□□□□第一五二七號

中學（初中）

農校（初農）〔新化初農〕 校長勛鑒：

女家職

逢啓者本縣前經縣議會議決定編印「台南縣政五年」乙冊，以作各級工作人員今後之參攷。茲已着手收集資料，其中有關於中等教育方面，由本股負責收集，為免太過簡漏，或埋沒各校之特徵起見，故特奉函、敬希將貴校設立經過、概況、行政設施（行政組織、校舍及設備、教職員之變動、^(綴込)字生異動情形、各種會議等）暨其他重大事項，分別以文字（以明白通暢為宜）、圖表、像片、分段分類詳述、造送乙份、於十二月五日以前擲交本股，以便彙編、否則本股以無

貴校資料而不編入、盼勿見怪。特此函達、即希

查照 盼禱 順頌

勛安

台南縣政府教育科中等教育股敬啓

十一月廿三日

台南縣政府 教育科 中等教育股

〔公文稿〕

抽印〔46〕〔43〕份。

収文字號 〔空欄〕

送達機關 本縣各〔新化鎮〔省〕各機關〕公私立中學

文別 函

發文字號（總）字第1160號

附件〔空欄〕

事由 函為本校奉准〔自四九學年度第一學期起〕改為五年制農校、敬

請查照〔出〕指導由

中華民國49年4月23日擬稿

中華民國49年4月23日封發

四・廿三印

校長 劉

一、奉台南縣政府49、4、21南府教中字第25890号令「准台灣省教育廳49、4、2教三字第01168号函畧開『貴屬新化初級農業職業學校自四十七學年度准予試辦五年制農校以來，經本廳派員勘查結果，該校尚能依照本廳所飭各點、辦理、准自四十九學年度第一學期起正式辦理五年制農校、學校名稱准予改為台南縣立新化農業職業學校』。二、〔除新校印啓用日期、俟奉頒後另行函達外、特函〕〔相應〕請查照、〔並請〕指導敬啓：

校長○○○

〔公文〕

台南縣立新化初級農業職業學校

収文 中華民國49年4月22日

字第3866

四、廿二分函查照

□□

臺南縣政府 (令)

受文者 新化初農

抄送副本機關 (空欄)

發文 日期 字號 □□

(49) 4 21 南府教中字第 2 5 8 9 0 號

臺南縣政府印

事由 該校准自四九學年度第一學期起正式辦理五年制農校

批示 (空欄)

擬辦 (空欄)

一、准台灣省教育廳(49)42教三字第01168號函：「一貴屬〔新化玉井〕二初級農業職業學校自四七學年度准予試辦五年制農校以來經本廳派員勘查結果該校尚能依照本廳所飭各點辦理准自四九學年度第一學期起正式辦理五年制農校學校名稱准予改為台南縣立新化農業職業學校台南縣立玉井農業職業學校准為配合課程及實習場妥仍應飭該校繼續將下列三點逐步實施台南縣立新化農〔校〕職：1、繼續充實農藝科目之儀器及標本 2、充實〔三四五〕各年級園藝、加工、家事及農場機具等科之儀器設備及工具 3、增購視聽教育器材 台南縣立玉井農職：1、繼續充實農藝科目之儀器及標本 2、充實〔三四五〕各年級園藝、加工、氣象及家事各科之儀器及設備 二函請查照飭送」

臺灣省臺南縣政府□□□□

縣長 胡龍寶 請假

主任秘書 王維樑代行

台南縣立新化農業職業學校概況

一、校史

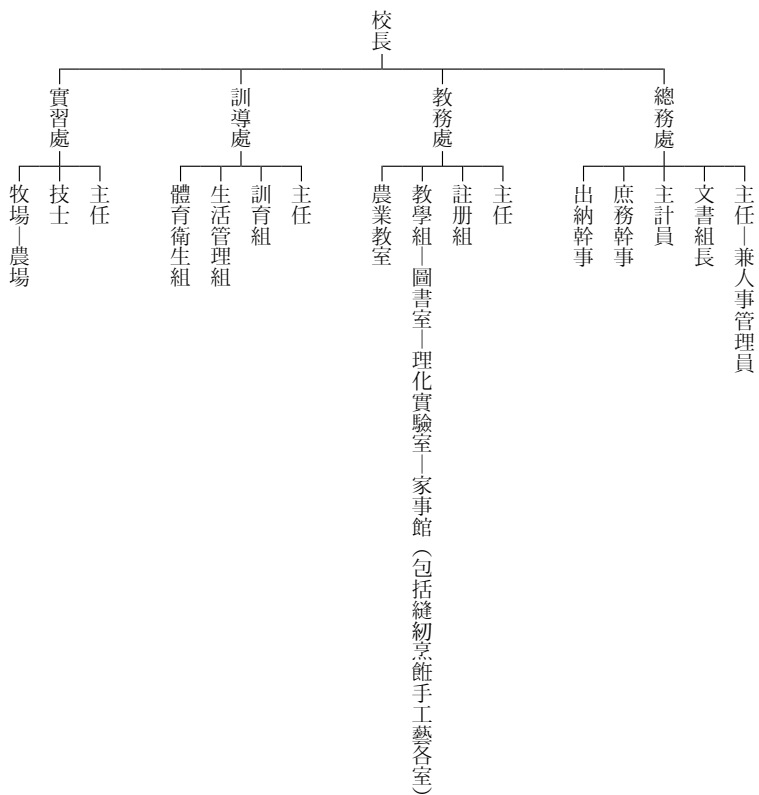
本校創辦於日據時代，原名「台南州立新化農業補習學校」，修業年限二年。時在民國十五年四月一日，為本省成立最早之農校，各方屬望至殷！

民國二十年二月改稱為「新化農業專修學校」越二年七月接收原糖業試驗所並遷入，規模初具，即今新化鎮東榮里信義街之現址也。民國廿四年二月設女子部，二十九年三月改為三年制農校，又廢止女子部。學制一變再變，而歷任校長及教職員多為日人，不容置議，各方引以為憾。逮民國三十四年十月本省光復，始歸國人主持，首任校長為王萬全先生，接辦伊始，筆路藍縷煞費經營。翌年二月易名為「台南縣立新化第一初級農業職業學校」，未及兩載，而王氏請辭，黃碧玉先生出任校長。民國三十八年二月改稱為「台南縣立新化初級農業職業學校」，同年八月黃氏離職，丁春波先生繼任，至四十五年十二月他調，由賈守勗先生接事。民國四十七年八月奉准試辦五年制，兼招女生，又二年六月賈氏復他調，駱美光先生繼長。同年八月正式成立五年一貫制農校，以一至三年為初級，四至五年為高級，允稱農教之一大革新，並正名為「台南縣立新化農業職業學校」，是為本校成為高級農校之始！民國五十年七月駱氏辭職，台南縣政府派王築辰督學兼理校務，同年許溢明先生接長，為時未久，又復他調。現任校長曾迺敦先生於民國五十四年涼秋九月由北門農校調任來校。本校至此，校名凡三改，校長亦八易。

溯本校自創立迄今，作育多士，日據時代畢業學生十七屆。桃李芬芳，譽滿嘉南，而歲月不居，瞬已四十一週年矣！孔子曰：「三十而立，四十而不惑」。本校在此不惑之年，回顧史學之滄桑，瞻念責任之重大，吾人當知所自勉矣！

〈58年八月奉准改為省立新化高級農業職業學校 59年8月再改為〉

二、各處室組織



〔沿革〕

省立新化高級農工職業學校七十一學年度（71、8、1）起改制為省立新化高級工業職業學校

核定文号：教育庁71 6 16 七一教三字第0 5 1 4 5号、

Historical Documents of Shinka Common School and Shinka Agricultural Continuation School: A Step toward Rebuilding Educational History of Colonial Taiwan

Kae KITAMURA*, Satoko HIURA**, Kazuyuki YAMAMOTO***

*Hokkaido University, Graduate School of Education, Assoc.Prof

**National Museum of Japanese History, Research Division, Assoc.Prof

***Tenri University, Faculty of Human Studies, Assoc.Prof

Key Words

history of local communities, educational history of Japanese Empire,
historical school documents, colonization/decolonization, Tainan

Abstract

This volume is reprinting of historical school documents selected from historical archives of two schools, Municipal Hsinhua elementary school and National Hsinhua industrial vocational school, both located in the present-day in Hsinhua district, Tainan city, Taiwan.

In Taiwan, interests in school official documents are rising in recent years. With investigation and arrangement of these documents, studies are being deepened to some extent. In Japan, too, comprehensive investigation on historical documents in each prefecture is being developed from archivist standpoints.

We hope that publishing these documents will contribute to allowing the histories of Taiwan and the Japanese Empire to be studied in conjunction with the historic and bird-eye view of one another.

We are currently surveying documents from throughout the Japanese Empire related to the educational history, with the goal of elucidating the processes of colonization and decolonization in East Asia in ways that are rooted in local communities. This volume is the preliminary publication of our larger project.

As said above, both schools in this volume were now located in Hsinhua district, Tainan. Hsinhua is in about fifteen kilometers to the northeast from Tainan city area. By seventeenth century, there was a village of indigenous Siraya people, and Tavokan-sha (the community of Siraya people) had also been formed in the present-day Hsinhua district. With increase of Han Chinese immigrants later on, Siraya people was obliged to leave there and emigrate to the foot of mountains.

These school archives enable us to understand the multilateral meanings of the elementary and post-elementary education for Hsinhua area.